

曰く、此注甚邪妄説、不可用也、情の字義を解す事、素性氣性に拘はる故也。此句の情と云ふは、春情の事にて、陽氣發生の氣を云へる也。句意は木曾山家の雪中とても、春陽の氣の情は有り難きものにて、雪中より草々も青々と生え抜け出でたるよ、と云へる、春情と詩にも使ふは、春陽の氣を表して云ふ詞也。間關早得春風情と作れるにも知るべし。義仲の墓か畫讚か決せぬ程ならば、何とて此句の注は爲しけるぞや、義仲の墓は江州粟津義仲寺に顯然たり、信州にて粟津の句をせんや、畫讚の體には決して無し。木曾途中の吟なれば題も有る可からず。○按ずるに小文庫序に、史邦云、「木曾の情雪や生えぬく春の草と申されけることの葉むなしからずして、文塚に墳を並べて、風雅を比叡比良の雪に残し給ひぬ」とあるより、此句の木曾は義仲の事と思へるにや。延寶天和の陰ならんには、木曾山の吟にも底意に木曾殿の事を含みたるやも知らず。唐詩選に、易水送別

此地別燕丹、壯士髮衝冠とも有れば、草は雪を生えぬくとや、既に「義朝の心に似たり秋の風」の吟有りける事侍る也。しかれども芭蕉歿して今の世に斯かる推量の沙汰むつかしき解し方は如何にや侍らん。又説叢に云へる陽氣發生の氣を春情と云ふ事、諸生に尋ね侍るに覺束なしと答ふ。間關早得春風情と云へるもやはり其思ひにして人情也。例へば故園情或は離別情など作れるに同じ。説叢には、木曾のなさけと假名にて出だせども、小文庫、泊船集、句選共に眞名にて、情とあり、是を見る時は故園情と云へる如く、木曾の情と音に讀む可きや、斯かる句作の事は、貞享の續虛栗に「菊の情春にあかる、秋もがな 露沾」是等やはり情と讀む句ならんか。虚栗は勿論續虚栗も詩句を切り、入聲に作れる句間々あり。木曾の情も是等の類にはあらざるか知らず。又明詠集に、詩酒春風處々情 菅三品岸柳秋風遠塞情 直幹など、情の事ながら、なさけと假名を付け或はこ



ころと假名付けたるを見ればジャツは音ナサケコ、口は只和訓と見て濟む可きか。しからは今世の諺に、おじひおなさけ也、おなさけの心にとらざる時は、縦令なさけ、と讀むとも害あるまじきや。是を説叢の如く、春情と見る時は、春の情雪や生えぬく木曾の草、と作る可し。去るを木曾の情と置きたれば、木曾山の情と云ふ句に見る方穩かならんか。此句はじめに云へる如く、何れの年にや知らずと云へども、芭蕉傳を見るに、深川六間堀と云ふ所に庵を設けて、天和二年迄在住ありしに、其冬回祿の災にあひて、暫く甲州に赴き、彼國にて年を越え、翌三年の夏末ならんか、深川の舊地へ歸りぬ、とあれば、もしや此甲斐遊杖天和三年の春の吟なるや。○枯尾花の序には、天和三年深川庵焼亡、翌年夏甲斐が根、歸府、菴再建芭蕉野分しての吟有りと記せり。是を見る時は夏秋のみにて、春甲斐遊杖あらざる故春の句有る可きにあらず。又枯尾花の天和三年焼亡翌年とある

芭蕉傳は伊賀桐雨筆記  
桐雨は芭蕉門人、菅菴  
抄に見えたり、  
按ずるに桐雨は芭蕉門  
人に非ず

は天和四年即ち貞享改元の年なり。此元年の秋は古郷伊賀へ旅立ち野ざらし紀行あり。是を見彼れを察するに、秋庵再建直ちに旅立もいぶかし。もしや枯尾花に、天和二年を三年と印板を書損にや。○再考するに木曾の情と讀む可きにや。莊子齋物論に、日夜相代乎前而莫知其所萌、已乎、已乎、且暮得此其所由以生乎、非彼無我、非我無所取、是亦近矣、而不知其所爲、使若有真宰而特不得其朕、可行已信、而不見其形、有情而無形。林希逸注曰、日夜相代乎前造物之往來者也。莫知所萌、言不見其所起之處也。已乎已乎猶今人言是了了、意謂所萌之地雖不可知、然且暮之間不過得此而已。此者造物也。這一此字甚重、不是輕下、非彼無我、這彼字却是上面、此字言非造物則我不能如此。然造物之所爲必因人身而後見、故曰非我無所取、如此說得來、雖若近而可見矣。然其所爲見、使於造物者人實不知之、故曰是亦近矣、而不知其所爲、使真宰造物也。若有者似若有之、而不敢以爲實有也。朕萌芽之地



也、不得其朕、即莫知其所萌也、可行者言天行之可見者也、已信者甚實也、造物之所行信乎有之、而但不見其形、即莫知其所爲使也、有情言有實也、即己信也、無形即不見其形也、自日夜相代以下皆言造物之所爲、雖在面前而人不可見、反反覆覆、細釋許多語句、辭甚切意、甚至蓋欲人於此著意自檢點也、とあり、これに依れば情の字まこと、讀みて、さて萌の意味も春の草によりどころあり、説叢の解に似たれど、春情とは限り難きところならんか、○願賢下語云、桃花春暖盡情開。

無門關白雲抄

よく見れば薺花咲く垣根かな

貞享四年續虛栗集に有り○俳扁鶴に曰く、物好きのよきが上手にて物好のあしきが下手也、利休は茶の道の物好が上手にて、末代其形をあらため難く、私の物數寄にては茶具に用ひられぬ也、芭蕉は俳諧の物好が上手にて名人也、今に其形より句

となり私の道ばかりは俳具満てず、是を學びて句の物好是がよしと定るもの上手とす、南郭先生の句に靜見細艸結實と云ふあり、芭蕉のよく見れば薺花咲くの句と同意也、物好き同じき也、其心の合所を以て思ふべし、物好き是がよしと思ふ場が、名人の一致する所也○按するに、似たる事有り、三昧詩に韓翃細草香閑小洞幽とも見えたり、又舉白集に長嘯子古郷の離は野らと廣く荒れて摘人なしに薺花咲く此歌に依れるやと云ふ人有れど、よく見れば、の五文字に叶ふは俳扁鶴の評ならんか、又白氏文集十五、東墻夜合樹去秋爲風雨所摧、今年花時悵然有感と題ありて、碧第紅樓今何在、風雨飄將去不回、惆悵去年墻下地、今春唯有薺花開、同集七、早春雪消水又釋、景和風復噴、滿庭田地濕、薺葉生、墻根官舍悄、無事日西斜、掩門不開莊老卷、欲與何人言。



菩提山

山寺の悲しさ告げよ 薺掘とろり

貞享五年笈の小文よし野行脚の時の吟也。句は、此山のと見えたり。前書同じ。○伽藍開基記に、和州添上郡菩提山正曆寺、或曰龍樹院、本朝六十六代一條帝正曆年間兼俊僧正奉行造本殿安樂師如來像、乃龍樹菩薩手造而持善無畏三藏來云。

菜島に花見顔なる雀哉

貞享二年の吟也。野ざらし紀行に、吟行と前書有り。大津より水口邊漂泊の間の句と見えたり。○師走帋に、此句に吟行と有り。我身を燕雀のちひさきに喩へて、天地の間も一箇の菜島同然の間也。其間を廣き世界と心を安んじて生涯を送るはいと果敢無く、菜島に花見がほなる雀哉と我身の非を願たる句也。○

甲子吟行此句見えず

山家集

五老井は許六が號

評林に曰、西行の歌に「眞菅おふるあら田に水をまかすれば嬉しがほにも鳴く蛙哉」翁も西行のうれし顔といへる曲を羨まれける由、五老井が説に見えたり。○説叢に、師走袋を難じて云むつかしく取り付て入ほが也。翁の句毎に、我身の観想ばかり吟すべきや。句選にも其外の諸書に吟行の題見えす。是又後人のこしらへ題なるべし。句毎に題をとりてするは初心の輩か、又は下手のする所なり。翁は即興感偶の句あまたあり。初輩の事をもて云ふ可らず。又菜畑を天地と見て心を安んずる程ならんに、何ぞ果敢無き身と非を願んや。安心と云ふものには、いとほかなき身と心を安んじて、其樂しみ清貧也。夫に非を願る事は始め終りの文段叶はぬなり。無理なる注をなす故言語始終貫通せぬ也。○按するに、芭蕉の句多く観想也。天和貞享の頃は別て観想古事古歌謠などの裁入れ多し。到つてやすらかになりたるは奥の細道已後と見えたり。此事は去來抄に「梅白し

芭蕉句選年考



きのふや鶴を盗まれし」の句評に句の體の物ぐるしきは其頃の風なりと見えたり。此句菜畑同時の吟なり。又芭蕉題を取つての句は、素堂が年忘節季候、深川集に有り。又通天橋に、同庵秋の七種其外あまた有り、湖水眺望などある事かぞへ可からず。既に説叢の詞に、感偶の句夥有りと書ける其句に即興とも又は感偶とも前書あらば、是をも題に置きてせし句として後のこしらへものと見る可き也。吟行と有る事師走俗に云へるを強ひて難すべき事にはあらず。又師走袋に云へる燕雀の出所は、史記陳涉世家に曰く、涉少時嘗與人傭耕、輟耕之壘上、悵恨久之、曰、苟富貴無相忘、傭者笑曰、若爲傭耕何富貴也、陳涉大息曰、嗟呼燕雀安知鴻鵠之志哉、と見えたり。其外三國志、杯に謀を論ずるに、燕雀何知大鵬之志、とも見えたり。是は大器量の詞也。此心を取りて師走俗には世にあまたの花盛なるを、此菜畑に過ぎたるはなし、と雀のちひさき、彼の井蛙或は鶻鶻一枝安など

南冥は海、この前に北冥の鯀化して鵬となるの文あり、北冥は北海なり

の思ひを吟じたるとの解ならんか。尤入ほがにやあらんすれども、説叢に、師走俗の説を見る事等閑にや。○又説叢評林を難じて云、評林の注あたる筈は、許六が宇陀法師に云へる所一字も違はず、杉雨が評には非ず。許六が言の如くとも書く可きを、古人の説を盗むは心黒き仕方にも有りける。句意は明らか也。評も注も入らぬ句にて、雀の居所をよく見定めたる即興也。○按ずるに、評林には五老井が説に見えたり、と書き出したるを、説叢に其事を抜きて、評林の注を書出して斯く難する事、若しや寫本にて其事無きの書を見て斯くは難せしや。印板には慥に五老井が説とあり。此句に於ては只眼前の風流と云はんには難なかる可し。されども師走俗に燕雀の事を云へるより説になさば、芭蕉は莊子の句作する事諸集に見えたらば、是をも莊子と見る時は、逍遙遊に鵬之背不知其幾千里也、怒而飛、其翼若垂天之雲、是鳥也、海運、則將徙於南冥、南冥者天池也、下略、又



曰鯛與鷺鳩笑之曰我決起而飛槍榆枋時則不至而控於地而已矣奚以之九萬里而南爲林希逸注曰此段只是形容胸中廣大之樂却設此譬喻其意蓋謂人之所見者小故有世俗紛々之爭若知天地外有如許世界自視其身雖大倉一粒不足以喻之斯く見え侍れば芭蕉は天地の外の世界を知れるや如何

あばらくは花の色なる月夜かな

未知何年也○喪の名残に、花の部に見えたり○花の故事に、或時秋の坊、暫くは花の上なる月夜哉 翁 數度吟じて感に堪へたる風情也ければ、蘇守傍に有て云、此句は眼前の風景のみなるに嘆じ給ふは別に深き味ひ有るにや、秋の坊曰く、在るあり、答へて得べきに非ず、隨類得解の時を待つべしと、席を去る。今に此意を得ず、先生いかんして得べし、北枝曰、我も此句をいだける事久し、翁の「思ふ事ふたつ退けたるそのあとは花の都

發句集に、貞享五年とす、笈の小文に見、喪の名残は元禄九年芭蕉三回忌加州北枝選、花の故事は加州半化坊選也、色なると上なると違ひあり

冬籠は機曉遊、夏浪序あり

も田舎なるらむ」と詠み給ふ俳諧の歌を聞きて、意を明らめ侍る、汝も此歌を吟じて知るべしと、蘇守言下に會して、いよいよ蕉翁の高風を尊みけるとなん○冬籠集に、五文字の、しばらくは、と云へるに風情有りて、人に盛衰花に開落の常なる、其榮も此枯も浮世のありさまは暫く也、爰を吉田の法師も徒然の心法の大事として暫樂の二字を残せり、されば、しばらくは、と云へる風情に、花の雲のかをれる上を留らで行く月の風姿の見ゆるを、情中の姿と云ふべし○按ずるに、檜垣の女家集に、櫻の花の家にいみじう咲けりしに、月さへわりなく明かりしかば、獨り眺めて、月影を色にて咲ける櫻花雲がくれなば散りぬとやいはん」とあり、此歌を以て見る時は月のさやかなる夜には櫻の白きを、月の影の色にて咲けるとも見侍りけるを、聽て月に雲のかゝりぬれば花も見えずなり侍るを雲かゝらば夫を散りたるかとも云はんかとの歌を、それには事かはり、是は花



盛りの暮方、月は出で花の色は晝のまゝに見え侍れども、程なく夜に入り侍れば、月の光りに奪はれて、花の色も月の色になり侍る、しかれば月に雲のかゝりかゝらぬは空の定めなき事ながら、夜になれば又月の傾くは定めたる事なれば、光陰の早きに觀じ侍るならん。

躑躅生けて其陰に干鱗裂く女

貞享二年の吟也、野ざらし紀行に晝の休らひとて旅店に腰をかけて、と詞書有り、大津より水口に出る道の程の吟と見えたり。○或人曰く、江州石部茶店にて、と前書ありと云云

大和行脚の時

草臥て宿かるころや藤の花

貞享五年の吟也、笈の小文、よし野行脚の時の句にして、其紀行

鼎をかきならして、前  
漢書高祖本紀の故事か

の文に曰く、旅の具多きは道のさはりなりと物皆拂ひすてたれども夜の料にと紙衣一つ合羽やうのもの硯筆紙薬に晝筭など物に包んでうしろに背負ひたれば、いと、腰弱く力なき身のあと様にひかふるやうにて道なほ進まず、只ものうき事のみ多し、とありてこの句見えたり。○頭陀物語に、或人翁に物語りけるは、貴坊は宗祇のあとを追ひ雲に別れ水に伴ひいづちを宿と定め給はず、行脚いづれの日かをかしかりし。翁ほは笑み給ひて、旅せぬ人はさこそ思はめ、行脚は苦樂を翼とす、けふは晴れて笠軽く、けふはしぐれて袖重き、緞子の夜着、草の枕ひさかはり移り行くも固よりこそおかしけれ、奥の細道降りつゝきて泥にとりつく杖を力に、曾良は疲れて行くべくもあらず、我は笠島を見んといふ、同行も又腹あしき事あり、況んや煤拂に居所をおはれ、或は鼎をかきならして惜げなき日もあるぞとよ、旅は彌生の末つかた、卯月半こそけしき立ちてお



ほゆ、一歳大和路に分け入りて負へるものに道をつられ、永き日かげを辿り暮し、某しの宿をからんとするに、村鳥籠にいそぎ、野山はいたう霞みたる、晝にも似たるかなとゆきあひひむかなたの垣に、藪藤のおぼつかなく咲きかゝりたるを見て、くたびれて宿かる頃や藤の花「斯く云ふ句のうかみたる我ながら二なく覺ゆ、これらの氣色、旅の榮花とも云はんか○白氏文集、三月三十日、題慈恩寺、慈恩、春色今朝盡、日徘徊倚寺門、惆悵春歸留不得、紫藤花下漸黄昏○評林に殘花色暮鳥聲と云へる暮春の風情也、行き暮れて藤咲く宿に何となく脚半の紐を解きて旅行の勞れを補ふ也、慈圓の歌に「おしなべて空しき空と思ひしに藤咲きぬればむらさきの門」ふちはむらさきの縁りといへば、旅行のかなしさにはひとしほの花也○赤草紙に、此句始めは、時鳥宿かる頃や、とあり、後直しか○似鳩覺書に、大和行脚の時に、丹波市と云ふ所にて日の暮れかゝりけるに、藤の

長日の趣を詠る歌  
「夕ぐれにおもへば今朝の朝がすみ世をへたでたるこゝちこそすれ  
有家

おぼつかなく咲きこぼれけるを、と前書あり。

### 山吹や宇治の焙爐の匂ふ時

元祿四年の猿蓑に、晝讀と有り○泊船集にも出でたり。

### ほろほろと山吹散るか瀧の音

貞享五年芳野行脚の時の吟也、笈の小文に、前書、西河と見えたり○和州巡覽記に、西河の瀧大瀧ともいふ、此瀧は唯急流にて大水岩間を漲り沸て落つる也、よの常の瀧の如く高き所より流れ落つるにはあらで岩間を漲り沸きて、甚見事なり、近寄りて見る可し、遠くては不堪賞とあり。

### 山吹の露菜の花のかこち顔なるや

延寶九年の東日記に見えたり。



望湖水惜春

行春を近江の人と惜みける

元祿四年の猿蓑に有り、前書同じ○師走俗に曰く、此句は表向は春を近江の人と思ひなして惜たるやうに云ひなしたり。されど題に湖水眺望とあれば、武藏野を出て翌年春江州に留りての句也。去年の頃迄は東都に有りて春をむさしの人と惜みしが、今年はこの近江に有りて近江の人と共に春を惜むとの作也。此句表に切字見え、大概大廻しなど云へる格のやうなれども、句中に慥なる切處有り、數寄の人のために態と略す○按ずるに、芭蕉元祿二年三月東武を立ちて奥羽行脚千住といふ所にて「行春や鳥啼魚の目は涙」の吟有り。翌三年は江南の珍碩と歌仙の吟は「木の下に汁も鱒もさくら哉」是瓢集也。芭蕉傳に曰く、元祿三年の夏、石山の奥に幻住庵を結び、四年の秋迄こ

こにかくれ、此秋庵を出て東武に下ると見えたり。しかれば元祿二年より同四年迄東武に歸らず、是を以て見る時は、師走袋には元祿三年の句とせるにや。珍碩が洒落堂も湖水の邊なれば此句三年なるや。又は師走袋推量のみにて、四年の句なるや、未だ慥ならず。又自得發明辨に、冬平田より美濃を経て東武に赴くよし、李由が明照寺に漂泊の事もあり。笠影集に、神無月の始め月の澤と聞えける、明照寺に羈旅の心を澄して「たふとかる涙やそめて散るもみぢ 芭蕉」一夜しづまる張笠の霜 李由評林に曰く、貫之の歌に「又も來ん時ぞと思へどたのまれず我身にしあれば惜き春哉」斯かる姿もやありなん。行くにあふみの句つゝき妙也。可考事にぞ○句解に曰く、翁石山寺の奥幻住庵に在せる頃、その門人等と春を惜める湖水の眺望也。此句を惜みけり、と出せる集あり。一句の情、惜みけると謂はざれば足らず○説叢師走袋を難じて曰く、注一向取る所なし、兒童

後撰、貫之  
かくて同じ年に身まか  
りぬ



が物云ふが如し、又評林を難じて曰く、引歌似ても似よらず、古來よりの三月盡の詩歌を引合せんに、何れの詩歌とても春を惜まぬやは有る、翁の句毎に古歌をひかん事いかゞ、前にも論ずるが如し、又句解を難じて曰く、幻住庵にての吟と云へるは甚る案也、木曾塚の庵にての吟、是第一の證に疑ひなし、左に記す、合せ見る可し、去來抄に曰く、春も猶昔なるか先師湖南に在して「行春をあふみの人と惜みける」など云ふ句を、大津の尙白が評に行春を近江の人と云はんも行春を丹波の人と云はんも同じ事に侍れば、一句ふりたりと覺えしと申しき、去來汝はいかにと仰せられしを、尙白がことよからず、近江の人とをしみ給ふは湖水朦朧たる折節の住家なればならし、暮春もし丹波に在さば固より此趣向うかぶまじ、歳暮又近江に在さば元より此感なかる可し、風流は自ら其場にあるものを、と申したれば、去來汝は風雅を語るべきもの也、と感賞にあへりけるが、

是第一の證と書きたれども、猿蓑に題芭蕉翁岡分山幻住庵後歌曰、琵琶南國分嶺、斯くある時は幻住庵も湖南也

期詠集 順  
王明八葉之孫撰 徐蔭事之舊草、江淹一時之友集、范別駕之遺文、按ずるに此舊草は庵の草稿なるべしとの事、笈日記に、武の深川に有りしが、去年の秋文月の始ふたゞび舊草に歸

其場と云ふ事を知る可き也、支考が古今抄に曰く、發句の句續よりにをのテニハに心をめぐらす、惣名には大廻しと云ふなり、行春の一章は彼の木曾寺の(是第二の應偶作にて、此句の例の心をかへすに惜みけりと決定しては、平句の難も廻れがたければ、をしみける故に何々として、と下段より心をめぐらせば、句外の意味は知るべきなり、爰に此句の賞する所は、行を逢ふ身と餌詞の法ながら、歌の艶詞のならひたるは、却つて俳諧の曲節とも云ふ可きにや、去りながら此大廻しの格は常蛇の法にも似通ひて、普通の人おそる可き也云云、熟々按ずるに、往昔木曾寺に翁の草庵ありて、義仲の墓とうしろ合せにてぞ有ける、前に引く所の去來抄柳の句評にも、木曾塚の舊草とあるは木曾寺の翁の庵の草稿書と云ふ事なり、其頃の吟に「木曾殿とうしろ合せの夜寒かな」と有りしは、即此庵也、翁滅後丈草こゝに住みぬ、丈草死して後、南の岡へ移して一人の道者住みける、



りて「道ほそしすまふ  
とり草の花の露」とあり、  
其外にも「舊草云々」とある、  
昔古き草庵と云へる事と聞ゆ、  
則木曾塚の無名庵と見えたり、  
枯尾花の序に、木曾殿と墳をならべてとありしはむれも後の語り句とはなれり

是れ何故略したるや、  
書難きことあらば師傳ありと云ふことも書かざる方よかるべし

其後寛保年中後の庵主咄道和尚造營して、今は黄檗派の一宇とぞなれる。寺號は忘れたりしかるに後世に到りて迷ひとなる可き事一あり。實曆のはじめ雲裡坊杉夫が發起にて、彼石山奥の幻住庵のほとりに有りし椎の樹を一もと運び移し植ゑて翁の庵の舊地へ又あらたに庵を作りて、後の幻住庵と呼ぶ。木曾寺の今翁の石碑と並びたり。是等の來歴を知り置く可き事也。扱世に木曾寺と云へば、誰々も翁滅後の事とのみ覺えたる多し。全く在世の時既に此庵有りて、此行春の吟も此庵室にての事なりける。此一件は義仲寺の住職たりし人雲裡坊と同居せしが、武藏に下りて深川に住す、名は陶雅梅月坊と號す。此陶雅予に物語るまゝ、其證跡正しければ爰に記す。支考が木曾寺の偶作と記せしも疑ひなし。湖水眺望の題につきて一の師傳有り、略す。扱石山の奥の幻住庵は紫式部が源氏書きたりし所よりは遙に一里も其余も山奥の在にありて、湖水の見ゆ

猿蓑幻住庵の記  
山は赤中にそぼだち人家よき程に距り南麓峰より下し北風海をひたして涼し比叡の山比真の高れより辛崎の松は霞みこめて城あり橋あり、釣たる舟あり、笠取に通ふ木こりの聲麗の小田にわせ取る唄益飛び交ふ夕暗の空に水鷗のたゞく音楽景物として足らざるといふことなし  
これを以て見る時は湖見えたと聞ゆ、官傳への場迷ひけるにや、ばせなよも文を飾りて虚は書くまじ、湖水見えずとも文は書き方あるべし  
元禄五年の己か光集に木曾塚無名庵に一宿ありて木曾殿と背中をあはす夜寒かな  
同六年桃實集には木曾殿と背中あはする夜寒

る所にあらざる由、陶雅申しき。又源氏の間といふ所も湖水は見えず、一里程も山の岨へ出て舞臺あり、そこは湖水漫々とうけて風景すぐれたり。此處へ出て須磨明石の趣向うかみたるなるべしといひし。木曾寺は湖水前にたゞひて、其頃は市店も稀なれば、湖水を見渡しながらの吟疑ひなし。今は市店前にさゝへ隔て、湖水見えぬ由、陶雅も竹阿も物語れり。蓼太、石山の奥幻住庵にての作と云へども全くの誤り也。○按ずるに、句解に幻住庵にての句とは云はず。在せる頃といへれば、幻住庵にての句とは少ししたがひあらんか、もし幻住庵にての句と心得たらんにはいかゞ、もし蓼太幻住庵にての吟と定めたらんには古今抄に云へるとたがひ侍る。支考が説を取りて蓼太が推量は取り難し。此頃幻住庵無名庵心に任せて遊びたるや知らず。○説叢又曰く、澹齋云ける留の事先達の説を擧げられたれども、和歌にても連歌にてもけるければ上にぞけるこそけ



かな、  
と見えたり

又支

道ばた、道のべの論野  
ざらし紀行滑稽傳、芭  
蕉句選、秘開集、伊達衣  
皆々、道のべ、とあり、  
ばせを筆の甲子吟行の  
序、素堂曰道ばたのむ  
くげこそこの吟行の秀  
逸なるべけれ、とあり、  
其吟行の所には道のべ  
とあり芭蕉素堂現在の  
書又斯く述あり、道の

べ、道ばた、いづれに  
も句意かばるまじきな  
り、  
大まはしは支考が見解  
素丸澹齋支考に敵すべ  
きや、元來大まはしの  
事は連歌の傳なり、  
大まはし、なだまき、う  
ち立て、あまの原見る  
筆はじめ、うち立て、  
筆はじめとまはるなり、  
うもれ木に、たまり  
やせめたまりは致さぬ  
花の露とまはるなり、  
花の露とまはるなり、  
新式「あなたふと春日  
のみかく玉津島」案す  
るに、あなたふと玉津  
島とまはるなるべし、  
「行春ををしみける」と  
まはるにはあらずや、  
又連歌秘傳抄に、大ま  
はしと云事物の名を三  
入候へば切字なくて  
も苦しからぬよし、或  
人申しき、さみだれば  
嶺の松風谷の水」かや

芭蕉句選年考

一九二

れと云抱字なくては必しもおかず。是は極めてけりなるべし。  
それにて随分よくとまり、殊に句意も高く聞ゆべし。ると留め  
たればとて、上へ反り、りと留めたればとて反らぬと云ふ事未  
だ見る所なし。いひ流しにて此身は別て面白く思はるれ。此句  
大廻しの體には非ず、けりと云流しの體にて面白しと云へり。  
予按ずるに、さもこそあれ思ふに近江の人とこそ惜みけると  
云ふ心にて、こそは句中にこめて置きたるかと思はれ侍る。左  
聞けば又けるも可然か。最初はけりにて後に支考など評義し  
てけるに成りたるも知る可からず。道ばたのむくげと云ふは  
最初の五文字なるを、支考などが道のべと直せし類あまた有  
れば、此句のけるも其たぐひにやも知る可からず。大廻しの事  
げにも此句は廻らぬと予も思ひぬ。是はたい心をふくめて心  
切ともすべき也。先達の意推して知り難し。○按ずるに、猿蓑に  
をしみけると慥かに有り。古今抄、又、泊船集、むつ千鳥、扁突、等け

る也。去來抄にけりと有り、然れども去來抄は寫本故體ならず、  
ましてけるけりの論は去來抄には云はず、只一字の書損にや  
も知らず。さればたしかに用ふ可き集にけるとあればけるに  
定め置く可きにや、澹齋が言の如く抱字の論は芭蕉の句には  
勿論、いか程もかへ字有る可きを、抱字なくて作れるあまた  
有り。支考と澹齋いづれかまさる、齋に荷擔しがたし、又説叢に  
こそと入りてけると聞く可き趣を云へる、こそとあればけれ  
と云ふ事童子も知りたる事也。説叢書損にやと思へば、二所ま  
でこそと出せり。是は近江の人とぞをしみけるとその字を入  
れて聞く可しと書きも侍る可きか。しかれども、テニハは歌の  
傳なれば、其道を知らず、其家にあらずして是を論ずるをよき  
人聞き侍らば嘸や笑はん。○白氏文集十五、彭蠡湖晚歸 彭蠡  
湖天晚、桃花水氣春、鳥飛千百點、日沒半紅輪、何必爲遷客、無勞是  
病身、但來臨此望、少有不愁人。又同卷十、春晚寄微之詩 三月江

芭蕉句選年考

一九三



うのまいにてあるべく  
候、秘傳抄は宗紙著述  
なり古今集、

さだときのみこの  
家にて藤原のきよふ  
か、あふみの介にま  
かりける時にむまの  
はなむけしける夜よ  
める、

紀のときさだ  
けふ別れあすはあふみ  
と思へども夜や更けぬ  
らん袖の露けき

又  
さだめなき世にやをし  
まんげふ別れあすはあ  
ふみのわかれなりとも  
漣々云

行春の注てにをばけり  
けるの論甚つたなし、  
大廻し杯笑ふにたへた  
り、又てにをばは歌の  
傳授なれば其道を知ら  
ず其家に非ずして是を  
論するをよき人聞侍ら  
ば嗚や笑はんとは論す  
るに堪たり、俳諧にて

にをばなくば歌にもし  
にをばはあるまじ  
○近江の人とをしみて  
る此ける、里跡ヲシン  
ダコトデアルと云事な  
り  
○けりとあらは近江の  
人とをしんだコトヤヤ  
といふ事なり、是ほど  
の心かばりあり各の論  
カマハライタキコトな  
り  
なのてにをば○里跡ヤ  
ヤノニたとへば琴はひ  
くべき物につくりたる  
物なれば琴をひくとほ  
いふべからずされども  
物思ひにてもありてな  
ぐさめんとて心の外に  
ひくならは琴をひくと  
つかふ所なりと云々  
「行春をあふみの人と  
をしみける」此結びに  
てよろしからん。  
千載集  
花は根に鳥は古集にか  
へるなり春のとまりな

水濶悠悠桃花波、年芳與心事、此地西蹉跎、南國方譚講、中原正兵  
戈、眼前故人少、頭上白髮多、通州更迢遞、春盡復如何。

前途三千里の思ひ胸にふさがりて

幻のちまたに離別の涙をそぐ

ゆく春や鳥啼き魚の目はなみだ

元祿二年奥の細道行脚の句なり。其文に曰く、彌生も末の七日  
曙の空朧々として、月は在明にて光收れるものから、不二の峰  
幽に見えて、上野谷中の花の梢又いつかはと心細し、むつまし  
き限りは宵よりつとひて、舟に乗て送るに、千住といふ所にて  
船をあがれば、前途三千里の思ひ胸に塞がり、幻の巷に離別の  
泪を瀝ぐ、とありて、此句見えたり○泊船集に、此句の詞書、細道  
に有り」と記せり○菅菰抄に云、上野は東都の良にありて山を

東叡と云、寺を寛永といふ、谷中は上野の西感應寺と云ふ、天台  
宗の大伽藍ありて上野に隣る、此兩所には分て花木多く、遊觀  
の地なり、千住は奥州往還最初の驛宿也、前途三千里、此五文字  
は必詩文中の一句なるべし、出所未考、古文前集に此去三千里  
と云ふ意歎、前はス、ムと訓ず、途は道にて、前途は行先と云ふ  
事也、又幻の巷とは經に如夢幻泡影如露亦如電と説て、俗に夢  
の世と云ふ如く、人世のはかなきを喩ふ、又杜甫 春望の詩に、  
感時花飛淚、恨別鳥驚心、文選に、古詩 王鮪懷河軸、晨風思北林、  
古樂府に、古魚過河泣、何時還復入、是等を趣向の句なるべし○  
山家集下卷に、さくら花ちりちりになる木の下に名殘ををし  
むうぐひすの聲○白氏文集十六、山歌猿獨叫、野哭鳥相啼、下略、  
菴礙潮無信、蛟驚浪不虞○古文前集、陶淵明、歸田園居 羈鳥戀  
舊林、池魚思故淵。



行春に和歌の浦にて追付たり

貞享五年芳野行脚の吟也。笈の小文に前書和歌二字あり。○泊船集にも出でたり。○句解に曰、花は根に鳥は古巢に歸るなり。春のとまりやいづくなるらん。此歌を轉じたるなるべし。誠に和歌の浦は山色遠含空海明光見日の瞻望にして、玉津島の瑞籬きよく、春を惜む可きの地也。されば追付たりの言葉力ありて浦山の風色に光をもたせたる所玄妙と云ふべし。○按ずるに、花は根に、の歌を轉じたるやしらす、山家集に「行春をとめかねたる夕暮は曙よりも哀なりけり」。

二月十七日神路山を出るとて

はだかにはまだ衣更着の嵐かな

貞享五年の吟にして、笈の小文に前書伊勢山田と有りて何の

知る人ぞなき 崇徳院  
御製、  
元禄五年三日月日記  
粟浦目指湯 粟堂  
ふとんきてその夜に似  
たる鳥の聲 堂  
わすれば旅の數珠と脇  
巻 芭蕉  
朗詠集  
後江相公 前途程遠馳  
思於雁山之聲  
鴨長明が海道の記事  
湯居蒲原の間千本松の  
跡をかへりみれば前途  
愈々ゆかし、  
金剛經に  
一切有爲法如夢幻泡影  
如露亦如電 應作如是  
觀、古今集  
鳴わたる雁の泪や落ち  
つらんもの思ふ宿の秋  
の白露

道遠院  
「立ち歸り霞風さむみ  
店ころも若さらぎの名  
もしるき空哉」

木の花とは知らず句ひかなの句に並べて見えたり。○笈日記に、西行の涙をしたひ増賀の信を悲しむ、といへる前書ありて此二句あり。○句解に曰、此句は増賀の信を悲しむと云へる詞書あり、此上人道心の思ひ深く、伊勢大神宮に年籠りありて名利を捨よとの示現を蒙り給ひ、小袖皆乞食どもに脱ぎくれて赤裸にて下向し給ひたりと撰集抄に記されたり。只捨て難きは名利なるをや、まだ如月の嵐哉と其信をしたへる、此翁の深志又尊し。○撰集抄に曰、昔増賀の上人といふ人いまそかりけり、いとけなかりけるより道心ふかく、天台山の根本中堂に、千夜籠りて是を祈り給ひけれども、尙實の心やつきかねて侍りけん、或時たいひとり伊勢太神宮へ詣て祈請し玉ひけるに、夢に見給ふやう、道心をおこさんと思は、此身を身とな思ひそ、と示現を蒙り玉ひけり、打驚きておぼすやう、名利を捨てよとこそ侍るなれ、さればよ、とて着玉ひける小袖皆乞食共に脱ぎ



安和上皇は冷泉帝、多武峰増賀、長保五年六月九日滅、年八十七、元享釋書に、伊勢示現の事見えす、

千載集

高野山に住うかれて後伊勢の國二見の浦の山寺に侍りけるに大神宮の御山をば神路山と申す大日如來の御垂跡を思ひて詠侍りける

四位法師

深く入て神路の奥を尋ねれば又うへもなき峰の松風

發句集年號不知

桐火桶、定家卿の作にあらずと耳底記に見えたり

くれて、ひとへなるものをだにも身にかけて給はず、赤裸にて下向し給ひけり○元享釋書曰、安和上皇勅爲供奉、佯狂垢汗而逃去、太皇太后敬事爲師、延宮中、便於采女中出、龜語又罷去、慈慧任僧正入宮、賀謝、翼從甚盛、賀帶乾魚爲劔、乘瘦牝牛、交先驅之列、諸徒叱而去之、賀勵聲曰、僧正之前馳去、我誰乎、聽者笑而伏△増賀常自歌曰、苦哉名利、人樂哉乞食身。

子に飽くと申す人には花もなし

何れの年にや未知、類柑子に見えたり、其詞書に云、桐火桶に、抑貫之が萬葉集には是等ぞまことある歌と云へるに、日くれたり今かへりなん子なくらんその子の母もわれを待つらんとありて此句を載す。

高き屋にのぼりて見ればの

御製のありがたきを今もな

ほ

叡慮にてにぎはふ民や庭窟

延喜式宴和歌にて御製には非ず、賦仁徳と有る由、此句庭窟と云ふ集にあり、其集未だ得ず、今大和の國風に殘れり庭に窟を掘る是にて茶を煎じて大福を祝ふとぞ

何れの年にやいまだしらす○古來風體抄曰、仁徳帝たかどのに登りて民の家々を御覽じつかはすに、民の家に煙たゝす、歎きて宣はく、民の家に煙たゝす近つ國だにかゝり、まして遠つ國々はいかならん、今三年は國々の貢物な奉りそ、御膳御服御殿の事たゞかくて有りなんと、三年過ぎて又たかどのに登りて御覽するに民の家に皆煙り立ちけり、御覽じて民富めり我すでに富みぬと、ささきわらひ申したまはく、とめりとはのたまへども御膳御服御殿しかじか有り何事かとみ給へると宣へば、未だ聞かず、民富んで君をまづしと云ふ事をと、さてよみ



給へる御製「高き家に登りてみればけぶり立つ民のかまどは  
賑ひにけり」。

追加

句選彫刻の半見圖の句を  
拾うて追加の例に記す

老慵

おいらのうし

蠣よりは海苔をば老の賣りはせて

句解の趣は去來抄に見  
えたり

貞享四年の續みなしぐりに前書共に見えたり○句解に曰山  
家集の雜の部に、申にさしたる物を商ひけるを何ぞと問ひけ  
れば蛤をほして侍る也と申しけるを聞きて「おなじくは蠣を  
もさして干しもすべき蛤よりは名も便りあり」此歌の心蠣に  
は看經の嚮もあれば淺ましき蟹の業ながらたより有りと詠  
めるなるべし又此句此歌を一段すり上げて蠣よりも海苔に  
は法の訓もあればとなり○按ずるに此前書は白氏文集に老

慵の題有りて、其詩に豈是交親向我疎、老慵自愛閉門居、是やは  
り物うき也、是を見れば、蠣をうるを見てもものうしとや。

白魚に價あるこそ恨なれ

未だ何れの年にやしらす句選に此句おだまきに見え侍りし  
が、名なければ疑て省く、今多聞の意に任せて記す、と見えたり。

鶴の巢も見らるる花の葉越かな

貞享四年の虛栗に見えたり○「花の雲鐘は上野か淺草か」の句  
に並びて有り○按ずるに、東都の六寺の棟瓦の上に鶴の巢ま  
ゝあり、又新山家に「鶴の巢もあらしの外さくら哉」の句あり、  
是に山家の二字題あり、可考。

阿蘭陀も花に來にけり馬に鞍

竹亭、おだまきに見當  
らす尙取れて見る可  
し、



延寶七年の江戸の春集に見えたり○句解に「花咲かば告げん  
といひし山里の使は來たり馬に鞍おけ」此歌の詞を摘て紅毛  
の渡り來る頃もをかしければ花によそへて日本の威風も句  
中に籠りたるべし○按ずるに、東都の恒例として紅毛のかび  
たん壹人醫師壹人書役壹人春三月柳營へ上るなり。

草履の尻折りて歸らん山ざくら

延寶七年の江戸の春に有り、前書雨降りければ、と有り○庭の  
卷集に、草履の尻をりて歸らん山ざくら 桃青四五器の揃は  
ぬ花見心哉 芭蕉、前は上野花見に雨にあうて吟じたるむか  
しの句也、後の一句のさびやう時と年とを工案す可しと有り  
○按ずるに、芭蕉延寶七年は三十六歳也、四五器の句は元祿七  
年の炭俵にあり、元祿七年は芭蕉五十一歳也、此年の五月十一  
日江戸を立ちて、其冬難波の旅店に歿す、其壯衰の意可考か、草

履の尻折の句によりて思へば、故實に、あしなかと云へるは草  
履の尻を折りて足の半なるもの也、大内などにて是を用ふる  
事有りとぞ、爰に上野の事は武江東叡山寛永寺は、寛永二年創  
建ありて、開山南光坊諡慈眼大師二世公海大僧正、三世はかた  
じけなくも後水尾院の皇子眞敬法親王解脱院宮と申奉る、四  
世は後西院の皇子公辨法親王大明院宮と申し奉る、五世は東  
山院の皇子公寛法親王崇保院の宮と申し奉る、六世は中御門  
院の皇子にて公遵法親王隨自意院の宮と申し奉る、斯く竹の  
園生の代々にたえせぬ御法の靈場にして、莊嚴華麗よのつね  
の寺院に異なり、山上山下の櫻木は八重九重の美觀をきはめ、  
彌生のにぎはひ花の都の下にたゝん事かたくを思はる、詳し  
く述べんするに、禿筆をたつる所を知らず、たゞ芭蕉の二句を  
以て察す可し。



富士に行椿にかくれ家に出づ

落ざまに水こぼしけり花椿

發句集不知年號

右兩句何れの年の吟にや未だ知らず。

春之下終

夏之上

ひとつ脱いて後におひぬ更衣

貞享五年の吟にして、笈の小文に、更衣の二字を前書とす。是芳野行脚に杜國同道也。よし野出て布子賣りたし衣がへ。萬菊と見えて、此句に並びたり。芳野を出て奈良へ志ざす旅中なるべし。○曠野集旅の部に出だす。○小文庫には、前書切れて見えずと有りて、句は、せなに負ひけり、と見えけり。

日光にて

あらたうと青葉若葉の日のひかり

元祿二年の吟也。奥の細道に、卯月朔日御山に詣拜す。往昔此御山を二荒山と書きしを、空海大師開基の時、日光と改め給ふ。千

按ずるに弘仁十一年空海和尚二荒を日光と改め給ひしこと當山の菴

萬菊丸杜國別名



記にありと見山志に見  
えたり

余は羅山先生也

日光山、中興開山天海  
僧正と云ふとしくか  
らす、然れば天海空海  
書寫の誤りにや、天海  
僧正は號南光坊監慧眼  
大師、しかし南光坊日  
光と改めたらんには、  
羅山子よししらは有  
まじ又千歳未來をさと  
り給ふにや、とあれば  
空海なる可きか、  
何某は

高久角左衛門

歳末來を悟り給ふにや、此御光一天に輝きて、恩澤八荒に溢れ、  
四民安堵の栖穩也。猶憚り多く筆を差置きぬ、と有りて、此句見  
えたり。○菅菰抄に曰、空海は弘法大師也、空海を日光山の開基  
とし、及び、山名を改むる事、日光の記其他の書にも未だ所見な  
し。○按ずるに、神社考曰、延喜式神名帳、下野國河内郡二荒神社  
余按、二荒日光音相近蓋其是耶、と見えたり。しかれば空海の改  
めたりとも見え侍らす。○伽藍開基記に、補陀洛山神宮寺は沙  
門勝道延曆之初開基の趣に見えたり。頭書に下野國日光と有  
り。○神社考三、二荒和訓與、補陀落相似たり、由是、浮屠誘國俗而  
遂號補陀洛山歟と見えれば、空海の開山にもあらざるか。さ  
れど二荒日光に改まりたるは、神社考に見えたり。○下野高久  
といふ所、何某が家に、芭蕉の真跡有り、あな尊うと木の下闇も  
日の光と書けり。若葉青葉は再案にや、可感なり。○西行一代記  
に、上人伊勢大神宮に詣で、の詠有り、宮はしらしめたつ岩根に

しきたてゝ露もくもらぬ日の光哉。○又夫木抄に、後京極若葉  
さす玉のうへ木の枝ごとに幾世の光みがきそふらん。

### 青葉して御目の雫拭はゝや

貞享五年芳野行脚より大和一見の時の句也。笈の小文に、招提  
寺鑑真和尚來朝の時船中七十餘度の難を凌ぎ玉ひ御目のう  
ち鹽風吹入りて終に御目盲ひさせたまふ尊像を拜して、と前  
書有りて、句は若葉して、と見えたり。○笈日記に、幾年ばかり先  
にや侍らん、此都の西大寺に詣して、と詞書有りて、青葉して、と  
五文字出でたり。○泊船集にも、青葉して、と有り。○按ずるに、泊  
船集は多く笈日記にて集めたるなり。句選尤も二集より出で  
たるものなれば、青葉と書けるなるべし。○元享釋書に曰、釋鑑  
真姓淳于氏、唐揚州江陽縣人、齊辨士髡之後也、下畧、天平勝寶六  
年甲午正月十有二日、着大宰府、下略、又曰、真流、日南時、暑毒入眼、



患之、失明、而大藏文句多所暗誦下略○和州巡覽記に曰、招提寺は菅原寺の東也、是より西大寺へ二十五町、寺門廣く諸堂多し、下略、又曰、鑑真堂あり當寺開山○按ずるに、笈日記、西大寺に詣でての吟とすれども、御目の雫、招提寺に據有り。

夏來てもたゞひとつ葉の一葉哉

元祿二年のあら野に、前書、山路にて、と有りて、下五文字、ひとつ哉、と見えたり○笈日記を見るに、岐阜の部、書讀、所々見めぐりて、洛に暫く旅寝せし程、美濃國より度度消息有りて、桑門已百ぬし道しるべせんと訪ひ來たり侍りて、しるべして見せばや美濃の田植唄 已百 笠あらためん不破の五月雨 芭蕉 其草庵に日頃有りて、やどりせんあかざの杖になる日まで、貞享五年夏日名にしあへる鶉飼と云へるものを見侍らんとて、暮かけて誘はれ申されしに、人々稻葉山の木陰に席を設け盃

笈句集に貞享五年とす

新古今夏 小侍従  
いかなればその神山の  
あふひ草年はふれども  
二葉なるらん  
増抄云、神山賀茂の名  
所也、そのかみ山と云  
ふ古き所に有る草なれ  
ば、しげりてはなくて  
二葉ぞとなり、  
本草綱目和名、  
石菘、以波賀志波、又  
曰、比登豆波

を揚げて「又やたぐひ長良の川の鮎鱈 翁」夏來てもたゞひとつ葉の一葉哉 同鶉飼も通り過ぐる程に歸るとて「面白くやがて悲しきうぶね哉 同」と見えれば、一葉の句、貞享五年の稻葉山の吟なるや○泊船集に、あら野には、一葉を一つ哉、と誤りぬと有り○句解に曰、一ツ葉は箱根の塔の澤或は熊野路なんどに見わたり侍る、漢名石菘と云へる藥草也、句意は、枝有るものは枝に倒れ、花あるものは花に倒る、たゞ一つ葉の淡きを愛せる隱逸の觀想なるべし○説叢に曰、考ふるに、一つ葉の一葉と字かさなりて、語路も耳だつ故、一つ哉、は誠なるべし。あら野は笈日記よりも已前の集にて、翁在世なれば證とすべきか、よし何れにても、句意に害なし、好みに隨ひ用ふべきにや。又曰、句解あたれり○師走袋に、是は我身に限らず、世人のいとなみは定れる果報ありて、萬心のまゝなる事はなり難し、例へばひとつ葉の夏草の茂れる時分にも一つなるが如しと也、人の上



を誠めたる句也。

藪つばき門はむぐらのわか葉哉

發句集も貞享五年とす  
按ずるに、藪は椿門は  
むぐらの若葉かなしと、  
は、の字を入れて聞く句  
なるか、草庵の様、藪  
には椿しどろに咲亂  
れ、門にはむぐらのや  
さしき春霞の景曲にや  
二乗軒未知、惟然か、無  
倫門人撰の元祿十年の  
紙文夾に、勢州住、二  
葉と云ふもの有り、是  
か、二乗軒と有り、五  
文字、藪椿と有りて、  
春の句とす、  
稻川と有るは稻生若水  
にや、稻生若水は寛文  
年中の人、本朝の産物  
明らかなる事若水が功  
なり、依之日本の時珍  
と云ふ、加州大守の家

貞享五年芳野行脚、笈の小文に、伊勢の間の句にして、前書、草庵  
と有り、上五文字、いも植ゑて、と見えたり○笈日記伊勢の部に  
前書二乗軒と有りて、藪椿と見えたり○泊船集是に同じ○ワ  
クカセワに、野椿の藪陰に咲きおくれ、初夏の頃花あるもの  
を云ふならん○糸切齒に云、順和名抄に、女貞ヒメツバキと云  
もの也、稻川松岡兩先生の秘説本草に、女貞藪椿イボタクロカ  
ネモチ、實の黒きを女貞とす、赤きを冬青とす、一名は萬年樹、大  
和本草にも女貞ネツミモチ、イボタとまでは出だし、藪椿姫つ  
ばきとは見え、又實の赤きは冬青、黒きは江戸モチ、と云云○  
按ずるに、毛吹草、山之井、糸屑などに、四月の季に藪椿あり、ワ  
カセワ詳しからず、糸切齒つとめたりと云ふべし、若水玄達共

の紋所説々有る故若水  
に糺す可き由命ぜらる  
若水曰、是はムメハチ  
草の花也と、大守の家  
記に合ふ事有て、若水  
が見る所よしとて稱美  
し、百人扶持を給ふと  
いふ、世に若水和名入  
の本紳綱目有り、誤多  
し、偽書也、若水眞傳  
は門人貝原篤信松岡玄  
途に傳ふ、支達百卷の  
書を柳營に獻す、丹羽  
昌伯野呂玄常蒙命、命  
諸國の産物を糺して、  
四百卷の書となる、み  
な是若水が功より出づ  
る所也、此得る事難し、  
翠公自書  
此頭書は俳諧に入用に  
なき事故寫に及ばず

に寛文元祿の頃の人たり、其以前の藪椿何れを指して活法の  
書に出せるや、知らず、此句は芭蕉女貞の句なるや、遅咲きの藪  
椿なるにや、分ち難し、笈日記を以て、泊船集書きたるにや、然ら  
ば、笈日記笈の小文、兩集の違ひ何れをや取る可き、芋植て菴の  
若葉夏より秋を思ふの一句と見る時は、芋うゑての方聞きや  
すからん、蕉門十哲の支考誤りと云ひ難し、再案に深き意あり  
や知らず、此行脚、伊勢は春也、此吟も梅の花の句にならぶ、然れ  
ば菴の若葉を、若草と見て春季ならんか、種芋や花のあたりを  
うりありく、の句有りし事も有り、藪椿は活法の書に、夏季たる  
故に、句選夏とせるや、笈日記、尤春の並びに見えたり○泊船集  
は夏の部に出だす、句選は泊船集によれるなるべし○按ずる  
に、菴の若葉する頃は藪に咲ける椿なるべし、冬青、ネツミモチ  
女貞イボタ、共に春咲かず、五六月の頃咲く、花鏡に菴の若葉の  
時節に合はず、此句に於いては、藪椿、東武に云ふ所の椿の下品



なるものなるべし。芭蕉伊賀の産、また此句伊賀にての句なれば、元來東武に久しく住したる芭蕉なれば、東武の方言にて句作有りけると思はれ侍る。又をだまきなど活法の書に、夏季に出せる藪椿は、冬青女貞の事にや、其撰書に逢はずんば分ちがたからん、己己が生國の方言を以て論ずる事無益なるべし。○とくとくの句合、春の部題椿に、篋の音目を道びくや藪椿 素堂とあり。○藪椿の事を按ずるに、本草綱目、和名女貞、今案、彌都美毛知、俗彌都毛知、冬青、今案、阿加美乃彌豆毛知。○花鏡、冬青ネツモチ、水冬青イホタ。○順和名抄、女貞タツノキ、ヒメツハキ、楔ネツミモチノキ。○大和本草、女貞ネツミモチ一名冬青と云ふ、櫛女貞三品皆冬青と云ふ。○本綱紀聞、女貞テラツバキ、ネツミモチ、冬青クロカチモチ、江戸モチ。○書類見る所ヒメツバキとは和名抄にあれども、やぶつばきの名は何れにも見えず、東武にて、ねづみもちと云ふもの五六月の頃花咲く、花鏡に、夏開小

古文前集、陶園田居、陶淵明、種豆南山ノ下、草盛豆苗稀

發句集に元祿二年とす、前書此筋に認まれて茅舎の藪讃と有り

白花とあり、冬青ネツミモチと云へる是なり。又イホタと云ふは大和本草にも女貞コネツミモチ葉も花も女貞に似たり、四月白き花を開く、冬は葉落つと記し、圖ある所、今云ふイホタなり、東武にて藪椿と云ふはこれ等のことに非ず椿の花の下品なるものなり。○漣々云、諸書を引て藪椿を評す、益なし、眼前體是れ藪に咲たる薄赤き椿也、一句味ひて知るべし。女貞などはかたはら痛き事也、晚春見たれば春、初夏見んには初夏の眼前也。

茅舎畫讚

むぐらさへ若葉はやさし破れ家

元祿二年の吟也、後の旅集に、元祿二年の初の夏、深川の庵も人にやりて、那須野の原に郭公を待ち、蓬蓬の敷寝の下にきりぎりすを聞き、千百餘里の嶮難、終に頭べを白うして美濃國我里に移り給ふ、句どもあまた有り、此事はおくの枝折りに残し



按ずるに、前の蕨椿は笈の小文にありて、貞享五年の句なり、この句は後の旅集に出で、元禄二年の句なり、且伊勢と美濃との違ひあり、されば再案とは云ふ可からず

龍尚舎不知

笈句集貞享五年の句とす、春の部に有り、萩の若葉哉と有り

給へは大方は漏らしつ、胡蝶にもならで秋ふる菜虫哉、たねは淋しき茄子一もと、斯くからびたる吟聲有りて、我下の句を次ぐ、戸を開けば西に山在り伊吹と云ふ、花にもよらず雪にもならず、只この孤山の徳也、そのまゝに月もたのまじ伊吹山斜嶺硯を取り向へば、此句をとめらる。怨水子別墅にて即興、こもり居て木の質草の質拾は、や、耕雪別墅、則時、風句ひやつきし歸花、此筋に望まれて茅屋の繪讃とありて此句見えたり。○泊船集にも有り、前章の、萩に似たる方侍れば何れが再案ならんか。

逢龍尚舎

物の名を先づとふ萩の若葉哉

貞享五年、笈の小文に、伊勢にて春の吟と見えて、前書、龍尚舎と計りあり、句は蘆の若葉哉也。○笈日記に、逢龍尚舎、と前書有り

筑波集 二條のおと、草の名も所によりてかはる也  
救済法師  
なにはの声もいせのはま萩

て、萩の若葉哉、と出でたり、尤春の部に交り有り。○泊船集、笈日記に同じ。然れども夏の部に出でたり。阿漕の謠に、物の名も所によりてかはりけり。難波の蘆のうら風も爰には伊勢の濱萩の音をかへて聞きたまへ、と見えたり。○論語八佾篇に、子入大廟、每事問、或曰孰謂鄒人之子知禮乎、入大廟、每事問、子聞之曰是禮也。○按ずるに、不猫蛇を見れば、古池や蛙飛こむ水の音の句に、蘆の若葉にかゝる、蜘蛛の巣と其角が脇有り、しかれば芦の若葉、春たるべし。○護法資治論曰、近年伊勢有龍尚舎能研神道之學而俱信佛法。

篠の露はかまにかけし茂りかな

元禄六年の句なるべし。○鄙の會紙に、城主の日光御代參勤めさせ給ふに扈從す、岡田氏何某に寄すると有りて、此句脇は、牡丹の花を拜む廣場 千川第三は、短夜も月はいそがぬ形して



涼葉リョウエツと其外左柳共に四吟の歌仙有り○發句集には、元祿七年の句とし、前書大垣の城主日光御代參勤めさせ給ふに扈從す、岡田何某に送ると有り○句解に、蓼太云、此句は袖日記に公務に困つて旅立つ人を送る、と題あり○山家集に、をざゝのとまりと申所にて露しげかりければ、分け來つるをざゝの露にそぼちつゝほしぞわづらふ墨染の袖○按ずるに、元祿の頃濃州大垣の城主は戸田采女正氏定也、元祿六年四月七日日光二十日御名代勤めらる。

雲岸寺の奥にて

木啄も庵はやぶらず夏木立

元祿二年の句也、奥の細道下野の所に見えたり、其文に曰、當國雲岸寺の奥に、佛頂和尚山居の跡あり、豎横の五尺に足らぬ草の庵むすぶもくやし雨なかりせば、と松の炭して岩に書付け

臨濟派  
佛頂和尚は芭蕉の參禪の師、鹿島根本寺の開山也、始は東武深川長慶寺に住す、此寺芭蕉參禪、佛頂和尚二度此庵に歸りて正徳五年十二月十八日に寂す八十七歳、

侍ると、いつぞや聞え給ふ、其跡見んと、雲岸寺に杖を曳けば、人進んで共に誘ひ、若き人多く道の程打騒ぎて覺えず、彼麓に到る、山は興ある景色にて、谷道遙に松杉黒く苦したゝりて、卯月の空今猶寒し、十景盡る所橋を渡り、山門に入る、さて彼跡いづくの程にやとうしろの山に攀ち登れば、石上の小庵、岩窟にむすびかけたり、妙禪師の死關法雲法師の石室を見るが如し、木啄も庵はやぶらず夏木立」とりあへぬ一句を柱に残し侍りてと云々○菅菰抄に曰、雲岸寺には十景五橋三水など云ふ佳境有り、妙禪師は中華宋朝の僧にて高峰と云ふ山に居り、生涯涯戸を閉ぢて出でず、法雲は法運の誤りなるべし、石室に籠り馬糞を焚き芋を煮て食せし僧也、何れも禪錄に委し○小文庫、佛頂禪師の菴を叩きて、と前書あり。

須磨の浦一見の時



須磨寺に吹かぬ笛きく木下闇

發句集貞享五年とす

平家物語にも、小枝の事有り、青葉の事は見えず、平家物語は後鳥羽院御宇、信濃前司長作の由、つれづれ草に見えたり、されど世に流布せる平家物語とは相違せる由也

貞享五年、笈の小文、芳野行脚より奈良を経て須磨にての吟なり、句は須磨寺やと有り○有磯海に、須磨寺一見の時、と前書有りて、須磨寺に、と見えたり○句解に曰、笛は敦盛の持たれし青葉也、今留めて什物とす、予先年行脚の頃寺に入る、其餘の品々迄拜み終り、一夜を明すに、平家の人々の住給ひしあたりも、物換り星移り若葉の風に管絃の聲を残して、そゝろ寒く、斯る有様此一句に盡せる事身にしみてぞ覺え侍る○敦盛の謠に、身の業のすける心より竹の小枝せみをれさまさまに笛の名は多けれども草刈の吹く笛ならば是が名は青葉の笛と思召せ○源平盛衰記に、夜更くるまゝにびえければサエダと名付けられけるなりと有り○文選、左思招隱詩、非必絲與竹、山水有清音、何事待嘯歌、灌木自悲吟、下略○伽藍開基記に曰、攝之坂陽城、

光孝天皇仁和二年

西去十餘里、抵須磨郷、有觀世音聖跡、號上野山福祥寺、世稱須磨寺、敕文鏡上人營寶殿、下略○莊子、齊物論、子遊曰、地籟則衆竅是已、人籟則比竹、下略、林希逸曰、注、比竹、笙簧之類、人籟、豈特比竹、金石絲匏之類皆是也、此特舉其一耳、

幻住庵にて

まづたのむ椎の木もあり夏木立

道元禪師六世、大智偽領第屋單丁(丁は當也)二十年、未持三鉢、臨入壇、精林菓熟、携籃拾、雁、食溪邊枕石、大智は鳳凰山に隱遁して生涯を終る

元祿三年の吟と有り、元祿四年の猿蓑に出でたり、幻住菴記、略、此の文の末に句有り、次に震軒が眞名文有りて、元祿庚午仲秋日と見えたり、庚午は元祿三年なり○評林に、夏木立あまた有れど、先づたのむとおけるより椎の木とは定めたるべし、椎がもとの俣も有りて、木の實椹の實等に、露の命を侘びたる彼の雪山の薪水の勞とも言はんか、又源三位頼政久しく官位の沙汰なければ椎によそへて、しるを拾ひて世を過ごす哉と懐舊



頼政のぼるべきたよりなれば木のしとに椎を拾うて世を過す哉

發句集貞享五年とす

の昔も思ひやられたるなり、尙尋ぬべし、○按するに頼政が歌當れるや知らず。

### 杜若かたるも旅のひとつかな

貞享五年よし野行脚より攝津國に赴きての句也、前書、笈の小文に、大坂にてある人の許にて、と有り○句解に、伊勢物語その澤の邊木陰におりゐて餉喰ひけり、その澤に杜若のいとおもしろく咲けるを見て「からころもきつゝなれにしつましあれははるばるきぬるたびをしぞ思ふ」と詠めりければ、餉の上に洩落してほとびにけり、是などを句中にこめて旅のひとつとは云ふなるべし、物語をとるの手本とすべし○又或人物語りに、此句は三河國に白雪と云ふ者、翁に發句の仕様を問ひしに斯く答へられしとなり、又脇の事を問ひしに「おなじ流の中の一八」と答へられしとぞ、白雪は三州鳳來寺の麓五里新城と云

ふ所の者也、東海道御油より入る。

### 山崎宗鑑が舊跡

#### 有がたき姿拜まむかきつばた

宗鑑が事は季吟門人東武住淨生が作の滑稽太平記にも見えたり、少し異なるあり、  
逍遙院殿へ參上杜若を獻じければ「手にもてる姿を見れば餓鬼つばた」宗鑑瘦形と見えたり

何れの年にや未知、泊船集に見えたり○雜談集に曰、支那彌三郎入道宗鑑は生涯を輕ろんじて隱徳高く、山崎の桑の門しかも車馬の喧きなし、一日近衛殿宇治逍遙の比、さる法師知れるものなりと尋入らせ給ひけるに、疲勞れたる老法師、ひとり庭草とりなどして、其ほとりの池の湛へに水鑑見けるさまを「宗鑑がすがたを見よやかきつばた」と仰下されたれば、則のまんとすれば夏の澤水」とつかうまつりける、當意興有りけるにや○發句集に、山崎宗鑑屋敷にて近衛殿の「宗鑑が姿を見ればかきつばた」と遊ばしける事を思ひ出て心のうちにいふと、前書あり、貞享五年の句とす。



二たび桐葉子が許にありて

今やあづまに下らんとするに

牡丹葉ふかく分出る蜂の名残哉

貞享二年の吟なり、野ざらし紀行、貞享元年の冬東武を出て其冬尾張熱田の桐葉がもとに杖をと<sup>いぬ</sup>馬をさへながむる雪のあした哉」と句有り○笈日記に馬をさへの句前書、熱田の桐葉が亭にて窓を明けて、と見えたり、其翌年の卯月二たび桐葉が亭に到りて此句有りしなり○熱田三歌仙に、二たび熱田に草鞋を解いて林氏桐葉子の家のあるじとせしに又思ひ立ちてあづまに下るとて、と前書有りて「牡丹葉分て這出る蜂の名残かな」と見えたり○甲子吟行、葉深く分出る、と有り、發句集句選に同じ。

桃隣新宅自畫讚

寒からぬ露や牡丹の花の蜜

元祿七年の別座敷に、贈桃隣新宅自畫讚と有りて、牡丹に杜鵑の畫に此句あり。

卯の花やくらき柳の及びごし

元祿七年の炭俵に見えたり○別座敷に、素龍曰「卯の花やくらき柳の及びごし」の佳句は柳暗花明なりと云へる碧巖に似かよひ侍るを、夏の小雨をいそぐ澤蟹と卒爾に脇をさへづる折も有つ、いつか十日も泊り侍りけるとあり○按ずるに深川芭蕉庵にての句なるべし○師走袋に云、是遠路を隔てたる入の方へ挨拶也、其方は今時を得たる卯の花の白く咲きみだれたるが如し、我は柳の時過ぎて余所目も打曇りたる夏の滋み

素龍は東武の住、芭蕉門人、素龍齋全故と云ふ



の、しかも程を隔てたる及び腰となり、此道懇望の人へ傳授な  
どの時なるべし○説叢に師走袋を難じて曰、一向の無理妄説  
世人不用も尤也、ゆめゆめ信すべからず、句意は明らかにて、其  
場の即興と云ひながら禪語の柳暗花明と云ふより出でたる  
也○按するに、碧殿集板行勸化帳願に、無邊風月眼中眼、不盡乾  
坤燈外燈、柳暗花明十萬戶、敲門處々有人應、

圓覺寺大顛和尚今年睦月の

始め遷化し給ふ由誠や夢の

心地せらるゝに先道より其

角が方へ申遣しける

櫻戀ひて卯の花拜むなみだかな

貞享二年の野ざらし紀行に、伊豆國蛭が小島の桑門、これも去

年の秋より行脚しけるに、我名を聞きて草枕の道連れにもと、  
尾張の國まで跡を慕ひて來たりければ、いざともに穂麥くら  
はん草枕、此僧我に告げて曰、圓覺寺の大顛和尚、ことし睦月の  
始め遷化し給ふ由、誠や夢の心地せらるゝに、先道より其角が  
方へ申し遣しける、梅戀て卯の花拜むなみだ哉」と有り、櫻に非  
ず○新山家集に、芭蕉の消息有り、曰、草枕月をかさねて露命恙  
なく今日歸庵に赴き、尾陽熱田に足を休むる間、ある人我に告  
げて、圓覺寺大顛和尚今年睦月のはじめ月まだほのぐらきほ  
ど梅の匂ひに和して遷化し給ふよし、細やかに聞え侍る、旅と  
云ひ、無常と云ひ、悲しさ云ふ限りなく、折節の便りにまかせ先  
一輪投机右而已、梅戀て卯の花拜むなみだかな」はせを 四  
月五日 其角雅生と見えたり、此新山家集は其角が貞享二年  
夏木賀山温泉入の紀行なり、其文の中に鎌倉圓覺寺へ詣し、其  
詞に、大顛和尚の尊牌を禮拜し、香一爐はちすに錢をつゝみけ



り 其角彼和尚のいまそかりける世を思へば開山より百六十三世と也、十三にして業徳の名天が下に擅に、一箇無心の境に遊で、詩は盛晩の異風を歴し、且俳諧に自然の妙を傳へ、予が手を曳て跛うち舞はしめ給ふよりぞ、萬尊き御事を耳に觸れ侍る、貧は原子なり、多病杜子に齊し、今年貞享二年正月三日八十路七とせにして、柴屋の雪の中に消えかくれ給ふ、御名世に優れたまへば、葬喪し奉る事眼に富めり、しかれども生前一盃の蕎麥湯には若かじと、愚集みなし栗に幻呬と止めたる御句をしたへば、涙いくばくぞや、三日月の命あやなり闇の梅 其角○虚栗の巻頭の句、禮者敲門齒朶くらく花明か也 幻呬○按ずるに、すべて花とのみ云ふ時は櫻なりと。しかれども此句は梅花なるべし、貝原が大和本草に、日本に昔は梅を花と呼ぶ、中世以來櫻を花と云ふと見えたり。古今集春、貫之、人はいさ心も知らず古郷は花ぞむかしの香に句ひける、[榮雅抄に貫之は

原憲  
杜甫

昆陽漫錄中鶴林玉露に  
曰、  
洛陽人謂牡丹爲花、  
成都人謂海棠爲花、  
尊貴之也

父文幹が初瀬の觀音を祈りての申し子なれば、常に詣で、宿の主の久しく訪づれぬとて恨むるを、そこなる梅を折て、花ぞむかしの香に句ふ、と我心中を花にあらはし云へる玄妙の歌也。又是も古今集に、水のほとりに梅の花盛りなるを詠る 伊勢、  
「春毎に流るゝ河を花と見てをられぬ水に袖や濡れなん」年を経て花のかいみとなる水は散りかゝるをやくもると云ふらん、  
兩首ながら花とばかり詠めれど詞書に梅とあれば、ゆづりてよめりと榮雅抄に見えたり。又古今著聞集に、宇治殿四條大納言公任卿といま春秋の花何れか優れたると論せさせ給ひけり、春は櫻をもて第一とす、秋は菊をもて第一とす、と宇治殿仰せられければ、大納言梅の候はん上は櫻第一にては如何候可きと申されければ、梅と櫻との論になりて、自餘の花の沙汰はつぎになりけり、大納言恐れをなして強くも論じ申されずながら、猶春の曙に紅梅の艶なる色すてられがたしと申さ



れける、優にぞ侍りける、江記に見えたり、こゝに俳諧は守武宗鑑貞徳の流と云へども、延寶の末次韵より芭蕉新風をたてたれば、往古の趣きによりて、花とのみ云へる此句を梅とし、歳旦の巻頭とせしが、尤大顛和尚は道德の禪師なれば、其論有るべからず、此禮者の句を以て見る時は芭蕉の梅戀ては花明也の梅なるべしや、其角が開の梅花は生前の花明かなりと梅の句有りける、曙の句に對して開の梅と云へるなるべし、○其角十七回忌集中に、其角書捨て置きしを記し出せるに、十六歳にて圓覺寺大顛和尚詩學易傳受と見えたり、○師走袋に云、梅戀てと五文字有りて云、梅戀て我好む風雅也、卯の花拜むは彼の和尚の遷化を聞きし也、○説叢に師走袋を難じて曰、注一向當らず、諸集は勿論句選にも梅戀てと有り、梅戀てと云ふも又我このむ風雅と云はんためにや、句選覺束なし、書き違へるにや、遷化を聞かれしは四月の始めと見ゆれば、櫻のかた卯の花へ時

候近し、梅は二た月またぎにして、觀想にも遠きものにや、俳諧は差し當り近き時候を取り合はせ、思ひを述ぶる道ならぬ、遷化の睦月を断りて、梅戀ひてとは理窟に近きや、句意は明か也、色香の徳をしたひ戀ひしに、甲斐なく憂き卯の花などうつり行き給ひぬる事よと歎き申されしなり、拜むなみだ、とは回向すると云ふ程の義なり、直に拜したる義にも非ず、卯の花をうきにかけていふ言葉、和歌の血脈の和語の優美也、○按ずるに句選にのみ櫻とありて、野ざらし紀行また甲子吟行芭蕉眞蹟にも、梅戀ひて、と有り、新山家にも、梅と有り、いづれの諸集に櫻と有るにや、○赤草紙に、梅は圓覺寺大顛和尚遷化の時の句なり、其人を梅に比して爰に卯の花拜むとは心也、物によせておもふ心、を明にす、その物に位をとる、



奈良にて

灌佛の日に生れあふ鹿の子かな

貞享五年笈の小文に見えたり、其文に曰、灌佛の日は奈良にて爰かしこ詣侍るに鹿の子を産むを見て此日においておかしければと、詞書有り○曠野に前書、奈良にて、とばかり句選の如く有り。

日の道や葵かたむく五月雨

元祿四年の猿蓑に有り○泊船集にも見えたり○按するに、今花舖及び世に云ふ日まはり云ふ草花有り是花鏡にある所の漢名向日葵也、一名西番葵、高一二丈、葉大於蜀葵、尖狹多刻缺、六月開花、每幹頂上唯一花、黃瓣大心、其形如盤、隨太陽回轉、如日東昇、則花朝東、日中天則花直朝上、日西沈、則花朝西と見えたり、

左傳成十七年仲尼曰鮑莊子之知不知、葵、葵猶能衛其足、杜注曰、葵傾葉向日以蔽其根、言鮑率居亂不能危行官孫

廿一代集等古今類句などに見えず

又世に云ふオホアフヒは漢名蜀葵也、蜀葵陽草也、一名戎葵、一名衛足葵、言其傾葉向日、不令照其根也、以上花鏡、かくの如く有りて、兩種ともに日に傾くの生有り○聯珠詩格に温公が詩更無柳絮因風起、惟有葵花向日傾○再考するに、此句は常の葵なるべし、ひまよりは、花鏡は六月花咲と有れど今は七八月の頃花咲く蜀葵は五月に咲く也。

野を横に馬ひきむけよ郭公

元祿二年奥の細道に見えたり、其文に、殺生石に行く、館代より馬にて送らる、この口付のをのこ短冊得させよと乞ふ、やさしき事を望み侍るもの哉、と詞書有り○勸進帳に、前書なすの、原にて、と有り、七部搜に云、おもふべき雲井ならねば時鳥駒ひきむけて慕ふ聲かな古歌取の句○師走袋に、是那須野の原にての句也、仕立は、野を横に馬引向けよと軍出立の事々しく言



ひ立てたるは、彼のむかし三浦上總の兩介奈須野の原にて狐狩の故事を含めて、我もその如くして時鳥に馬ひき向けよと一句の仕立所がら相應の作也。

鳥賊賣の聲まぎらはし蜀魂

何れの年の吟にや未知、豹塞に見えたり○泊船集にも出でたり○一書に、聲おぼつかかな時鳥、とも見えたり。

木がくれて茶摘も聞くや子規

元祿七年の句也。別座敷に、餞別の詞に、素龍曰、前略、夜半の鐘聲まぢかく蚊屋と紙の帷にさうじを隔て窓間に臥せり、日たけて起き待るに、粥は煮過したれば杉の箸かたかたづゝにて啜りぬ、今年なほ後のさつきを時鳥知りておこたる夜頃にや、初音聞侍らずと、啣ちて、此頃の愚詠も、むら雨やかゝる蓬のまろ

發句集元祿七年とす

元祿七年閏五月と有り  
頼政家集  
大内守藤の身ながら  
殿上許されぬ事を思  
はぬにてもなかりけ  
る頃行幸なりて侍り  
けるに大宿直なる小  
家にかくれ居て侍る  
に月のあかりりけれ

ば丹後内侍のもとへ  
申遣しける  
人知れぬ大内山の山守  
は木がくれてのみ月を  
見るかな  
千載集にも出でたり  
新葉集  
權中納言長賢  
あしびきの山郭公いづ  
こにか木がくれてのみ  
さ月待つらん

ねにもたえて待たる、子規哉」と吟じつれば折のよさにや、めで覆りて、ぬしも今宵の句をさぐり得たりと、木がくれて茶摘も聞くや時鳥、これなん佳境に遊びて、奇正の間を歩める作とは知られたりけり○秘蘊集に曰、茶摘と云ふ題は春なれども、田舎茶摘は夏四月五月専らなり、是時節の掛合也、されば木がくれてと置かれたり、茶摘も聞くや、此もの字にて、一天下不殘聞くやといふ事也○自得發明辨に、是郭公に茶摘、季と季との取合せといへども、木がくれてと取りはやし給ふ故名句とはなれり。

須磨の海士の矢先に鳴くや杜宇

貞享五年、笈の小文に須磨遊杖の吟也、其文に曰く、東須磨西須磨、須磨と三所にわかれてあながちに何する業とも見えす、藻鹽たれつゝ、など歌にも聞え侍るも、今はかゝる業するなど



古今集  
行平朝臣  
わくらはにとふ人あら  
ば須磨の浦にもしほた  
れつゝわぶとこたへよ

も見えず、きすごと云ふ魚を網して真砂の上に干しちらしけるを、鳥の飛び來りてつかみ去る、是をにくみて弓をもておとすぞ海士の業とも見えず、若し古戦場の名残を留めて斯かる事をなすやといと罪ふかく、なほ昔の戀しきまゝに、てつかいが峰に登らんとする、下略。

京にても京なつかしやほとゝぎす

元祿五年の己が光集に見えたり○泊船集には、京に居て、と有り○むつちどり、己が光と同じく、京にても、と有り○秘蘊集に、此句聞く人稀也、一とせ都にのほり居給へども、只不風雅なるのみにて、更に正風の叟を知るものなし、むかし山崎宗鑑が狂歌に、かしましき我里過ぎよほとゝぎす都のうつけさぞな待つらん、と詠めり、今の世は其うつけさへなくなりて、昔の事のみなつかしく、京は京ながら、斯く變るもの哉、と悲しみたる吟

花の古事 加賀中化翁

也○花の古事に、翁の文有り、曰、何所持參り候芳翰落手御無事に候旨珍重存じ候類火難は御のがれ候由是又御仕合難申盡候殘生いまだ漂泊やます湖南の邊に夏をいとひ候なほうら風に身をまかす可きやと秋たつ頃を待うけ候且兩御句珍重中にもせり賣十錢生涯かるさほど我世間に似たれば感慨不少候に、質他に越候て愈風情可被御心懸候愚句、京にても京なつかしやほとゝぎす、暑氣にいたみ申候間及早筆候 季夏二十日 小春雅丈 はせを 十錢を得て芹賣のもどりけり 小春○師走帯に、京師には住めど、常にはさもおもはざるに、時鳥を聞きて一入京なつかしく思ふとなり○按ずるに、古今集に、奈良のいそのかみ寺にて、時鳥の鳴くを讀める ぞせい、いそのかみ古きみやこの時鳥聲ばかりこそむかしなりなれ」とも見えたり○一字幽蘭集には、京に居て、と有り。



一聲の江に横たふや郭公

自得發明辨許六述作、許六は彦根の家臣尤彦根住居也、初はいかいを季吟に學び、中頃檀林常矩門人となり、門中五六人の逸人也、元祿五年在番にて東武に下り、八月九日桃隣手引にて深川の庵に來り芭蕉門人と成り同五年彦根に歸る

元祿六年の句にや、自得發明辨に曰、「ほとゝぎす聲横たふや水の上」時鳥の聲よこたふは、専ら水光接天白露横江のちから也。此子規の出づる頃予も吾妻の方に居合せて、其折の文通に「時鳥聲よこたふや水の上」一聲の江に横たふや郭公、右兩句沾徳が判によつて水の上に極め待ると云ふ、筆紙送られたり今に有り、予其返事に、沾徳と云ふ者一生眞の俳諧なし、彼が判覺東なし、予は江に横たふの方勝れりと返事せし也、案するに、水の上幽玄に聞え侍れども、水の上入らぬ詞也、聲よこたふや水の上、一言も殘さず云ひつめて、しかも水の上にといろへたる事を、沾徳はよろこべり、是俗のよろこべる所なり、江に横たふやと云ふ所にいろゝの心をふくめたる事を知らず、中々俗の

耳には落ちず、師名人たるに因つてひとり心に決し給はず、心に言はせて、論を極め給ふなり、予などに言はせて極め給ふこと、たびゝ有り、外の人はさも有るべし、しかれども外の句は判者の沙汰なし、この句にかぎり沾徳が判を乞ふと方々へ廣め給ふ、これ子細なきことは有るまじ、沾徳判に極め給ふと見えたり、兩句の甲乙何れともわきがたけれども、好き不好を論ずる時は、予は江に横たふの方すぐれたりと覺え侍る、言ひつめずして、心のあらはれ侍ることを好める故なり、此奥に詳しく記す、歌にも「日もくれぬ人もかへりぬ山里は峰のあらしの音ばかりして」基俊朝臣の詠なり、「日くるれば逢ふ人なしに正木散る峰の嵐の音ばかりして」俊頼朝臣也、此兩歌いくばくの相違もなく、まして下の句は同じ言葉なり、人々俊頼の歌を勝れりと云へども、定家卿の判に曰、俊頼の歌は正木散ると云ふ所いろへにして、俗のよろこぶ所有り、是入らぬ詞也、新古今時



代の費とのたまひ、基俊の歌勝れたりとは極ると云へり、兩詠の上をのたまひ、基俊の歌勝れたりと有るによつて、兩句のうへを見る所に、水の上といへる、正木散ると有るに似かよひ侍ると思へば、江に横たふの方を好み侍る。○篇突に曰、兩句共に並べ給へるは、自己にも一聲のかた勝れりと思へるなるべし、此兩句察し見るに、江に横たふ方先へ出でたるべし、一聲の江に横たふや、と云ふまではなひらかに聞えて口にさはらず、下の時鳥と云ふ所、舌頭に當りてはねかへりたるやうなり、故に下の五文字を引上げて、時鳥江に横たふやとは作り見給ふなるべし、是にては五文字七文字の間に聲の字不足しける故に江の字を聲とは直りたるべし、下の水の上の上はいろへ結びにして連續也、水の上の方はかくれたる所もなし、しかも水の上とうつくしく色へたるによりて、俗俳の耳には悦ぶ所なり水の上といひつめたる處を自己にもおとれりとは思ひなが

去來が湖東問答は整太が板に行ふもの也、予所持には扇突離陳と外題あり、書は同じといへども印板世に有る故に湖東問答と出せり

ら、病ひのなき方を取得として、水の上には究め給ふなるべし、されば爰に到つて沾徳と云ふ名をも出し給へるに見所あり。○去來が湖東問答に曰、先師の句に「一聲の江に横たふやほとゝぎす」又「郭公こゑよこたふや水の上」此二句、沾徳が判にて、水の上の方に極まるよし、許六書けり、先師も人の評によりて、句を定め給ふ事侍るや、答、此事あるべし、沾徳のみに限らず、門人の評を聞きて句を定め給ふ事多し、又問、江に横たふ方勝れ侍るとも、下の五文字舌頭にあたりて撥ね返るやうなりと云へり、下に時鳥と置き給ふ句、或は野を横に或は京にても京なつかしや、其外にもいか程も侍らん、唯此一句のみ先師の吟じ返し給へり、いかなる事にや、答、許六のいへる所定めて故有る可し、我西國にて生れ舌だみ清濁わからず、聊舌頭にあたる所を知らず、又野を横に馬引きむけよ、時鳥「木がくれて茶摘も聞くや時鳥」の二句は上の十二字の間に、テニハよくまはり候、此一



句はテニハ廻らずと云へる事も我など不知處也○泊船集には「時鳥聲横たふや水の上」の句のみ出でたり○むつ千鳥には、深川と前書有りて「時鳥聲や横たふ水の上」とあり、一句也○笈日記に荊口へ贈りたる芭蕉の文に曰、ほとゝぎす聲横たふや水の上、聲やよこたふか、「二聲の江に横たふや時鳥、水光接天白露横江の句、横の字句眼なるべし、二つの作何れにやと推敲難定所、水沼沾徳と云ふ者訪ひ來れるにかれ物定め博士となれと兩句の評を乞ふ、沾徳が曰、横江の句文に對して考ふる時は、句量尤もいみじかるべければ、江の字抜きて水の上とくつろげたる句のほひよろしき方におもひつくべきの條申し出る、とかくする内山口素堂原安適など詩歌の數奇のものども入來たりて、水の上の聲よろしきに定りて事やみぬ、させる事なき句ながら、白露横江と云ふ奇文を味合ふて御覽可被下候 荊口丈 はせを と見えたり○古文後集、蘇子瞻前赤壁

賦、月出於東山之上、徘徊於斗牛之間、白露橫江、水光接天○後赤壁賦、適有孤鶴橫江東來、

時鳥聲よこたふや水の上

前に云ふ如し、翁草には、横たふ聲や水の上とあり、

ほとゝぎす正月は梅の花ざかり

天和三年の虚栗集に、花咲けりとして、改夏と題あり○泊船集に、花ざかりと出せり○句解に、袖日記に曰、此句諸集に花ざかりと出せり、すべて門人の未練より師の名を汚せり、花ざかりは衣更著の頃の氣色にして、陸月の姿ならず、山家集に「時鳥花橋に成りにけり梅にかをりし鶯の聲能く此歌の心に叶へり」○説叢に、深川の古杉風家珍とせる翁の眞墨一軸有り、貞享丁卯秋と名印紛なき正筆あり、四季の句卅一章有り、其内に此子

翁草集、元禄八年里圖  
選也



規の句、花咲けり、と書かれし也、誠に正證とすべし。東登も、此軸を見し故に、袖日記に覺書せしは尤の事也。句解の引歌當れり。花さけりの方餘情あり、梅にかをりしうぐひすの聲も、と添へて聞けば、愈時鳥花桶の夏に成りにけりと早く月日の移り行く觀想目前也。○赤草紙に、此句は時鳥の初夏に正月に梅の咲けることを言ひはなして、卯月なるが時鳥の聲は、と願ふ心をあましたる一體也。○桃鏡が芭蕉文集に、書簡有り。其文に云、去來方へ申遣候付、乍序申入候彌御堅固珍重不過之候御手本の風義に随分認見候得共、下地不器用もの故に移り兼申候御直し可被下候。然は時鳥の發句の事被仰下候依之、ほとゝぎす正月は梅の花さけり、あまり宜無御座候得共御尋に任せ申入候又々宜句も出候は、追々可申入候取込、龜書御免可被下候九日 北向雲竹様 はせを。

清く聞かん耳に香炷てほとゝぎす

天和三年の虚粟に見えたり。○東山殿鴨川へ千鳥聞きに出で給ふ、同じく千本道具と云ふ者も、袖に蘭奢待を炷て出る由、義政公聞き給ひ、袖香爐を御取かはし有りて、今の世に大千鳥小千鳥とて名器なり。

蜀魂まねくか麥のむら尾花

延寶九年の後双六に見えたり。○天和二年の武藏曲にも見えたり。○のぼり鶴自畫讃と前書有り、古翁所持の文臺に承々して朝叟家にかくすと見えたり。

ほとゝぎす大竹原をもる月夜

元祿四年の嵯峨日記に有り。○小文庫に、前書、落柿舎閑居、嵯峨

發句集、年號不知と有り  
後双六集は出羽國最上の殘月軒清風選也  
のぼり鶴集寶永元年專吟選  
類題 爲廣  
かり人の見えぬ野風に  
はしたかのきりふのす  
いきたれまねくらん  
後拾遺 源師賢  
さらでだに心のとまる  
秋の野にいとともまね  
く花瀟哉

とくく句合の判詞の中



日記、大竹藪を漏る月ぞ、と有り○笈日記、嵯峨五句と有りて、此句もる月夜、と見え並びて、落柿舎 五月雨や色紙まくれし壁の跡、野明亭 清瀧の水汲みよせてとてん、小倉山院 松杉をほめてや風のかをる音、嵐山 六月や峯に雲おくあらし山、と見えたり○菅菰抄中に、伊賀桐雨筆記芭蕉翁傳に、元祿三年夏石山のおくに幻住庵をむすび、四年の秋までこゝにかくれ、此間に嵯峨日記有り、と見えたり○伊勢の栲良曰、此句月夜とは謬也、月夜は地に映る影也、虫はうつむきて聞可し、子規は頭あふぐ可し、竹の葉末にちらくともる月を見ての句なるべし、眞蹟は、月ぞ、とも有り○案するに、嵯峨日記笈日記泊船集みな、夜、と有り、小文庫のみぞ、とあり。

ほとゝぎす消えゆくかたや島ひとつ

貞享五年芳野行脚の時、須磨明石一見の句と見えて、笈の小文

に有り、其文に曰く、昔の戀しき儘に、鐵拐ヶ峯に上らむとする導きする子の苦しがりて、兎角言紛らすを、さまざまに賺して、籠の茶店にて物食はす可き等いひて、わりなき體に見えたり、彼は十六といひけむ、里の童子よりは四つばかりも弟なるべきを數百丈の先達として、羊腸嶮岨の巖根を這ひ上れば、迂り落ちぬべき事あまた度なりけるを、躑躅根笹に取りつき息を切らし、汗をひさして、やうやく雲門に入るこそ心もとなき童子の力なりけらし、須磨のあまの矢先に鳴くや郭公、郭公消え行く方や島一つ、須磨寺や吹かぬ笛聞く木下闇、明石夜泊、蛸壺やはかなき夢を夏の月、斯かるところの秋なりけりと、かや、この浦の實は秋をむねとするなるべし、悲しさ寂しさいはん方無く秋なりせば、聊心のはしをもいひ出づべきものを、と思ふぞ、我が心匠の拙きを知らぬに似たり、淡路島手に取るやうに見えて、須磨明石の海左右に分る、吳楚東南の詠も斯かる處



にや、物知れる人の見侍らば様々の境にも思ひなづらふるなるべし○小文庫、明石、と前書あり。

ほととぎす鳴々飛ぞいそがはし

貞享四年の續虚栗に見えたり○泊船集にも有り○句兄弟、時鳥の句の評に曰、一色の賞物なれば縦横を分ち侍るは俳諧より案じ入る事は得難し、折節の物に觸れたる心ばかりもやさしき方に見ゆるすべくや、時鳥鳴々飛ぞいそがはし はせを「水鳥やあやなき聲も子規 其角此躰俳諧より思ひ入りたるなり、もし是等の格法を得道せん人は縦横と混雜したりとも句法に背く可からず、縦は「花郭公雪柳櫻の折のふれて詩歌連俳共に通用の本題也、横は「萬歳」藪入の春めく事よりはじめて「火燧餅搗煤拂」鬼打豆の數々なる俳諧題をさして云ふなれば縦の題には古詩古歌の本意をとり、連歌式例を聞きて文章の

山家集下  
待賢門院の女房堀川の  
局の許よりいひ送られ  
ける  
この世にてかたらひ置  
かん時鳥死出の山路の  
しるべとしなれ  
返し  
郭公鳴くくこそはか  
たらはめしでの山路に  
君しかからは

もとに私の詞無く一句の風流を專一とすべし。横の題にては洒落にも如何にも我思ふ事を自由にいひとるべし。ひとつひとつには論じ難し。縦をと心得て本歌を作なく取り、時鳥の發句せしなど、あて仕舞なる案じやうは無念也。句意に縦横を教へんため纒かに思ひ寄せたるまでなり。

### 郭公なくや五尺のあやめ草

元祿五年の葛の松原に見えたり○伊達衣集に寄夏草と題見えたり○評林に曰、紹巴法眼豊臣秀吉之連歌の秘事を差上げられしに發句の仕立はすらくとして、たとは五尺のあやめに水を注ぎたるにひとしく仕立てたるがよしと紹巴法眼の説也、花鳥月雪は景物の一なれば一手柄なくては無念の事なれば、五尺のあやめの名哲の詞をよそへて、時鳥にあはされたり、是とても又名人の手柄也、時鳥にあやめ不易なれども、五

伊達衣に寄夏草と題有るを見れば、又比喻の意し有る可し、評林の注は目團集に孟遠が云へる也、紹巴秘書と有るは連歌至寶抄と云へる書也、板本に有り、秘事なるものとは見えず初學の書と見ゆ、又五尺のあやめ草の事連歌の心持と云ふ書にも見えたり、是は心敬作書にて兼載への傳書也



李園集は許六選には非  
ず箇中の足森住俱占と  
云ふ者の選也

尺の新しきは妙手なり、猶可考○句解に曰く「時鳥鳴や五月の  
あやめ草あやめもわかぬ戀をするかな」此詠によれるか。あや  
めぐさは此の鳥の鳴渡るころの掛合にして、五尺の二字は五  
月の間もおかしければなり、餘情は雨後の暁と見るべし、道因  
法師の歌は五尺のかつらに水をかけたらんやうに詠むべし  
と云へること有り○説叢に評林を難じて曰く、紹巴の説を引  
いて五尺の證とせしは、彦根許六が李園集餘篇に孟遠が記せ  
し桃の枝菊阿口傳と云ふものにあらはせしに少しも違はず、  
是を見て己がものらしく評せしと見ゆ、去りながら紹巴より  
已前に此譬へは有りて、紹巴は後の事なり、許六も其事は知ら  
ずや有りけん、又名哲の古き詞を裁入れたりとも何ほどの  
手柄にかなりやせん、何ぞ妙手といはんや、畢竟此句の風情し  
かと解せぬまゝにかくまぎらはし置きしと見ゆ、又句解を難  
じて曰、句解の引歌は上の句の吟聲をかり用ひ、下の句の戀何

赤草紙に此句は時鳥な  
くや五月のあやめ草と  
云ふ歌の言葉をとりに  
の句なるべしと有り、  
崑山集  
五尺ほどのあやめつ  
りの太刀もがな  
法印正勝

案するに、予も五尺の  
かつら未だ知らずと雖  
も、桂の字覺束なし、  
蔓の字にや、藝太もか  
つらと假名にて書けり

ぞ用に立たんしからば此歌によれりと云ふは意あたらぬに  
や、あやめもわかぬと謂はんために序歌に五文字より連ね下  
したるのみなり、戀もする哉と云ふ所此歌の要たり、此句戀の  
句ならばさも有るべし、此の外古人の歌とり合せに限り有  
るべからず、又五尺の二字は五月の間もをかしとは訝かし、ね  
ちみやくの闇ならん、又道因の五尺のかつら何れの書に出で  
しにや知らず、證跡いまだ見る所なくいぶかし○後鳥羽院御  
口傳に曰、俊恵法師はあたしき様に侍り、五尺のあやめに水を  
うけたるやうに歌はよむべしと申しけり云云、古語源秘抄五  
尺の桂未だ聞かず、道因も俊恵の空覚えの違ひにして、桂もあ  
やめの間あやまりとこそしられけれ○連歌此記抄にも、五尺  
のあやめと云ふ段あり、發句のみに限らず、附合にも此心得有  
るやうに見えたり○句意は解に云へる如く、是は雨後の曙の  
風情尤當れり、此一語にて皆濟なるべし、雨後のあけぼの、初



音のさわやかなるを、五尺のあやめに水をかけたるが如しと古き詞をもつて子規を稱したる翁の風骨凡器に違ひたる處有り、全く此鳥の聲を摸寫し出すの妙所なり、妄りに益もなく古人の語を裁入れたりとても何妙あるべき、本情をよく見届けたる上の事なり、林の評甚然るべからず○案するに、説叢のおもて評林の説を然らずと難すれども、已に目圓のおもてなれば強ち杉雨が罪にも非ず○奎圓に、此五尺のあやめぐさは紹巴法師の秀吉公へ連歌の秘書を差上げられける序、發句の姿は五尺のあやめに水を注ぎたる如くと云へり、是逸仁の教へ、大曲也、是を郭公に合せて翁の手柄とはせられたり○案するに、かく見えたれば、素丸孟遠を難するに似たり、孟遠又許六が口傳を記せると有れば許六を難するも同じ、過當と云ふ可き歟、扱句解評林共に説叢に難すれども、何もさして難する事には有るべからず、愚案するに、句の解を書く事、此書を思ひ立

つより其事は狭し、古人の評を加へんとのみなり、一己の説を書かず、されども此説叢のおもてにては芭蕉の心に叶ふ可きや難計、故に句意を論ず、先づ句解の引歌、此詠によれるかと疑ひて有り、然るに此歌によれりと云ふは甚當らぬにやと書ける是説叢あらそひを好むかと聞ゆ、句解是によれる歟と書きたるは據なきにしもあらず、蓬萊に聞かばや伊勢の初便の句は、此度は伊勢の知人おとづれて便りうれしき花柑子哉と詠めるより便の一字出所とかや、去來抄に見えたり、然れば一首を皆とるに非ず、唯上の句のほとゝぎす鳴やさつきのあやめ艸と詠めるをほとゝぎす鳴や五尺のあやめ草とさつきと五尺と聊の違ひにて語勢よく似たり、然れば是によれるやも知るべからず、又評林に本情の事を言はずとて難す、夫れ等は言はでも本情を得ずして妄りに句作すべきや、是解に書きても知るべき事也、さればこそ孟遠も本情の事は書かず、扱説叢に、



略の初音の爽なるを五尺のあやめに水をかけたるが如しと古き言葉を以て子規を稱したる翁の風骨凡器に違ひたる所有りと、即ち之を思ふに、許六が傳にも其聲を五尺のあやめにとへたる事見えす、又句解評林ともにさは書かず、よし其心有るやは知らざれ共、書面に見えざれば定め難し、初めて説叢に聲を譬へたりとのみ解したるも聞ゆ、是覺束無きの推量なり、此句矢張そこにあやめの丈高く生ひ出である池か川かなんどの風景に、時鳥の鳴きたる姿の句にやと思はれ侍る、其仔細は五尺のあやめの事予が如きものすら連歌至寶抄にて覺え居る事なり、又郭公の聲のよき事誰々も知りたる事也、夫に是を喩へ云ふこと誰々も云ひ出づべし、延寶の頃檀林などの風調此喩への句專也、是は其頃の句には非ず、元祿五年の集に出でたれば蕉風の只中也、しかれば姿こそ稱すべけれ喩へたる意を稱するは如何あらん、已に「はれ物にさはる柳のしなへ

哉」柳のさはるしなへ哉」と此句の論去來抄に去來曰比喩にしては誰々も言はん直に觸はるとは争でか及ばん、と此柳の句と時鳥の句と考合する時はいかにも比喩は誰々も云ふべし、菖蒲の丈高き風色に時鳥と其風色のさかひたる所比喩好みの叢の眼の届く所に有るまじきか、子規に是等の趣有りしこと、時鳥大竹はらを漏る月夜、是等にも類して見る可きにや、又説叢に初音と云へる何れの書に寄るや知らず、たとひ四月頃に五尺位の菖蒲あるにもせよ五月雨の時節ならんか、已に句解に雨後とし、又説叢にも雨後とまでは言ひながら初音とせるは如何にや、是聲の比喩にのみ拘はりて、其姿を見ざるのあやまちにや、鶯の岩にすがりて初音哉は物に恐れたる風姿にて、初音に非ず、鶯の身を逆さまに初音哉も初音に非ず、と去來抄に見えたり、是など又其風姿初音に非ずと云ふとも其初音ならんには苦しからじ、一句のおもて初音ともなく菖蒲の茂



粟津が原橋隣選  
芭蕉の十七回追善の集  
也

其角十七回淡々選

りたるに、初音とは推して定む可き事には有らじ○粟津ヶ原に「時鳥鳴くや五月のあやめ草あやめもわかぬ戀もする哉」五月の月を引きかへて「時鳥鳴くや五尺のあやめ草」是一字轉變の句也、五月の空時鳥天に滿ち、菖蒲地に滿ちたる景容能くとり合せたる句として季吟師にも感じめされけると也○案するに、是を見て愈初音に非ず比喻のみにあらざるを知るべし○其角十七回に、此句、鳴くやさつきのと請けたるばかりに非ず、夜の柱、昔の犬その名目を思ひ寄するとぞ。

不ト一周忌琴風興行

ほとゝぎす啼く音や古き硯箱

發句集に元祿二年とす  
誤りなるべし、  
綾錦は沾涼選、  
師の恩集は不ト高弟不  
角選

元祿五年の吟なるべし○綾錦に、不ト、岡村一柳軒、住堀江町、元祿四年庚未四月九日歿と見えたり、琴風は即ち不ト門人なり、これ亦綾錦に見ゆ○師の恩集にも、元祿四年四月九日終焉の

不ト三十三回忌享保八  
卯年

趣見えたり○泊船集に、或人の一周忌にとあり○陸奥術集に、句選の通り、不ト一周忌琴風興行と見えたり○眞蹟集に芭蕉より雲竹への書簡あり、其文に曰、寶壽院の僧今日上京候に付申上候愈御別條無之や承り度候さては先頃御頼み申し上候額字出來候は、この僧に御渡し被下度候委細は御話し申し上げらる可く候、偕々御世話に奉存候、さて又内々御頼み申上候千字文來月中に御出來被下候やう内々品かけ奉頼候先き様より便りの度毎にせがみ遣候此中口ずさみ申候一句、ほととぎす鳴音や古き硯箱、如何思召候やおかしくと存じ候近々參上可得御意候以上、十一日、北向雲竹様、はせを、とあり○按ずるに東武よりの書翰にや○唐子西が古硯銘に、筆最勳、墨次之、硯靜者也、豈非靜者壽而、動者夭乎、吾於是而得養生焉○古今集に、索性法師、いその上古き都のほととぎす聲ばかりこそ昔なりけれ○徒然草に、靜かに思へば萬に過ぎにし方の戀しきの



みぞせん方無き人静まりて後長き夜のすさびに何となき具  
足とりしたゝめ、残しおかしと思ふ反故など破り棄つる中に、  
亡き人の手習ひ繪かきすさびたる見出でたるこそ、唯其折の  
心地のすれ、この頃或人の文だにひさしくなりていかなる折  
いつの年なりけんと思ふはあはれなるぞかし、手馴れし具足  
なども心も無くてかはらず久しきいと悲し。

うき我を淋しがらせよかんこ鳥

元祿四年の猿蓑集に有り○扁突に曰、てにはのよき句、自ら五  
音の調子よくひゞき、あしきは調ひ侍らぬ故に、民の感應する  
事なし、されば絲竹管絃の吹鼓ならでも、此てにをはの五音に  
て打はやし侍る故に、目に見えぬ鬼神を泣かしめ、武士の心を  
和らげ侍る事疑ひなし、大事のてにはをあたに置けるは未練  
の至り也、てにはにて打ならずと云ふは、うき我を淋しがらせ

和漢文様、幻住庵の賦  
にかつこ鳥我を淋しが  
らせよなどひとりよる  
こびて、とあり

張籍詩に  
因て過竹院、遂僧語、又  
得浮生半日閑、と云る  
句を佛印に對して、東  
坡吟じければ、佛印曰  
く、學士閑半日、老  
僧忙半日、  
長嘯山家記曰、爰を半  
日とす、客は其閑なる  
事を得れば我は其閑な  
る事を失ふ

よかんこ鳥此句淋しがらするかんこ鳥とあらば何を以て人  
の心の和らぐ事あらん、是常なれば也、淋しがらせよ、とてにを  
はを以て打鳴し侍る故に、五音相續して聞く人感應す○嵯峨  
日記に、淋しさなくばうからましと西上人のよみ侍るは淋し  
さをおるじなるべし、又よめる山里にこは又誰をよぶこ鳥ひ  
とり住まんと思ひしものを、獨り住むほど面白きはなし、長嘯  
隱士の曰、客は半日の閑を得れば、主は半日の閑を失ふ、素堂此  
の詞を常に憐む、予も又、うき我を淋しがらせよかんこ鳥とは  
ある寺にひとり居て言ひし句也、と見えたり○按ずるに、古今  
集、讀人知らず、夏山に鳴く時鳥心あらば物思ふ我に聲を聞か  
せよ、

とんみりとあふちや雨の花ぐもり

元祿七年の句也、芭蕉行狀記に、品川の驛、麥の穂を便につかむ



新古今釋效  
五月ばかりに雲林院の  
菩提講に詣てよみ侍り  
ける  
肥後  
むらさきの雲の林をき  
て見れば法にあふちの  
花咲にけり

わかれ哉箱根の關越えて目にかゝる暗やこと更五月富士し  
どけなく道ぐさにやすらひてとんみりとあふらや雨の花ぐ  
もりと見えたり○按ずるに此行則ち元祿七年也印板の行狀  
記に、暗は時の字にや、あふらはあふちなるべし○泊船集、栲と  
眞名にて有り○評林に曰、雲見草と云へる異名あるや、上五字  
とんみりの文字感吟不少、夏日の晴れやらぬ炎上の氣、山鳩の  
聲に一入曇りて尙花もおぼろなり、何となくあふちはおもし  
ろき花なり、新古今むらさきの雲の林に來て見れば法にあふ  
ちの花咲きにけり此歌の風流も何となう思ひやられ侍りぬ  
猶可考○枕草紙、木のさまぞ惜げなれどあふちの花いとをか  
し、かれ花にさまことに咲きて必らず五月五日にあふもをか  
し○拾芥云、證類本草に云、五月五日俗人取栲葉佩之避惡氣今  
も田舎には端午にせんだんを軒にかざす事あり。

### 落柿舎

#### 柚の花にむかしを忍ぶ料理の間

古今集 讀人不知  
さつきまつ花たちばな  
の香をかげば昔の人の  
袖の香ぞする、  
淡書  
興芳七天之盧橋講傳左  
袖、此語闕疑抄集に見  
えたり

元祿四年嵯峨日記、落柿舎は昔の主の作れるまゝにて、家々額  
破す、中々造り磨かれたる昔のさまより、今のあばらなるさま  
こそ心とまれ、彫せし梁畫ける壁も風に破れ雨に濡れて、奇  
石怪松も葎の下にかくれたる竹縁の前に、柚の木一本芳しけ  
れば、と有りて、句は、柚の花や昔忍ばんと見えたり○泊船集、小  
文庫にも有り○風俗文選去來談、許六、それおんみれば維、寶永元甲申年の  
秋九月落柿舎去來歎、嗚呼悲哉、此郎は向井氏立勝老人の末子  
に生れて、筑紫の方に生ひ立ち、名は平次郎、武を業とし、若かり  
し時より、浴に居す、弓矢を捨て、十五年と吟じたるは、十五年  
先きの事也、合せて三十年の大隠士、和名これを浪人と云ふな  
りけり、いつの頃よりか先師蕉翁にまみえて風雅の名に高ぶ



り、京師に庵を構へて諸子の頭に坐す○古今抄に廻しの所に  
 曰、柚の花の一章は嵯峨の落柿舎の懷舊也とぞ、あるじの去來  
 は武門の功を遂げて、都に浪人の名を稱せしが、今の隠閑を云  
 へるなるべし、さて此章に、にの字の働きは柚の花には貧福の  
 二様ありて今の所帶の侘を思へばと、こゝに心をめぐらすべ  
 し、然れば料理の間と云ふは殆ど大名の會釋なれば、むかしの  
 榮耀をも忍ぶらんと例の談諧作也。

海人の顔先づ見らるゝやけしの花

貞享五年、笈の小文、須磨一見の文に、卯月中の頃空も朧に残り  
 てはかなき短夜の月もいと艶なるに山は若葉に黒みかゝ  
 りて、時鳥鳴出づべき東雲も、海の方斗り白らみ初めたるに、上  
 野とおぼしきところは、麥の穂なみあからみあひて、漁人の軒  
 ちかき芥子の花のたえだえに見渡さるゝと見えて此句有り○

芥子合集元禄五年嵐閣  
 選「花けしの無常す、  
 むる夕哉」  
 此句體には覺え侍られ  
 ど、繪川新左衛門が句と  
 やらん温故集にて見た  
 る考かと覺ゆ尙可

芥子合集追加にも此句見えたり○句解に、須磨の浦にて、と前  
 書有りて、評に曰、世のはかなき有狀も、芥子の且に咲きて夕べ  
 に跡なき例しなるを、須磨の蟬の何氣なく打むれ世渡にたゞ  
 よふさま、先づ顔のうち見られて哀れなり、と云ふ心にや、撰集  
 抄發心の卷曰、抑生ける身の命をしむ事おしなべて皆齊しか  
 るべし、只宿業の拙なくて鳥獸となりぬれば物をいはぬには  
 かされて思ふ心の中をも知らずして是を殺して我身の世を  
 渡らん事、返す返すも愚かに無殘なるべし、下略、芭蕉常に撰集  
 抄の趣を慕ひ申されければ所がら是などの觀想と見るべし、

贈杜國子

白けしに羽もぐ蝶のかたみ哉

貞享二年野ざらし紀行に、前書共に如此見えたり○芥子合集  
 にも同じく見えたり○按ずるに杜國は三河國保美と云ふ所

師走袋に、五文字、日  
 ぐらしに、の誤りなら  
 んと有り、此説無三從  
 東、



に杜國が忍びて有りけるをとぶらはんと笈の小文に見えたり。されども野ざらし紀行に、此句有り。所は尾張國の吟の中に見えたり。此時尾張の桐葉が亭より東武に歸る。牡丹葉ふかく分出る蜂の名殘哉の句有り。○或人曰、てにをはむつかし、恐らくは傳寫誤れるか。白罌子は羽もぐ蝶のかたみ哉とあらば能く聞ゆべし、散る花をてふの羽もぎたるかたみと謂はゞ、白けしにと有りてはわき難しと。○按するに、此紀行のうち、桐葉が亭を出る時、牡丹しべ深く分出る蜂の名殘哉とは桐葉を牡丹とし、其身を蜂とせし吟にや、しからは杜國をけしとし、我身を蝶とせしや、けし散りたるには非ず、さかりの花なるか、野ざらし紀行、甲子吟行、芥子合、共に、白芥子に、と有り。○或曰、杜國が不幸をおくると。○按するに、此句貞享二年の句にして、野ざらし紀行に見えたり。又貞享四年の笈の小文に杜國を尋ねて、鷹ひとつ見付けてうれしいらこ崎の句有り、しかれば貞享二年杜

國存生の内の句也。

勢田の螢見

ほたる見や船頭酔ておぼつかな

元祿四年の猿蓑集に勢田の螢見二句、闇の夜や子供泣出す螢舟凡兆。螢見や船頭酔て覺束な。はせを」と見えたり。○泊船集には、ほたる火や、とあり。

愚にくらく茨をつかむ螢哉

延寶九年の東日記に見えたり。○按するに白氏文集に、但愛莊生能詐聖、可知窻子解伴愚草、螢有耀終非火、荷露雖圓豈是珠。

草の葉を落つるより飛ぶほたる哉

元祿三年の俳番匠集に見えたり。○泊船集にも有り。○師走袋

勢田集貞享四年の句とす、東日記は言水選

俳番匠、一名いつな昔元祿三年其角選



遊々云、此句を比喻と  
はいかゞ、眼前にして  
實に感懐深し、螢の草  
の葉より落ちて飛びた  
るなり、草の葉のと有  
るは俳諧しらぬ人の解  
なるべし

に、此道にさときものか或は諸藝などにて其道にはやく心得たる者への挨拶なり、腐草化して螢となれるが、其葉より落つると其儘飛ぶ事よと譽めたる句也○按ずるに比喻なるや知らず、其すがた見る可し、草の葉を、なり師走袋は、草の葉のと有り、一字の違にて解も又違へるか。

### 己が火を木々の螢や花の宿

元祿五年の己が光集に、車庸が曰、勢田石山の螢さかりなりけると魚荷に告げしを、嬉しくも卯の花のさらに咲く頃、槐之道をさそひ夜舟の綱もあけやすう宇治越にかゝりて、彼里の茶屋の佗びしきにやどり、さゝ波やけふも火ともす暮まちとそこのの氣色をうち興じけるに、膳所の吟友たれかれを先として來たり、互に人を驚かさんと方寸をくるしめしに、此宿にも翁の吟行残されしとて持出でたるを、各眉を並べ頭を突付

けて味ひ侍るに、實にも深長なる事を覺ゆ、と有りて、此己が火の句有り○按ずるに、是元祿五年の前三四年の間の吟なるか○東花集に、錯綜顛倒之法、おのが火を木々の螢や花の宿詩に錯綜顛倒の法と云ふは、杜子美が香稻啄餘鸚鵡粒、碧梧栖老鳳凰枝、と云へる類ひならん、杜律の詳説援幼抄など詩仙叢話にも此論まちく、なれども、あるは錯綜有りて顛倒なく、あるは顛倒有りて錯綜なし、此ふたつを兼たる句は誠に稀ならん久捺、野鶴如双髻といへる類ひは只倒装の法と云ふべし○師走昏に、此句はあるじまうけして、多くの客に發句など所望せしが、或はそれくの藝能などをおのゝひとつ宛施して興せし時の句と見えたり、己が火に喩へて、螢の木々にわかれて光を照しける其宿は則ち花を宿とする也○按ずるに、藝能などの比喻覺束なし、支考が説を見れば、螢は己が火を花として木々に宿す、と聞くべきか、忠度の歌に「行暮れて木の下陰を宿と



せば花や今宵のあるじならましと云へるを思ひ出で、膳所勢多に旅宿の吟歎。

我宿は蚊のちひさきを馳走哉

いづれの年の吟にや未だ知らず。

この境はひわたるほどといへるもこの事にや

蝸牛角ふりわけよ須磨明石

元祿四年の猿蓑集に、前書斯の如く見えたり○類柑子には、前書此あたりはひ渡る程と云へば、と見えたり古今抄曰此句は莊子に云へる蠻觸の兩國を思ひよせ、源氏に、這ひ渡るほど、云へる俳諧の詞の意を汲みて斯く申出づれば、蝸牛は當季な

發句集元祿四年とす、ちひさきもと有り、

發句集貞享五年とす、貞享五年は秋

魏王齊威王を討たんとす、原首これに同ず、季子とむ、鄭氏共に亂入と云、燕于戴晋人を王に見えしむ君曰客大人也聖人不足<sub>レ</sub>以當<sub>レ</sub>之

がらまして須磨明石の用に非ず、是などを雜の體とや云はん、名所は此外もあまた侍りしが、同じ事あまた擧ぐるにも及ばず○源氏須磨の卷に曰、明石の浦は只這ひ渡る程なればよし、清の朝臣の入道のむすめを思ひ出て文など遣りければ返事もせず云々○莊子則陽篇に、戴晋人曰有所謂蝸者君知之乎、曰、然、有國於蝸之左角者曰觸氏、有國於蝸之右角者曰蠻氏、時相與爭地而戰、伏尸數萬、遂<sub>レ</sub>北<sub>レ</sub>旬有五日而後反、○師走袋に、其間近くして蝸牛の角の隔ちたるが如しとなり○按ずるに、須磨明石劣らぬ風色なればにや、近き事のみにはあらじ○本朝文鑑に、庚午紀行あり、是は笈の小文と同じく少しく異也、此句も笈の小文には見え侍らねど、庚午紀行にありて、其文に東須磨西須磨など濱須磨とか云ひて此さかひ三品に別れて強ちに何わざするとも見えす、藻しほたれつゝなど歌には詠めれど、今は斯る業するなども見えす、濱にきすこと云ふ魚を網して、真砂



の上に干しちらしけるを、鴉の飛び散りてつかみ去る、是を憎みて弓をもておどすぞ、泉郎の仕業とも覺えず、もしや古戦場の名残をといめて斯ることをもなすにやと、いとゞ罪ふかく思はるる、誠にすまあかしのその境はひわたる程といへる源氏の有様も思ひやるにぞ、今はまぼろしの中に夢を重ねて世の榮花も果敢無しや、かたつぶり角ふりわけよ須磨明石と見えたり○按ずるに、古戰場と有るより、蠻觸源氏の事をも思へるにや、此紀行笈の小文貞享五年也、庚午は元祿三年にて芭蕉石山の幻住庵をむすびて、先づたのみ椎の木もあり夏木立の吟ありける也。

## うき人の旅にもならへ木曾の蠅

元祿六年の句也、酌塞集に、贈許六辭、木曾路を経て舊里に歸る人は森川氏許六と云ふ、古しへより風雅に情有る人々は後ろ

に笈をかけ、草鞋に足を痛め、破笠に露霜をいとひ、己れが心をせめて物の實を知る事を悦べり、仕官公けのために長劔を腰に挟み、乗かけの上には槍をもたせ、徒士若黨の黒き羽織の裳裾は風に翻りたるありさま、此人の本意には有る可からず、椎の花のこゝろにも似よ木曾の旅、うき人の旅にもならへ木曾の蠅と二句見えたり○元祿七年の續猿蓑に、許六が、木曾路に赴く時、と前書有て句選の如く、旅人の心にも似よ椎の花と有りて、此うき人の句見えす○泊船集前書、續猿蓑の如く有りて、句も、旅人の、とあり、又其次に、うき人の句並びて有り○説叢曰、此人の本意には有るべからずと詞を残されしにも示誠の心を推しはかるべき事也、うき人の旅にもならへなど、教訓有りしその日の誠情、今眼にさへぎりて、されとても忝じけなくぞ覺え侍りぬ。



日既に暮れければ封人の家  
を見かけて舍をもとむ三日  
風雨あれてよしなき山中に  
逗留す

蚤虱馬の尿する枕もと

元祿二年の奥の細道曰、南部道遙に見遣て岩手の里に泊る、小  
黒崎三つの小島を過ぎてなるこの湯より尿前の關にかゝり  
て、出羽の國に赴かんとす、此路旅人稀なる所なれば、關守にあ  
やしめられて、漸として關を越す、大山を登つて日既に暮れけ  
れば、封人の家を見かけて舍をもとむ、三日風雨あれてよしな  
き山中に逗留す。のみしらみ馬の尿する枕もと、とあり。○泊  
船集に端し書略しぬ、蚤虱馬のはりこく、と有り。○古今抄三段

切の所に、驛路の老懷なれば三段にして論なしと見えたり、句  
は馬の尿つくと有り。

竹の子や稚き時の繪のすさび

元祿四年の猿蓑集に有り。○泊船集にも見えたり。○嵯峨日記  
に、四月二十三日の所に、繪のすさみ、と有り。○師走袋曰、此句泊  
船集には誤りて、繪のすまひ、と有り、炭俵集には、すさび、と有り、  
句の意は源氏若紫の巻に、紫の上の稚き時雛作り給ふにも繪  
書き給ふにも、源氏の君とつくり出て、清らなる繕きせかしづ  
き給ふ、と有るを本として、その如く稚き時は繪のすさびなれ  
ども、竹の子の生ずる如くいつともなく成人し給ふべしとの  
句なるべし。○按ずるに、人に比喩の句なるか知らず、芭蕉書を  
好む事諸書に見えたり、稚き時の事をおもひ出でけるか。



うぐひすや竹の子藪に老を鳴く

元祿七年の吟也、別座敷集に、道中より聞ゆ、と有り○枯尾花の序に、四度び結びつる深川の庵を又立出づるとて、鶯や笋藪に老を鳴く、人も泣かるゝ別れなりしと見えたり○評林に曰、丘隅に止まり盡して、老のうぐひすに、春もくれ竹の奥深く、彼の長岡の母君の住家もおぼつかなく、千代もといのる子の爲、竹の子の字猶時節に合はして、老の鶯の働きわけて一入にこそ聞えたり、玉堂閑話に、鶯の子の古事有り、黄鸝も子を愛して、藪の深きに入るなるべし○按ずるに、元祿七年五月十一日芭蕉江都を立ちて古郷伊賀に赴き、夫れより難波に終をとる、此旅中の句と見えたり、評林の注釋當れるや知らず、恐くは蛇足ならん、大學に、詩に云く、緡蠻黃鳥止于丘隅、子曰於止知其所止、可以人不知鳥乎、注曰、詩小雅綿蠻之篇、緡蠻鳥聲、丘隅岑蔚之處○

抄、母なん宮なりけるは是伊豆内親王の御事、榮平清和へ仕へければ母へはさいく不参、榮平兄弟五人阿保親王の子はいとう内親王の御腹には榮平一人故歎とみ事急事頓の字病ひの事を云ふべし、さらぬ別は死別無遺也

詩經に、緡蠻黃鳥止于丘阿とあり、評林に丘隅の字大學を以て言へるならんか、大學の注解は人として止る所を知る可き教への喩へとす、然るを止まり盡して春の末竹の奥にとはいかには盡すにはあらず、やはり其止る所にといまるなるべし、丘隅は岑蔚と、岑蔚はシゲリタルかたちとかや、丘阿またをかのくま、と有れば、しげりたるに意味同じ、又彼の長岡のことは、伊勢物語に、昔をとこありけり、身は賤しながら母なん宮なりける、其母長岡と云ふ所に住給ひけり、子は京に宮仕へしければ、まうづとしけれど、しげくえまうです、ひとつ子にさへありければいと悲しうしのび給ひけり、さる程にしはす斗りにとみの事とて御文あるに驚きて見れば歌あり、老ぬればさらぬ別れのありと云へばいよくみまくほしき君哉、彼の子甚う打ち泣きて詠める、世の中にさらぬ別れのなくもかな千代もといのる人の子のため、又按ずるに野ざらし紀行に、このかみ



の守袋をほどきて母の白髪ををがめよ、浦島の子が玉手箱汝が眉も稍老いたり、と暫く泣きて「手にとらば消えん泪ぞ熱き秋の霜」はせをの吟有り。しかれば貞享元年より以前に母は身罷りぬと見えたり。竹の子藪の句古郷へ赴く旅中の句と云へども、長岡の母君の事覺束なし。鶯の老を鳴く事は、古今抄に、貞享式老鶯、此式は全く新選也、然ども老鶯とは本より漢家の詩に出で、或は狂鶯とも亂鶯とも總て暮春の物なれど、例に今式の加減より、殘鶯は勿論にて、老鶯も夏の名となさば鶯に老の感情ありて、風雅は例の淋敷味と云はん、と見えたり。○十論爲辨抄曰、故翁の發句にも附句にも古詩古歌を裁入たるは卷々にあまたなれど、其詩を知らず、其歌を知らねば聞えぬと云ふは一句もなし、當時博學の作者達は、世界の人の知らぬ事をして其集を人に譽められんと、いかなる心の費ぞや、或る時故翁の物語に、此程白氏文集を見て老鶯と云ひ病鶯と云へる

熊野文殿  
年ふりまさる老木樞今  
年斗りの花をだに待も  
やせしところよわき  
老の鶯思ふことも泪に  
むせぶばかりなり、  
舉白集  
春寒み花も句は梅が  
枝にやどりやわぶる老  
のうぐひす

此詞のおもしろければ「うぐひすや竹の子藪に老を鳴く」さみだれや蠶おづらふ桑の畑斯く此二句を作り侍りしが鶯は笱藪と云て老若の餘情もいみじくこもり侍らん、蠶は熟語を知らぬ人はこゝろの運びを得こそ聞くまじけれ。○按ずるに子を思ふの意味とは定め難し、只其春夏の移り行く老の將に到れるをと、茲に其角が枯尾花の序と古今抄に支考が老鶯の説と並べて見る可きにや。

竹睡日

降らずとも竹植る日は蓑と笠

何れの年にや未知、うら若葉に、畫竹自讃とあり。○古今抄畫圖の體、粽ゆふ片手に挟む額髪「降らすとも竹植る日は蓑と笠」右二章を畫圖の體とは祖翁昔猿蓑の選場に斯かる物語の面影をも、一句は入集す可きにやと、此粽の句を送り給ふる由、遺稿

發句集不知年號之部、  
睡の字を用ふ、  
うら若葉は元祿十年其  
角選



の夜話に見え侍りしか、爰に思へば、竹植る發句も畫圖の形容と云ふ可きにや、扱此二章の姿情を評せば、前は菱川が色繪をつくし、後は洞雲が墨繪を寫して、詩歌に繪をもて姿を定め、繪は詩歌をもて情を含むと云へば、今の二章には限らねど、例の是を以てそれを知れとなり、さりながら是らの名目は總て三按の新製ながら、漢家の詩格にも有りとやらん、例の衆評を伺ふ可きは是なり○笈日記、大垣の部に、木因亭と有り、評に五月の節を云へるにやいと珍らしと見えたり○句解に、五雜俎曰、栽竹無時、雨過便移、須留宿土、記取南枝、此妙訣也、俗説五月十三日を竹酔日と云ふ、俳諧は俗説を捨てず、依て夏季とす、又居家必用、五月十八日栽竹及十三日爲竹本命日、栽之、百無一死、頻試實効、竹植るに蓑笠の掛合不動して尤風流也○説叢句解を難じて曰、五雜俎の説は栽竹の法にて竹酔日の事には非ず、此句に用なし、俗説とはいかにや、出所確なる事なり、日本の俗説

居家必用は唐本翻刻の書ありいかにも必用の書也、貝原もやまと本草に引用ひたり

作池墨記  
四機活法の中にある

には非ず、又居家必用などは近來の書にて出所も取用ひ難し、今本説をあらはし訂す、作池墨記曰、種竹須用辰日、栽竹用臘月五月十三日、古人謂之竹酔日、又謂之竹迷日、下略、句選句解竹酔日と題書す、是はあしかるべきにや、此句は竹の畫讚也、竹酔日は一句の趣向也、題にはいふかし、孟宗が姿などより思ひ寄せ、竹酔日を趣向としたる、誠に蓑笠の姿、有聲の畫とも云ふべき風流也、此句翁初老の頃の句也、笈日記大垣の部を併せ見るべし○按ずるに、又竹酔日と有るを難じて曰、句選大に偽也と説叢に云へり、是は泊船集に前書竹酔日と有る故に句選に書出せるものと見えたり、句選の作に非ず、又句選の睡の字何れより書出せるや、酔の字なるべし、五元集に五月十三日、雨雲や竹も酔日の人あつめ 其角

奥州今の白川に出る



早苗にも我色黒き日數かな

發句集元祿二年とす

十訓抄にも見えたり

未だ何れの年の吟にや知らず、奥州行脚、元祿二年の奥の細道に此句見えす。○泊船集に前書とも句選と同じく斯くの如く有り。○評林に、奥州今の白川に、（原）の吟なる由、早苗の水影清く旅行の顔の日にやけ棄れし風情也、日數と云へるより顔色の黒きもいと目立つ也、白川と云へるより能因法師が風流を思ひ寄せられて黒き日數とは申されたるや、又可有○按ずるに、古今著聞集に、能因はいたれるすきものにてありければ「都をば霞と共に出でしかど秋風ぞふく白川の關」と詠るを、都に有りながら此歌をいたさん事意なしと思ひて、人にも知られず久しく籠り居て色を黒く日にあたりなどして後、陸奥の國の方へ修行の次に詠みたりと披露し侍りける、此心を評林には云へるなるべし。

しのぶずりの石をたづねて

早苗とる手もとやむかししのぶ摺

元祿二年奥羽行脚の吟也、奥の細道に、福島に宿る、あくればしのおもち摺の石を尋ねて忍ぶの里に行く、遙山陰の小里に石半土に埋みて有り、里の童の來りて教へける、昔は此山の上に侍りしを往來の人の麥草を荒して此石を試み侍るを憎みて此谷につき落せば、石の而下さまに伏したりと云、さも有るべき事にや、と有りて此句見えたり。○古今築雅抄に、河原左大臣「みちのくの忍ぶもちずりたれ故にみだれてそめにし我ならなくに」の注に曰く、天智天皇の御時、奥州信夫郡よりもちずりとてぬひずりの如くなる文のみだれたるを年貢に奉るもの也、一説みちのくの信夫郡に大なる石二有り、其面平に少しでもちのやうなる文有り、藍にてすりたる布を年貢に奉ると見え



たり○陸奥衛に、文字摺の石寸尺は風土記に委しく見えたり、  
いつの頃か岨より轉落ちて、今は文字の方下になり、石の裏を  
見る、扇にて尺を取るに長さ一丈五寸幅七尺餘、櫓の丸木をも  
て圍ひ、脇より目印に杉二本植ゑ、傍の小山に道祖神を安置す、  
と有り○小文庫に、前書有り、其文に曰、忍ぶの郡しのぶの里と  
かや、文字の名残とて方二間ばかりなる石有り、此石は昔女の  
思ひに石になりて、其面に文字有りとかや、山監摺みだる、故  
に戀に寄せて多くよめり、今は谷間に埋れて石の面下さまに  
なりたれば、させる風情も見えず侍れども、さすがにむかし覺  
えて懐かしければ、と芭蕉の文に見えたり○雪丸けに「五月乙  
女にしかた望まんしのぶ摺　はせを」と有り、若し此句の再案  
にや、伊勢物語抄に、信夫郡に石あり絹布を摺る、山監といふ草  
の汁にてすれり、と見えれば、早乙女の業に思ひよれるなら  
ん。

渺々と尻ならべたる田植かな

此句笈日記湖南の部に、湖水田植と前書有り○泊船集に、笈日  
記に「渺々と尻ならべたる田植哉」と云ふ句を入集いたされけ  
れど、是は伊丹の句にて翁の句に非ず、と見えたり○按ずるに  
此句外に見當らず、伊丹とは鬼貫が所住の地也、鬼貫が俳風を  
伊丹風と云ふ、鬼貫句選にも此句見あたらす、兼平塚にて「兼平  
が塚渺々と刈田かな」と鬼貫が禁足旅記に見えたり、似よりた  
る所あればしるし侍る。

清水ながるゝの柳蘆野の里  
にありて田の畔にのこる

田一枚うるゑて立去る柳かな



元祿二年奥羽行脚の時下野園遊杖の吟にして、おくの細道の文に、清水流るゝの柳は蘆のゝ里に有りて、田の畔に残す、此所の郡主戸部某の此柳見せばやなど折々にのたまひ聞えたまふもいづくのほどにやと思ひしも、今日此柳の陰にこそ立寄り侍りつれ、とありて此句有り○古今抄に、古翁の生前に數百章の發句あらんに一言の隈をも尋ねずと云ふ事なく、まして故翁の發句も附句も一字の奇言怪語なければ、尼も入道も聞きやすからんに、今云ふ不案のみならで、滅後に胡亂なるもの指をたふすに、五七章もあらんか、それが中にも、奥の細道に「田一枚植ゑて立去る柳哉」もの書きて扇引さく名殘哉」されば此に云ふ奥の細道は故翁の奥羽紀行にて、武の素龍と云ふものに寫させ、湖南の木曾寺に持おはして、東武の土産にと自から讀みて、外題は其時自筆せられしが、滅後六年の秋にいたりて四半なる本紙のまゝに其一冊をすき寫し、洛の去來を奉行に

て板に鏤ばめ侍りしもの也、しかるに柳の一章は奥の須川なる人の便に、植ゑて立よる柳哉、と其頃の文通に書傳へ、次に扇の一章は加府の北枝が山中の見おくり、橘の茶店にてそれが扇に書きてたびけるよし、今も野城の家珍につたへしが、扇へき分る別哉と有り、私かに是などの優劣を評せば、前の立よるは後の立さるにまさりて西行の歌の意をはこび、田植の姿も涼しげにと云はんか、前の、へき分る、後の、引さく、にまさりて離別の詞のしほらしく別るゝも名殘も秋の扇ならん、さるをいみじとおぼせばや、清寫にかくは定りけらし、凡そ故翁の再思の句は人おどろかさずと云ふ事なきに、今はた此二章の感とけず、是は唯若き時の危念にして、生前は馬耳の難話に聞きながし、死後は烏焉の遺訓にまよふ、恥らくは書紳の實を失ひ學而不思のあやまちなれば、それをもて是をつとめてよとなり○句解に、蘆野にて「田一枚植ゑて立さる柳哉」蘆野は下野國



にあり「道のべに清水流るゝ柳かげしばし」とてこそ立とまり  
つれ」と詠せられし所なり、此歌の心をとりにて、しばしとこそや  
すらひつれ、はや田一枚植ゑけるよと驚ろき立ち去りたる旅  
懐なり、句法摸寫變態、口授○按ずるに句法口授の事、摸寫とは  
西行の吟の立とまりとあるを寫して、立つとしたれども、去る  
と云ひかへたるによりて、寄と去との態を變じたるなるべし  
○林藪餘談に曰、百菴謂ふに、立去る柳哉、未審例の俗談平話に  
や、ことに西行上人清水流るゝ柳陰の詠は畫を見て詠める歌  
也、清水の下に官女のイみたる形書けるを見て詠める也、後に  
柳陰に彼上人の形を畫く事となれり、今又堂にても柳陰に西  
上人のイ給ふ畫に讚をあそばしける事になん、元來畫を見て  
詠める歌なれば、其柳彼里にあるべきよしなし、古書を見ざる  
僻事俚俗の方言を用ふる故也○新古今集に、題不知、西行法師  
「道のへの清水ながるゝ柳陰しばし」とてこそ立ちとまりつれ」

臥を解して芭蕉の句解  
すべし不詳といへども  
奥にてあきらかならん  
百菴いへるは哉の論な  
らん

詠歌大概には、つれと  
あり注曰、つれに眼を  
付く可しとなり、但幾  
考自筆には、けれと有  
り、心は同じ、宗紙は  
けれか、涼しげなる影  
にかりそめに立よりて  
日なしくらしたる體な  
る可し

○新古今増抄のうちに、古抄曰、炎天のくるしき道を過行くに、  
柳の陰に清水の流るゝを見ては立寄るべき所也、結句に立と  
まりつれと云ふ字眼也、此柳陰もとめぬ納涼の地なれば、そと  
の間と思ひて立寄りたれば、涼しきに心をとられて、行くべき  
道をも忘れて時刻をうつしたると云ふ心あまりて侍り、しば  
しとてこそ立とまりつれ、斯様に程をへくらさんとは思はざ  
りしものを、と云立てたる歌也、立とまると云ふ詞は、そとの程、  
ちとのほどなど云ふやうの義なりと云云、又兼載聞書曰、但し  
立とまりけれなど、同じ事と見るべからず、つれのつ文字奇  
特なり、しばらくと思ひ立とまりつるに、日をくらし、時を移し  
けるよと云ふ心也、又増抄曰、道のへとは、もとめず行あたりた  
るよしなり、夏の頃は清水にても柳影にても立よりて涼むべ  
きに、よき事のかさなりてあれば、覺えず心をとめしとの義な  
り、此歌は教戒の理りあるとぞ、ことに世を捨人などの思ふべ



きとなり、人たるもの、罪世につけてうる事始より罪を犯さんと思ふはなし、少の事より是はくるしからずと思ひてそれが覺えずしてつもりつもりて罪となる事なり、三界流轉するも一念の何とかしつらん迷ひの無明より事おこりて劫をふる事なり、立とまりつれと有るはさてもかやうに有るべき事ならずと思ひ返して立さりぬる義なり、あやまちを二度せずと顔回をほむるも、一度はあらでかなはぬを、夫を非と知りて又せぬを譽めたり、あやまりては改たむるに憚る事なかれと有るも此義なり、されば此歌の義すゝむとも着せぬよしを云へり、初より立よりて涼まぬは又情おくれたり、涼みても、やれとおもひて着せぬを思ふべし、深き意味有る歌なり、○此抄の趣によりて案すれば、支考は前の立寄るは後の立さるにまさりて、西行の歌の意をはこびたりと云へる、當らず、立さると云ふ方涼みに着せぬつれの詞に叶ひて、西行の歌の意なるべし。

西行一代記、作者未審文章雅なるものなり、此年西行二十五歳、或は二十三歳出家とも云ふ、  
一代記、けれと有り、つれに非ず、併寫本なる故に誤りにや

四季物語奥書、右四卷  
菫園者海田采女佐源相保所筆也、段々文字  
愚公羽書、明應龍集  
庚申、上陽月中院日、  
枕下桑門 在判

又百菴が云へる、此歌は繪を見て詠める歌なれば、其樹彼里に有るべきよしなし、古書を見ざる僻事なり、と難する。按すれば西行一代記と云ふ書に見えたり、其書に大治二年十月十日頃鳥羽殿に御幸ならせ給ひて、はじめたる御所の御障子の繪共御覽あるに、誠に優に御けしきにて、其頃の歌よみ達、經信、匡房、基俊、並に憲清等を召されて、此繪どもを題にして、各一首詠をたてまつるべきよし仰下されけるに、面々いとなみよめる中にも、憲清其日の内に仕立て奏し申ける、と有て、十首の詠あり、其中に、清水ながるゝ柳陰に旅人のやすむ様を書きたる所を「道のへの清水ながるゝ柳陰しばしとてこそ立とまりけれ」と見えたり、然れども柳陰に官女の繪とは見えず、たゞ旅人と有り、○西行四季物語にも此事見えたり、少しづゝ文章違ひあれども、事はおなじ、扱其中に、清水のながれたる柳陰に水をむすぶ女房を書きたりければ、と有り、是を以て今畫の家に其の形



を傳ふなるべし、其歌立とまりけれと有り、又沽州門かと覺えたり「西行の笠の塵はく柳哉」と云へるを難じて、是は西行剃髮以前の歌なり、此句あたらずと云へる評有りしと、又繪にも西行の形書きたるはあし、憲清の頃の詠なりとて、甲冑を帯びたる所を書きたるも見えたり、然れば此事古來よりさまざま説有る事と見えたり、既に貞徳和歌の高弟盤齋が新古今増抄にも繪の事見えす、尤新古今にも題しらずと見えて繪の事見えず、勅選已如此、芭蕉一人の僻事に非ず、其うへ細道の文に、此所の郡主戸部某の此柳みせばやなど折々にのたまひ聞え給ふもいづくの程にやと思ひしを、とあれば、たゞ新古今のおもて、並に戸部某の詞を受て風流を吟じたる何の罪があらん○説叢曰、此句西行の歌によれりと云ふべし、芦のの柳は巷里の云ひ傳ふるのみにして、證説往古よりなき事なり、畫讚の歌也、西行の繪讚をあつめ畫と歌とを記せしものなり、夫が中に、川

邊の柳に女の立やすらふ體の畫有りて、此歌をのせたり、又舊説に鳥羽院の御このみにて川邊の柳陰に官女の袴着たるかたち、やすらふさまを繪が、せて贊すべし、との仰ごと有りし時の歌なりとも云ふ、下略○師走袋に、此句は早乙女を譽めたる句也、たをやかなる柳腰の女共が、田一枚を植ゑておのゝ立ちさりしとなり○按ずるに自ら立去るなるべし、師走袋の説、取るに足らざるは勿論なり。

### 風流のはじめや奥の田植唄

元祿二年奥羽行脚の句にして、奥の細道に、須か川の驛に、等窮と云ふ者を尋ねて、四五日といめらる、先づ白川の關いかに越えつるやと問ふ、長途の苦しみ身心勞れ、且つは風景に魂を奪はれ懷舊に腸を断ちてはかくしく思ひめぐらさず、風流のはじめや奥の田植うた無下に越えんもさすがにと語れば、脇



三卷不審三ツ物にや  
 清麩茶話 招月  
 田うた圃により所につ  
 けて聲ぞかはれるし  
 生佛、後鳥羽院の御時  
 の者也、平家物語は信  
 濃前司行長作、今流布  
 平家物語といふ物とは  
 違へり、  
 本朝文鑑 奥州田植唄  
 かさやたんびやはども  
 かうもせうが、へいふ  
 の二俊が、ちんばかな  
 注曰、へいふは配符、チ  
 ンバカナは不埒をいふ  
 笠踏皮の榮耀はともあ  
 れ、二俊の年貢が氣の  
 毒なり、生佛は東國の  
 座頭にて此類の樂府を  
 誦へり、芙蓉文集に奥  
 州の歌の文句

第三とつづけて三卷となしぬ、と見えたり○猿蓑集に、しら川  
 の關にて、と前書有り○むつちどりに、須ヶ川等窮興行と前書  
 あり○菅菰抄に、奥州の田植うたは生佛と云ふ目くら法師の  
 作也、と云ひ傳ふ此生佛は平家物語にふしを付けて、琵琶に合  
 せて謠ひ初めたるよし、徒然草にしるせり故に風流のはじめ  
 とは申されたる也○師走袋に曰、奥州白川の關を越えて、と有  
 り、鄙の果なれば、物のやさしき事も有るまじきか、昔めきたる  
 田唄を諷へる、是や風流のはじめならんとなり、或人の曰、白川  
 の關をこして始めて始めて奥州へ到るなれば、奥州の風流の始に此  
 田唄を聞きたりと云ふ心なりと云へり、何れ好むかたに隨ふ  
 べし○説叢、師走袋を難じて、此注暫く似たるとも言はんか、後  
 の説は妄説なり、奥州に限るべからず、案するに、猿樂能太夫家  
 に風流と云ふ諷ひもの十七八篇ほどもあり、同じ狂言に田う  
 るうたと云ふもの別に有り、是等の事を思へば、只風流の始め

とのみ言ふにもあらざるべし、都て上代より諷ひ傳へしうた  
 ひもの、はじめは、此みちのくの田うゑ唄より起りて諷ひけ  
 ん、さてもしほらしく床しく古風なる哉、と賞する心にや、一句  
 のふまへは能太夫狂言師の諷ひ物より出でけん、翁の句は底  
 意に何ぞか一ふまへありて、其事をばかくして、今日平生童部  
 にも通曉するやうに句作る事玄妙なり○按ずるに謠の風流  
 狂言の田うゑうたをふまへての句なるや、覺束なし、再考する  
 に、詩歌ともうたひものなり、爰に於て此行脚に始めて諷ひ  
 ものを聞きたる、尤其文句ふしともにふるめかし、是より行先  
 風流古雅なる事あらんと思へる感ならんか、扱是に思ふに女  
 歌仙宮内卿見わたせばふもとばかりに咲きそめて花もおく  
 有るみよしの、山事はかはれども、初とおくとをおもへるは  
 同じからんか、又和歌の詠草判談するに、是は初めよし、或は奥  
 よし、など云へる事侍れば、初め奥の詞うたと云へるに縁語と



も云ふ可きか、此行脚の頃まで縁語まゝ有り○齊東俗談曰、中華書曰、風流云、世通時候、清潔風各條流云、後漢高士傳の注に見えたり、或は輕俊少年を指すことあり、萬葉に、風流士を、タハレヲとよめり、下學集に、風流は風情の義なり、日本の俗呼、拍子物曰、風流、かく見えたれば、これらより云へるといはんもむつかしからん歟○袋表紙に、元祿二己巳卯月、風流のはじめやおくの田うゑうた はせを『覆盆子』を折て我まうけ草 等窮『水』きて盡癡の石や直すらん 曾良脇第三ありて三吟の歌仙有り○詩經、朱熹傳、國風、國者諸侯所封之域、而風者民俗歌謠之詩なり○雪九けに、奥州岩瀬郡相樂伊右衛門亭にて、と前書ありて、此句にふくろ表紙と同じく歌仙有り。

名護屋にて

世を旅に代かく小田の行もどり

袋表紙は東武松露庵烏明藏書

元祿七年に閏五月あり

元祿七年五月旅立、名古屋にて、と行狀記に見えたり○笈日記、尾張の部に、去年元祿前の五月なるべし、尾張國に入りて舊交の人々に對す、と前書有り○古今抄、挨拶切、世を旅に代かく小田の行もどり『人に家を買はせて我はとし忘れ、此切は全く新製なり、其意いかんとなれば、句情に自他の挨拶ありて、是をそれにとも、それには是をとも、物に對する差別より挨拶をもて此名はなせり、下略○むつちどりに、尾州荷分が宅に汗を入るる、と前書有り○古文後集、春夜宴桃李園序、李白、夫天地者萬物之逆旅、光陰者百代之過客○枯尾花の序に、其角云、住つかぬ旅の心や置火燧、是は慈鎮和尚の「旅の世にまた旅寢して草まくら夢の中にも夢も見る哉」とよまれたまひしに思ひ合せて侍る也、遊子が一生を旅に暮し果つと聞えし、下略○住つかぬの句は、糸切齒に、いにしへ芭蕉翁都の旅寢に竹亭を伴ひて、暮四亭へ入る時の吟と見えたり、元祿二三年の頃の句にや○師走袋

千載集 旅の歌とて詠み侍りける

暮四は京都の住



には、翁一生のさまなり、田に水を入れて手にてかきならすを代かくと云ふ、其如く旅に行きつもとどりつすると也。

### 五月雨にかくれぬものや瀬田の橋

元祿二年のあら野集に名所の部に見えたり○雑談集に、此句の評に曰く、この橋の名大かたの名所にかよひて、矢矧の橋とも申すべきにや、長橋の天にかゝる、勢田一橋に限るべからず、と難せしよし、京大津より聞え侍るに、去來が湖の水まさりけり五月雨と云へる、まことに湖鏡一面に曇りて水接天と見えぬ、八景を亡せし折から、此一橋を見付けたる、時と云ひ、所と云ひ、一句に得たる景物の動かざる場を、いかで及びぬべきや、文章の見ものにあづからずと云へる、替者の類ひなるべし○萬の松原に、五月雨ますぞまさぬぞと云へるところ、もろこしには五湖あり、倭には一二にも過ぐべからず、しからは瀬田と云

へるものは古今の模楷ともなるべし。

### 五月雨や蠶わづらふ桑の鳥

元祿七年の續さるのみに見えたり○小文庫に、桑のはたと假名にて有り○泊船集にも、小文庫の通り假名にて見えたり○十論爲辨抄、故翁の發句にも附句にも古詩古歌を裁入たる此論前の篇や竹の子殿にの句の條下に見えたり、よつて略す、下文を記す蠶は熟語を知らぬ人の、心のはこびを得こそ聞くまじけれ、是は筵の一字を入れて、家に飼ひたるさまあらんと、其句のまゝに申捨てられしが、例の泊船集に入りたるよし、今に其集をくやむ事は、それらの骨多ければとぞ、實にも筵とあらば故事にも古語にも及ぶまじ、これらを裁入の鑑とすべし○酌塞には、五月雨や蠶煩ふ桑ばたけとあり○按ずるに、續猿みの、むつ千鳥爲辨抄、共に畑の字也、小文庫泊船集に假名にて、はた、と有るを見るより、爲辨抄に筵の字を



入れて家に伺たるとせんには、端の字を用ふ可きにや、さるを  
畑の字に書けるには、桑の梢に伺はずして自然の蠶にも聞難  
く、注と云ひ、句面の文字と云ひ、愚案に辨する事あたはず、たゞ  
五月雨に蠶の煩ふ自然の實を感ずるのみ。

### 髮生て容顔青し五月雨

貞享四年の續虚栗に、前書、自詠と有り○笈日記にも見えたり  
○按ずるに、古文歐陽永叔が醉翁亭記に、蒼顔白髮頽乎其中間  
者大守醉也と見えたり、芭蕉酒を嗜ます山水を酒とせるが、そ  
の醉翁亭の記中に、作亭者誰、山之僧智仙也、名之者誰、大守自謂  
也、大守與客來飲于此、少輸醉而年又最高、故自號曰醉翁也、醉翁  
之意不在酒、在乎山水之間也、山水之樂得之心而寓之酒とあり。

### 五月雨に鳩の浮巢を見に行かん

貞享四年の眞蹟杉風家珍に見えたり○笈日記に、露沾公に申  
侍る、と前書有り○泊船集、是に同じ○按ずるに、露沾公は奥州  
岩城の城主内藤公也、東都の館虎御門瀧の上溜池の邊に有り  
○三草紙に云、此句詞に俳諧なし、浮巢見に行かんと云ふ所俳  
なり。

### 大井川水出て島田塚本氏の

許にとまりて

### 五月雨の空吹きおとせ大井川

元祿七年の有磯海に前書共にかく見えたり○芭蕉翁行狀記  
に、元祿七年五月十一日江府を出て伊賀の故郷に赴く道の程  
の文に曰、島田には塚本氏杉本氏など久しく音信馴し方あれ  
ばとて、覺束なき五月の空を霽す、五月雨や雲吹落す大井川と



見えたり○泊船集には有磯海と同じく「空吹おとせ」と有り○  
眞蹟に、五月の雨風頻りに落ちて大井川水出ければ島田にと  
どめられて如舟如竹など云ふ人のもとに有りて「昔はまだ青  
葉ながらや茄子汁」さみだれの空吹落せ大井川「やはらかにた  
けよ今年の手作麥 如舟、田植と共に旅の朝起 はせを元祿  
七、五月雨にふりこめられてあるじのもてなしに心動きて、い  
さゝか筆を取る事になん、と見えたり○按ずるに、空の字空か  
と見ゆれど雲にや。

仙人堂岸に立つ、水漲りて舟

あやふし

五月雨をあつめてはやし最上川

元祿二年の吟也。奥の細道の文に、最上川はみちのくより出て

山形を水上とす、ごてんはやぶさなど云ふおそろしき難所あり、板敷山の北を流れて、果は酒田の海に入る、左右山覆ひ茂みの中に舟を下す、是稻つみたるをやいな舟とは云ふならし、し  
ら糸の漕は青葉のひまひまに落て仙人堂岸にのぞみて立つ、  
水漲りて舟あやふし、と有りて此句見えたり○菅菰集に、最上  
川は同國米澤より出づる大河なり、みちのくより出で山形を  
水上とするものは須ヶ川と云うて別也。須ヶ川も最上に劣ら  
ぬ大河にて、最上領の内澁江と云ふ村のあたりにて、最上川に  
落入る、翁の川下より漸く山寺の邊まで曳杖ありて、其上の川  
筋を見給はぬ故に、人の言ふに任せて斯くは記し申されたる  
なるべし、ごてんはやぶさは最上川の内にも難所の名なり、此  
川には難所多し、其中に此二ヶ所はとりわけ危き所なり、ごて  
んは碁點と云ふ、川中あなたこなたに大岩六ツ七ツ散在して、  
碁を打散したる如く、故に碁點と云ふ、はやぶさは碁と書て鳥



の名なり、此所は水底に盤石ひしひしと有りて、晴天にも逆浪立ち、水勢到て早く隼の落すが如し、故に此名有り、何れも大石田より上なり、別て隼は最上川中の大難所にて、快晴の時といへども未の刻より未は舟を乗らすと云ふ。板敷山は山形より津輕邊へ行く往還、古口と清川と云ふ驛の間に有りて名所なり、夫木に「みちのくに近きいはての板敷の山に年経て住むぞわびしき」讀人不知、酒田は庄内鶴岡酒井家の領分、海邊にて最上庄内の運送に便りよく繁華の湊なり。最上大石田より庄内へ出るまでは皆山路にて、其中を最上川流れたり、故に左右山覆ひ茂みの中に舟を下すとあり、古今もがみ川登ればくだる稻ふねのいなにはあらず、此月ばかり「又白糸の瀧は往還相具と古口との間に見えたり、仙人掌は常陸坊海存を祀るといへり、下略、伊達衣には、集めてすいし」と有り。○泊船集に、早しと有り。○或行脚の者云、出羽國大石田の住只狂といへるもの所

一番に  
笠をつなぐ岸の船杭

持の翁眞蹟に、五月雨を集めて涼し、と有り。とぞ、奥の細道再案にや。○大石田一榮亭にて歌仙あり、早し、と有りて「岸に笠をつなぐ船杭 一榮」瓜島いざよふ空に影持て 會良と脇第三有りて、川水と共に四吟也。彼地何某の所持のよし。○雪丸けには大石田高野平左衛門にて、と前書あり、句は、早し、とあり、歌仙同じ。

經堂は三將の像を残し光堂  
は三代の棺ををさめ三尊の  
佛を安置す

### 五月雨の降のこしてや光堂

元祿二年の吟にして、奥の細道の文に、兼ねて耳驚かしたる二堂開帳す、經堂は三將の像を残し、光堂は三代の棺ををさめ、三



尊の佛を安置す、七寶散り失せて、珠の扉風に破れ、堂のはしら霜雪に朽ちて、既に頽廢空虚叢と成るべきを四面新たに圍て甍を覆て風雨を凌ぎ、暫時千歳の記念とはなれり、と有りて、此句見えたり。○菅菰抄に曰、案するに、これ金鷄山の事を逃ぶるなり、經堂は前に注する釋迦堂西界堂の内か。光堂は金色堂を云ふ、三將三代は清衡基衡秀衡也。下略。七寶は法苑樹林曰、長阿含經に曰、一金輪寶、二白象寶、三紺馬寶、四神珠寶、五玉女寶、六居士寶、七五兵寶。又或説に、瑠璃、玻璃、碾磑、碼碯、珊瑚、琥珀、眞珠を七寶とす。或は眞珠を除て金銀を加ふると云ふ説も有り、下略。

頭中將實方の塚を尋ねて

笠島やいづこ五月のぬかり道

元祿二年の吟、奥の細道の文に笠島の郡に入ば藤中將實方の塚はいづくの程ならんと人に問へば、是より遙右に見ゆる山

金鷄山は秀衡建立の伽藍也

際の里をみのわ笠島と云ふ、道祖神の社かたみの薄今に有りと教ふ、此頃の五月雨に道いとあしく身つかれ侍れば、よそながら眺めやりて過ぐるに、斐輪笠島も五月雨の折にふれたり。〔笠島やいづこ五月のぬかり道〕○菅菰抄に、實方は八雲御抄に曰、一條左大臣師尹公孫、侍從定時子也、母左大臣雅信公女、左中將正四位下陸奥守、長徳四年十二月於任國卒、藤原系圖には、長徳元年正月二十六日於任國陸奥守、由閏三月到來とあり、御抄に又曰、此實方行成と同時の殿上人にて有りしが、殿上にて口論をして、行成の冠を笏にて打落されしを、さらぬ躰にて冠を著し、袖かき合はせ、色をも損はずして、是はいかなる故にか亂冠に逢ふやらんを、申されければ、實方いらへんかたなく白らけて立たれけり、主上此事をひそかに御覽じて、實方をば歌枕見てまわれとて陸奥守になして遣はされ、終に召し返へされずして國にてうせし也と、袖中抄には彼の中將はみちのくの



所々の歌枕見んためにかくての任也、仍て陸奥中將と言ふと記せり。八雲御抄に云、或説に實方笠島の道祖神の前にて下馬なくして通り給へりければ、神前にて馬たふれて實方卒すと云ふ、今に實方の廟其社のかたはらに有りと云へり、形見の薄は新古今哀傷の部に、みちのくにて廣き野中に實方の塚とてありけるに、薄など生ひたるを見て「くちもせぬその名ばかりを」といめ置きてかれ野のすゝきかたみとぞ見る 西行

山家集にみらのくにと見えたり、四季物語にも出でたり

洒落堂頽破

五月雨や色紙へきたる壁の跡

元祿四年雜談集に前書共如斯見えたり○笈日記、嵯峨の部に落柿舎と前書有りて、色紙まくれしとあり○泊船集にも、落柿舎の句とし、色紙まくれしと見えたり○案するに、洒落堂は湖南の珍碩が堂號なり、爰に下總岩部の茂蘭と云へる者有り、行

表の名殘集は北枝選

脚の折から何某が家藏の眞蹟を寫す、二世宗瑞が先手後手と云へる選集に是を加ふ、其文に曰、洛の何某去來が別莊は下嵯峨の藪の中にして、嵐山の麓大堰川の流に近し、此地閑寂の便りありて心すむ可き所也、彼去來物ぐさきをのこにて、窓前の竹高く數株の柿の木枝さし覆ひ、さみだれ漏盡して奥障子微くさく、打臥所もいと不自由也、日陰ぞかへりて主のもてなしとぞなれりける、五月雨や色紙へきたる壁の跡 芭蕉庵桃青と見えたり○嵯峨日記に、五月四日宵に寐ざりける草臥に終日臥し、晝より雨降り止む、明日は落柿舎を出でんにと名殘惜しかりければ、奥口の間々々を見廻りて「さみだれや色紙へきたる壁の跡」と見えたり、喪の名殘に、色紙まくれしと有り。

箱根の關越えて

目にかゝる時やことさら五月不二

發句集にも七年とす



元祿七年五月十一日江府を立ちて箱根の關越えての吟なるよし、行狀記に見えたり。是より先き、貞享元年野ざらし紀行に箱根の關越ゆるとて「霧しぐれ富士を見ぬ日ぞおもしろき」の吟あり。○五月三十日の不二の思ひ出らるゝにと前書あり。○茜堀に、伊勢物語に、ふじの山を見ればさ月の晦日いと白うふれる「時しらぬ山はふじのねいつとてかかのこまだらに雪のふるらん」。

義經の太刀辨慶が笈をと

めて什物とす

笈も太刀も五月にかざれ紙幟

元祿二年の奥の細道に、月の輪の渡しを越えて瀬の上と云ふ宿に出づ、佐藤庄司が舊跡は左の山際一里半斗に有り、飯塚の里鯖野と聞きてたづね行くに丸山と云ふに尋ねあたる、是庄

司が舊館也、麓に大手の跡など人の教ふるに任せて、涙を落し、又傍らの古寺に一家の石碑をのこす、中にも二人の嫁がしるし先づ哀也、女なれどもかひがひしき名の世に聞えつるもの哉と袂をぬらしぬ、墮涙の石碑も遠きに非ず、寺に入りて茶を乞へば、爰に義經の太刀辨慶が笈をとめて什物とす、と詞書有りて此句見えたり。○菅菰抄に曰、庄司は秀衡が家臣にて信夫郡を領し、信夫の庄司佐藤元治と云ふ大職冠の苗裔、次信忠信が父也、又甲冑堂と云ふ、佐保川の邊りに有り、佐藤次信同忠信二人が妻の、甲冑を著たる木像ある故に堂の名とす、兄弟戰死の後、二人の婦、甲冑を著し軍戰の粧をなして、のこれる老母を慰めしと云ひ傳ふ、又曰、墮涙碑は晋書羊祜傳、祜樂山水、每風景必造岨山、置酒言詠、終日不倦、祜死後、襄陽百姓於羊祜平生遊憩之處、建碑立廟、歲時祀、望其碑者莫不流涕、杜預因名墮涙碑。



松島鹽がまの所々畫に書き  
て送る且紺の染緒付たる草  
鞋二足餞す、さればこそ風流  
のしれものこゝに到て其實  
をあらはす

菖蒲草足にむすばん草鞋の緒

元祿二年の吟也、奥の細道に名取川を渡つて仙臺に入る、菖蒲  
ふく日也、旅宿をもとめて四五日逗留す、爰に畫工加右衛門と  
云ふものあり、聊心あるものと聞きて知る人になる、此者とし  
ごろさだかならぬ名所を考置侍ればとて一日案内す、宮城野  
の萩茂り合ひて秋の氣色おもひやらるゝ、玉田よこ野つゝじ  
が岡あふひ咲く頃也、日蔭ももらぬ松の林に入りて爰を木の

菅菖抄に俊成とあり、後  
頼にや堀川百首の歌

下と云ふとぞ、むかしもかく露ふかければこそ、みさむらひみ  
かさとは詠みたれ、薬師堂天神の御社など拜みて、其日は暮れ  
ぬ、猶松島鹽がま所々畫きて送る、且紺の染緒つけたる草鞋二  
足餞別す、さればこそ風流のしれもの爰に到て其實をあらは  
す、と有りて、此句見えたり○菅菖抄に云、玉田横野つゝじが岡  
みな名所也、取つなげたま田よこ野のはなれ駒つゝじが岡に  
あせみはな咲く 俊成卿あせみとは馬酔木也、古今大歌所御  
歌みさむらひみかさと申せみやぎのゝこの下露は雨にまさ  
れり○榮雅抄に、御侍御傘まゐらせよと申せ、宮城野の木の下  
露は雨にまされるは雨にまさりたる也、宮城野は萩も多く露  
しげき處也、笠は侍の役也、雨より露のまさりたるにあらず、雨  
のふれば水のまさるといふが如し○大和本草に曰、馬酔木、微  
毒あり、馬此葉を食へば死すと○泊船集には、紐にむすばん草  
鞋の緒、と有り○桃鏡選の芭蕉文集に、名取川を越て松島鹽



見に罷り侍るに、繪師加右衛門と云ふ者やさしくおかしき男にて、紺の染付の緒付たる草鞋二足、饒すあやめ草足に結ばん草鞋の緒、其後は久しく便りなく候いか、御暮被成候哉、愚老此間奥より歸り申候所々にて逗留、一句づゝ致候併大暑の時分長途こまり入候、貴様など、道中致候は、面白き事にて可有之と存候京へ用事も有之候に付、登申度存候得共爾今草臥やみ不申一日々々と延引に成候今日は雲竹老より人參り候故次手ながら申入候何事も近々懸御目可承申候已上 十一日 其角丈 はせを。

粽ゆふ片手にはさむ額髪

元祿四年の猿みのに出でたり○泊船集に、物語りのすがたも一集には有る可きものとして、去來が猿蓑集に遣はされしよし承りぬ、と見えたり○古今抄に、畫圖の體、粽ゆふ片手にはさむ

額髪「降らすとも竹植る日は蓑と笠石二章を畫圖の體とは、祖翁むかし猿みの撰場に、物語りの面影をば一句は入集す可きにや、と此粽の句を送り給ふるよし、下略、竹植るの句の所に出だす。

正成之像鐵肝石心此人之情

なでしこにかゝる泪や楠の露

何れの年の吟にや知らず、小文庫に見えたり○泊船集にも出でたり○太平記を見るに、楠正成五百餘騎にて兵庫へ下る、正成是を最後の合戦と思ひければ、嫡子正行が今年十一歳にて供しけるを思ふやう有りとしてさくら井の宿より河内へ返し遣すとして、庭訓を殘しける、獅子子を生んで三日を経るとき、數十丈の石壁よりこれをなく、其子獅子の機分あれば教へざるに中よりはねかへりて死する事を得ずと云へり、况や汝已に



十歳に餘りぬ、一言耳にとまらば我教訓に違ふるなかれ、此度合戦天下安否と思ふ間、今生にて汝が顔を見ん事はを限りと思ふ也、正成已に討死すと聞きなば、天下必將軍の世になりぬと心得べし、しかりといへども一たん身命をたすからんために多年の忠烈を失ひて、降人に出づる事有るべからず、一族の若黨一人も死のこりてあらん程は、金剛山の邊りに引籠りて敵寄せ來らば命を養由が矢先にかけて義を紀信が忠に比すべし、是汝が第一の孝行ならんすると、泣々申含めてかく東西へ別れにけり、と有り○おさな源氏は、ききに、頭中將の物語に、しのびて見そめし人あり、親もなく心細げにて我をうちたのめる(北の方なり)四の宮よりうたてしき事をいひやる、さる事も我は知らで久しくおとづれもせざるに、をさなきものひとりあるに、おもひわびて、なでしこの花につけて女山がつかきほありともをりをりにあはれはかけよなでしこの花

國破れて山河あり城春にし  
て草青みたりと笠うち敷て  
時のうつるまで泪を落し侍  
りぬ

夏草や兵どもが夢の跡

元祿二年の吟也、奥の細道に、三代の榮耀一睡の中にして、大手の跡は一里こなたに、秀衡が跡は田野と成りて、金鷄山のみ形をのこす、先づ高館にのぼれば、北上川南部より流るゝ大河なり、衣川は和泉が城をめぐりて高館の下にて大河に落入る、康衡等が舊跡は衣が關南部口をさしかたため、夷をふせぐと見えたり、偕も義臣すぐつて此城に籠り、功名一時の叢と成る、國破れて山河あり、城春にして草青みたり、と笠打敷て時うつる迄



泪を落しぬ、三代は清衡基衡秀衡を云ふ、金鷄山は秀衡建立の伽藍地也、高館は義經籠居の城にて、今半ば畑となる、康衡は秀衡の二男伊達次郎と云ふ、夷をふせぐは蝦夷を防ぐなるべし、國破れて山河あり城春にして草青みたりとは杜甫が春望の詩に、國破山河在、城春草木深、の句をとりて、青みたりと換骨せし也。

### 殺生石

#### 石の香や夏草赤く露暑し

何れの年の吟にや未だ知らず、伊達衣に前書ともかく見えたり○泊船集にも如斯有り○奥の細道に、殺生石は温泉の出づる山陰に有り、石の毒氣いまだ亡せず、蜂蝶の類ひ真砂の色の見えぬ程かさなり死す、とまではあれども此句は見えす○大和本草に、殺生石は砒石なるか。

發句集元祿二年とし、前書細道の文に同じとし、かれども細道に此句見えす不詳とす、玉藻前の事犬追物及俗源翁が事は和漢三才圖會に出でたり源翁は伽藍記にもあり

#### 行すゑは誰肌ふれん紅の花

何れの年にやしらす、西花集に此句はいかなる時の作にかあらん、翁の句なるよし人の傳へ申されしが、題しらすと有り○新古今春梅の花たが袖ふれしにほひぞと春やむかしの月にとはばや 右衛門督通具

#### 眉掃を佛にして紅の花

元祿二年、奥羽行脚、出羽の尾花澤にての吟とあり、則ち細道に出でたり○菅菰抄に云、まゆはきは草の名、卑俗馬屋ごやしと云ふ、あざみの種類也、按ずるに眉掃はもと婦人の化粧を抹する具にて大女郎小女郎など云ふ、此花の形是に似たる故の名にて、此句に紅の花のとり合せも又此義也○按ずるに、大和本草に、薊大小あり、大小ともに葉に刺あり、大薊は俗に鬼あざみ



と云ふ、花を鬼の眉掃と云ふ、又飛廉を鬼のマユハキと云ふ、鬼あざみに似て莖の四方に鬼薊の如くに矢の羽の如くなるヒレあり、針もあり、花も鬼薊に似たり、菅菰抄にいへる眉掃は是なるべし、此大薊飛廉に、紅花に似たると云はんはむつかしからん、只婦人の具の眉掃に似たるにて事済むべきか○百菴曰、大薊を俗鬼薊と云、花鬼の眉掃と云、形婦人の眉掃の如し、此説より芭蕉の句泥花を鬼薊と云は女薊なるべし、眉掃を面影にせん花薊、梅仁、薊の句楚忽と雖芭蕉が偽を正す○按ずるに百庵も菅菰抄に同じく誤りならん。

已百亭

やどりせん藜の杖になる日まで

貞享五年の句なるべし、笈日記、岐阜の部に、所々見廻りて洛にしばらく旅寝せしほど、美濃の國よりたびく消息ありて、桑

發句集集貞享五年とす

或曰已百は岐阜の人、盲人、

きのふと云ひけふとくらしてあすか川ながれてはやき月日なりけり

もろき人にたとへん花も夏野哉

門已百のぬし道しるべせんととぶらひ來たり侍りてしるべして見せばやみの、田植唄 已百「笠あらためん不破のさみだれ 芭蕉其草庵に日比有りて」やどりせん藜の杖になる日まで「貞享五年夏の日、と有り○評林に、瓢蓴屢々としてれいしやうふかく茂りし顔淵が住家も思ひ出られぬ、閑室のつれづれなるべし、しばしの舎りと見るべし、光陰とよまらず、飛鳥川の歌にもとづくや、杖になると云ふより旅行の心ざしをうけて、老い行く事を託せられたり、尙可尋。

貞享五年の吟なるべし、笈日記、岐阜の部に、やどりせん句有りて、貞享五年夏日とある、扱次に名にしあへる、鞠侗と云ふものを見侍らんとて、暮かけていざなひ申されしに、人々稻葉山の陰に來たり、席をまうけ盃をあげて「又やたぐひ長良の川の



鮎鱈夏來てもたゞ一つ葉の一葉哉鶉舟も過るほどに歸ると  
 て面白くやがてかなしき鶉舟哉落梧亭藏の陰かたばみ草の  
 めづらしや 荷兮をりてやはかん庭の帯木 落梧たなばた  
 の八日は物のさびしくて 翁其頃ならん落梧のをさなきも  
 のを失へる事を悼みてもろき人にたとへんはなも夏野哉  
 翁似た顔のあらば出てみん一をどり 落梧されば夏野の花  
 をはかなしと見たる叟かつ見られてはかなしと思ふ親の心  
 も共にといまる可からねば落梧は四とせばかり先に身まか  
 り阿叟は去年の冬世を去り給へりかく云ふ人も亦いつか人  
 にはんと思へば何に定む可き世の限りぞや○按ずるに此  
 笈日記は元祿八年の詞也落梧歿したるは元祿三四年の夏京  
 大津などに吟あり東都下向は四年の秋也依て三四年の間美  
 濃遊杖有りけるやに侍れども笈日記のおもてを考ふれば一  
 葉の句元祿二のあら野集に見えたるをも思ひ合せて貞享五

年なるべしとす元祿五年の己が光集に是貞享五辰也

羽黒は黒羽也  
 むつ千鳥に黒羽とあり  
 翠桃とあり、細道同じ  
 く黒羽とあり、桃翠と  
 あり

陸奥に下らんとして下野の  
 國まで旅立ける、那須の羽黒  
 と云ふ所に桃翠何某住ける  
 を尋て、深き野を分入るほど  
 道もまがふ許り草深ければ

秣負ふ人を枝折の夏野かな

何れの年の吟なるや、不詳といへども、元祿二年奥羽行脚の時  
 の句なるや、むつ千鳥に前書かくの如く有りて脇青き覆盃子  
 をこぼす椎の葉 翠桃村雨に市の假屋を吹きとりて 曾良  
 第三ありて芭蕉翠桃曾良三吟の歌仙有り○奥の細道に、黒羽  
 の館代淨坊寺何某の方に音信す、思ひかけぬ主のよるこび日



夜語りついでに其弟桃翠など云ふが朝夕勤めとぶらひ、自家にも伴ひて、親族の方にもまねかれ日を経ると見えたれど、此句の事見えす。○按ずるに、曾良が吟もあれば此行の吟なるべし。○師走袋に、此句夏野の茂りたるを云立ての句也、枝折は、山路を行く人の跡より来る者のしるべに草木の枝を折りかけて通る事なり、夏草の中は何のしるべもなければ、草かりて背に負うたるものを枝折にして行く、となり。○雪丸けにも此歌仙あり。○山家集に「旅人の分る夏野の草しげみ葉ぞへにすげの小笠みつれば」。

人々川崎まで送りて餞別の

句を云ふ、其かへし

麥の穂をちからにつかむ別かな

元祿七年の有磯海に前書とも如斯見えたり。句は、たよりに摺むとあり。○むつ千鳥に、老いたるこのかみを心もとなくや思はれけん、故郷ゆかしく、又成の五月八日此度は西國にわたり長崎にしばし足をとめて唐土船の往來を見つ、聞馴れぬ人の詞を聞かんなど、遠き末をちかひ、首途せられけるを、各々品川迄送り出で、二時ばかりの余波別る、時は、互にうなづきて聲をあげぬ斗也けり、力につかむ別かな、と見えたり。○行狀記に、元祿七年五月深川を旅立、弟子共追々に馳付きて品川の驛に慕ひ付く、と有りて、句は、便りにつかむわかれ哉、と有り。○按ずるに、旅行に夏の句を云ふ、尤其時の風姿といひ、さびしみの景物ながら、東坡が狀元集紀行の詩に、春草憂無麥、山靈喜有湫と見えれば、和漢通情可察。

甲斐國山家に立寄て



行駒の麥になぐさむやどりかな

貞享二年野ざらし紀行に見えたり。尾張より東武に歸る時の吟なり。詞書もかくの如し。○評林に、光陰の隙ゆく駒なるべし、寸陰も惜む事なく、雲水のとゞまる事なく、麥の穂の招くにはとゞまり、幽思のさだかならぬ旅行のさまを云ふべし。○師走袋に云、甲斐國山家にての句也。甲斐はむかしより牧の駒多し、所謂甲斐の黒駒など云ひ侍る是也。所がら行駒とは置かれたり、それさへ時分なれば麥秋に立止るなり、夏季なれば也。○説叢に師走袋を難じて曰、入ほがにして甲斐の駒に限るべからず。○按ずるに入ほがともいひがたし、前書甲斐の國とあれば甲斐の駒古雅をおもへるにや知る可からず。○説叢又評林を難じて曰、光陰にひまゆく駒めづらし、あまりに文盲也。此句意は常の事也と見るべし、光陰の駒は大に當らず、入ほがなり、翁

夫木抄  
ませこしに麥はむ駒の  
のらなれど猶も戀しく  
おもひたえぬなよみ  
人しらす

の心に非ず、麥といへば、はや麥秋の穂とおもふらめど、芽を出し葉わかるゝよりはや麥也。此句は我雲水漂泊の身は馬の麥穂になづみてくらす如しと觀想なり。此、宿り哉、と有るに心を付く可し。宗祇のやどり哉、とおなじやどり也。大切の句のしづまる所也、招くも留るも入らず解せる也。○按ずるに評林の説あたれるや、不知説叢に云所、評林を難すれども、只光陰の隙行駒とは評林の説むづかしからん。雲水のとゞまる事なくといへる、説叢もおなじきにや。此句麥秋といへる評林の意は、麥の立のびたる所をいはんとてにや。是も説叢に難する程の事にもあらず。爰に再考すれば、芭蕉の句多く莊子の意味あり、是も莊子の意なるにや。莊子曰、或聘於莊子、莊子應其使曰、子見夫犧牛乎、衣以文綉、食以芻菽、及其牽而入大廟、雖欲爲孤憤、其可得乎。

伊豆の國蛭が小島の桑門、去



年の秋より行脚しけるに我  
名を聞きて、草のまくらの道  
づれにもと尾張の國まで跡  
をしたひ來りければ

いざともに穂麥くらはん草まくら

貞享二年の吟にして、野ざらし紀行に前書ともにかく有り○

孤松集に、行脚の客にあうてと有り、句同じ。

### 夏之上終

### 夏之下

#### 青さしや草餅の穂に出つらん

天和三年の虚栗夏の部に出でたり○泊船集にも見えたり○  
句解に草餅の春もいつしか青さしの穂に出るよと時節の觀  
想也、青さしは麥を炒て調じたる菓子なり、上臈もさこしめす  
ものによ、枕草紙に青さしと云ふものを人のもてきたるを、青  
き游様を艶なる硯の蓋に敷きて、是れませごしにさふらへば  
とてまゐらせたれば、后宮御歌、皆人は花や蝶やと急ぐ日も我  
心をば君ぞ知りける」とよませ給ひける○二夜問答曰、此句意  
は麥の穂の若きをすりて炒たる物を、縣人青さしと云ふ、是は  
春の雛あそびに草餅てふものをつくる故に、それが穂と成り  
て出づらんと云ふ意なる可し。是青さしてふものをと書きた

人の家につきつきしき  
もの、段に見えたり、  
紙のはしをひきやりて  
書かせ給へる、いとめ  
でたしと有り



る所にて知らずや、いかなる鄙びて人の知らざるものなりとも、何と云ふもの、何てふものと書けば、廣く其物の通せざる事なく、枕草紙に名目出でたればとて、青さしやとばかり打つけに置かんは、其言製の委しからざる也。芭蕉は何の心もなく青さしを見て青さしと置きたる迄ならんを、評者の枕草紙を引きたるにて却て芭蕉の罪を長せり、古人にかゝる違ひめ有るを後の人の眼をもて正す事能はずと云々○説叢に云、此説甚無理なる可し。そのうへ翁をさみする底意見えたれば、此罪莫大也。第一に青さしとちつけに置かんは言製の委しからざるなりと、是翁を蔑にしたる詞也。其罪をのがれんとて、又言、芭蕉は何の心もなく青さしと置きたる迄なりと云ひ紛らかしたる比興也。青さしてふ草餅の穂に出づらめとは云はれぬ民間の詞なれば、青さしとばかりにてよく聞え、世上に通ずる也。俳諧は俗談平話より國々の方言、民間の鄙語までも漏さず

あつかひ用ふる蕉門の立派也。夫に何ぞや雅語をもて評す可きや。俳諧と和歌との境だに明かならで、後の人の眼をもて正す事能はずと云ふ人は此説者なる可し。青さしてふ、青さしと云ふ物如此に一々断りて發句なる可きや。雅語のぬめりとして、たま〜は百韵の内百句の内にもてふと云ふ言葉遣ふは曲節にする也。

昔はまた青葉ながらや茄子汁

元祿七年東武より古郷伊賀の旅中にての吟と見えたり。其跋集に五月の雨風しきりに落ちて、大井川水出で侍りければ、島田にとゞめられて、如舟如竹など云ふ人の許にありて、と有りて此句あり。又五月雨の雲吹き落せ大井川の句有り。此時やはらかにたけよ今年の手作麥と如舟が吟あり。此句に「田植」とともに旅の朝起と芭蕉の脇あり。奥書に元祿七五月雨に降り

此眞蹟島田塚本孫兵衛所持



こめられて、主人のもてなしに心動きて聊筆とるになんと見えたり。○此句泊船集にも見えたり。

### 重行亭

#### めづらしや山越出羽のはつ茄子

元祿二年の吟と見えたり。しかれども奥の細道に、羽黒を立ちて鶴岡の城下長山氏重行と云ふものゝふの家に迎へられて、俳諧の一卷有り。左吉も共に送りぬとはあれども、此句見えず。然るに出羽の國の住吳天と云ふもの、初茄子と題せる一集を出す。其序に我翁の奥の細道に羽黒山を立ちて鶴岡の城下長山氏重行と云ふものゝふの家に迎へられて俳諧一卷あり、左吉もともに送りぬとぞ、されば其一卷をそこの家に秘め置きて、今將梓行の沙汰に及ぶと見えたり。其一卷に、羽黒山を出て鶴岡重行亭と前書有りて、めづらしや山越出羽の初茄子

圖司左吉は呂丸が事なり

芭蕉「蟬に車の音をふる井戸 重行」紺織の音いそがしく梭打て 曾良「閨彌生の末の三日月 呂丸」右四吟の歌仙なり。

#### 藤しろみさかといひけん花

#### は宗祇の昔に匂ひて

#### 藤の實は俳諧にせん花の跡

何れの年にや知らず。泊船集秋の部に、關の住素牛何某、大垣の旅店を訪れ侍りしに、彼の藤しろみさかといひけん花は宗祇の昔に匂ひて、と前書有り。○評林に此句は初夏の句也。泊船集に秋の部に入りたり。夏の句に相違有るまじきを、いかゞの故か覺束なし。夫ゆる初夏なれど晩夏の中に入る。此句は宗祇法師の發句に「關越えてこゝも藤しろみさか哉」右の句を證句として、かくは申されしや、猶考ふべし。○按ずるにあら野集

發句集年號知らず 冬の日「秋蟬の虚に 聲聞く静かさは」と云 句の附に「藤の實つた ふ響はつちり」と有り 是芭蕉一連の歌仙也、 秋の部に出せる事あながち風國が杜撰ともいひがたし、 秋の寢覺には藤白き山とあり 夫木抄 爲家 ふぢしろの山の御坂を 越えもあへず先づ日に かゝる吹上の濱



に「關越えてこゝも藤しろみさか哉宗祇法師美濃國關と云ふ所の山寺に、藤の咲きたるを見て吟じたまふと也」と見えたり。斯の如くみさかと有るを泊船集にみかさと誤れるより、句選評林共に誤れるか○説叢には、藤の實は俳諧にせん歌の種と有りて、評林を難じて曰、評林に評なし、宗祇の句を擧げたるのみなり、藤の實年中落ちずしてあれば、夏とも定め難し、もし櫻の實などの例をもて云はんには、初夏中夏ともすべきか、都て實の青きは夏熟したるは秋と季立の公道ならん、秋とするは泊船集はもとより誤り多き書なればなり、句選に、藤しろみさかといひけん花は宗祇の昔に句ひて、と云ふ詞書を出せり。しからば宗祇の句より出で、一轉したるものと見ゆ、藤しろ御坂は紀伊の國の名所、藤あまた有る所とぞ、古歌に多く詠めり、此句意歌の種といふ所論有るやうに聞え難し、もしや俳諧歌の種にせんとにや、答云、斯く解したらんは緩怠なるべし、歌は

堂上の外、地下にいらふべきに非ず、俳諧歌とても又然り、其心を酌みわけて俳諧と云ふもの別に出生、一變して世に歌の片破の道となりて、我等如きまでも情を述べ思ひを遣る事にぞなりける。此句解せんには、藤の花は詩歌連俳ともにもてはやしめ、でたきためしなるを、其實はをかしくさびて、見捨てられたる其姿にぞよき俳諧の賜なれ、詩歌に詠まれし花の跡の實なればいかでか捨つべきや、俳諧の種にせんするものをと解すべし、是正に温厚寛和の解と云ふべき也○按ずるに説叢に「藤の實は俳諧にせん歌の種と花の跡と有り、泊船集句選共に花の跡と有り、歌の種とあるを未だ見ず、歌の種にては解きやすからず、花の跡と有るにては、花は宗祇の連歌、實は我俳諧にせん相應のものよとにや、説叢の如く解したらんには、此前書の宗祇の句餘所になる方にも侍らんか。



椹の實や花なき蝶の世捨酒

天和三年虚栗集に見えたり○泊船集に、是は虚栗の比の句なり、と有り○蒙求、蔡順分椹王莽未天下大荒、順捨椹、赤黑異器盛之、赤眉賊見而問之、順曰、黑者奉母、赤者自食、賊知其孝、乃遺米二斗、牛蹄一雙○按するに椹實を製して椹酒とてもてなす、本草には葉を酒に煎服す。

紫陽花や帷子時の薄淺黄

何れの年の吟にや、むつ千鳥に見えたり。

紫陽花や藪を小庭の別座敷

元祿七年の別座敷集の序に、麻の生平のひとへに衣うちかけ身軽く成り行くほど、翁ちかく旅行思ひ立ち給へば、別座敷に

伴ひ、春は歸庵をうち歎きて、さて俳諧を尋ねけるに、翁今おもふ體は淺き砂川を見る如く、句の形は心ともに輕きなり、其所に至りて意味ありと侍る、何れも感じ入りて及ばずも此流を慕ふ折ふし、庭の夏草に發句を乞ひて咄の内歌仙終りぬ、是を卷頭として、有合せたる卷の夏の句の言ひ捨てたるをとり集め、門人の餞別を結びて伊賀の山家のつれづれに送り侍る、紫陽花や藪を小庭の別座敷　はせをよき雨合に作る茶俵子　珊瑚、朔日に鯛の子賣の聲聞きて　杉風、其外桃隣八桑五吟の歌仙有り。

象瀉の雨や西施が合歡の花

元祿二年の吟也、奥の細道の文に曰、江山水陸の風光敷を盡して、今象瀉に方寸を責め、酒田の湊より東北の方山を越え磯を傳ひ、いさを踏みて、其際十里、日影や、傾く頃、沙風眞砂を吹



上げ雨朦朧として鳥海の山隠る、關中に攀索して雨も又奇なりとせば、雨後の晴色又頼もしと、蟹の筈屋に膝を入れて、雨の晴を待つ、其朝天能く霽れて朝日はなやかにさし出づる程に、象潟に舟を浮ぶ、先づ能因島に舟を寄せて三年幽居の跡を吊ひ、向の岸に舟を上れば、花の上漕ぐと詠まれし櫻の老木、西行法師の記念を残す、江上に御陵あり、神功皇后の御墓と云ふ、寺を干満珠寺と云ふ、此處に行幸ありし事未だ聞かず、いかなる事にや、此寺の方丈に坐して籠を捲けば、風景一眼の中に盡きて、南に鳥海天をさへ、其影うつりて江に在り、西はむやくの關路を限り、東に堤を築きて秋田に通ふ道遙に、海北に構へて、浪打入る所を汐こしとぞ、江の縦横一里ばかり、俣松島に通ひて又異なり、松島は笑ふが如く、象潟は恨むが如し、寂しさに悲みを加へて地勢魂を惱ますに似たり、象潟や雨に西施が合歡の花○東山墨直しに、古翁東行の記行に、松島は笑ふが如く、

古文前集長恨歌  
玉容寂寞淚闌干、梨花  
一枝春帶雨、  
杜律 海棠春一夢、  
和漢文棟 月見賦  
評林松島の事と象潟の  
事と混す、  
「名月や湖水に浮ぶ七  
小町」されば我朝の紫  
式部は石山に源氏の面  
影をうつし、唐國の蘇  
居士は西湖に越女の粧  
なたとふ、  
蓮二が注に  
蘇居士は東坡なり、西  
湖の時若把西湖  
比西施、淡粧濃抹兩相  
宜、  
東坡が作奇也と爰に於  
て感じ、是にかふるに  
風色かなしみを加へて  
西施がねぶれる容を思  
へるにや、又彼地の人  
語て曰、象潟は常より  
も雨中の景色殊に勝れ  
たりと

象潟は泣くに似たりと云へり○評林に松島は笑ふ如く、象潟は眠るが如しと、扶桑第一の好風にして、造化の天工、狩野も筆を捨てたるべし、美人の笑める如しと、雨を帯びたる梨花によそへて、合歡の花を西施になぞらへたり、海棠の雨にねぶるを新しくやはり合歡の木にとり直されたる名人のうへなればや、象潟の風景をよく言ひ叶へたる妙意也、猶尋ぬべし○説叢に曰、評林合歡を西施に準へてとは大に相違なり、聯珠詩格曰、題西湖、東坡、水光潋灩晴更妙、山色朦朧雨亦奇、若把西湖比西子、淡粧濃抹兩相宜、此絶句をふまへて、蚌潟を洞庭湖に比して作りたる句なる事顯然たり、其器の凡ならぬ所を稱すべし、但西子は西施なりと詩格の注に見えたり、奥の細道の文章に曰、雨朦朧として鳥海の山隠る、關中に攀索して雨も又奇也とせば、雨後の晴色又頼母しと書かれたり、合歡は彼地にあまた有るよしなり、之に依て季となして且一美人の形容粧濃抹を摸寫



して出す、妙也、此花に非ざれば此四字の摸寫なるべからず、其物によつて其情をうつす、凡器にあらぬ所也、象潟一見山色朦朧雨又奇淡濃沫といひけんも又奇なる可しと云ふ詞書有りて此句有り、翁の眞蹟越後國沼垂町眞野氏家珍とす○菅菰抄に云、尺牘雙魚見道旁雨中花彷彿、湘娥面上啼痕と、又此句の面影に似たり○按ずるに坡が西湖の詩を云へる文章と云ひさも有るべし、又西施が合歡は眠るに秀句と聞ゆるを、おもへば、文の中に松島は笑ふが如く象潟はうらむるが如し、寂しさにかなしみを加へて地勢魂をなやますに似たり、とあれば、莊子外篇天運、西施病心而顰其里、其里醜人見而美之と有るよりの眠りにや、支考が東山墨直しには、松島は笑ふが如く象潟は泣くに似たりと云へるも思ふ可きか○以哉坊が奥羽行に、沙越の里なる金氏何某の家珍に持ち傳へし祖翁の自ら書き給ふ其の詠を敬拜して寫す、象潟象潟の雨や西施がねふの花」夕

林希逸注、隱憂額也  
蒙求、西施越女所謂西  
子也者絕世之美

方雨やみて處の何がし舟にて江の中を案内せらるゝ夕晴やさくらにすゝむ波の花」腰長や鶴脛ぬれて海涼し 武陵芭蕉翁桃青三章ともに渡紙の横物一幅に書き残し給ふ○雪九けに、六月十七日朝、象潟雨降り、夕止み、舟にて潟を廻る、と有りて、此句次に曾良其外低耳不玉などの吟、其次に夕晴の句見えた

許六が木曾におもむく時

旅人のこゝろにも似よ椎の花

元祿六年の吟也、韵塞に許六離別の詞、去年の秋かりそめに面を合せ、今年五月の初深切に別れを惜む(下略)芭蕉の文ありて元祿六孟夏末風羅坊芭蕉述と有り、次に又其詞と云へるに文あり、曰く、木曾路を経て舊里に歸る人は森川氏許六といふ、古へより風雅に情ある人々は、うしろに笈をかけ、草鞋に足を痛



め、破笠に露霜を厭ひて、己れが心を責めて物の實を知る事を悦べりと、仕官公のために長劔を腰にはさみ、乗かけのうしろに鎧を持たせ、徒士若黨の黒き羽織の裾は風に翻りたる有様、此人の本意にはあるべからず、椎の花の心にも似よ、木曾の旅「うき人の旅にもならへ木曾の蠅」此兩句に決定す可き由申されけれど、今滅後の記念に二つをならべ侍る、とあり、續猿蓑に前書ともに句選の如し○句解に萬葉集に「家であれば筍に盛る飯を草枕旅にしあれば椎の葉に盛る馬牽かせ鎧持たせける旅寝ながら、風雅の細みをたどる其人を稱するなり○説叢に云、句解一向當らず、花も旅人の風雅に似よとはいかにぞや、又引歌心違へり、是は只旅の不自由なるさまを詠みたる也、扱句の旅は許六なれども夫をさしてあながちに云ふ事とも聞えず、思ふに只うちまかせて世の中の旅人の事也、其故は許六は彦根の城主に仕へて家祿重く、富貴といひ博學廣才也、此度

木曾路をかけて蕃里に歸る旅行に餓別するの意は、都て世の旅人を見給へ、哀れに淋しきが旅にてこそあれ、木曾はまして山中不自由がちなる所と云ひ、椎も多くあれば、時節柄の椎の花の淋しく有るか無きかと言はるゝ程にこそあらまほしけれ、無益の金銀を費し、學力敏才に誇るべからず、都て旅人の心を汲み知りて、椎の花の淋しきさまに遊びなば、いと旅中の風雅も面白かるべし、ひとへに垂戒を含めたるなり、乙州へは梅わか菜、支考へは五器一具の如き、師道の弟子を憐む何れも甲乙なし、旅人を許六とさして聞くは悪しきなり、世上の旅人の事を先づあげていひ出す詞と云へる也、斯の如くならざれば似よ、椎の花、といふ所分明ならぬなり、たゞ椎の花も此人の風雅に似よとは其意聞えず、椎はもとより淋しきものにて、花も又見る程の事も無ければ、許六に似ずとも、事なるべし、木曾の人を真似ると云ふ事も有るべからず、椎の花の淋しみにも



風雅の心を真似よといはんこそ殊の外に優るべくや有りな  
ん、此句とにつけかくにつけ、あやまりあらんと思ふに、韵塞に  
「椎の花の心にも似よ木曾の旅」うき人の旅にもならへ木曾の  
蠅」翁の旅人の心にも似よと後に直されたるにや、聞えぬや  
うには直されぬ筈なり。必ず後人の誤り且聞き違へて又それ  
を傳寫の謬りにや。たゞ椎の花も旅人の心に似よとは一句も  
ふつゝかにして聞えず椎の花の心にも似よと慥なる證文出  
でたり。句選に此二句見えず華雀の韵塞見ずや有りけん杜撰  
なるものにて此外誤り多く用ひ難し。○按ずるに成程句解の  
引歌に及ぶまじきか。されども旅にしあれば椎の葉に盛ると  
云へる、椎と云ひ、旅と云ひ、其它といひ、此二字の出所ならんか  
と云ふとも、句解さまで難すべき事に非ざるか。又韵塞を慥と  
し、旅人の五文字の方を誤といへども、已に續猿蓑泊船集に旅  
人のと有る故に句選是を出せるならん。又此二句句選に見え

ずといへども、うき人の句も則ち句選に見えたり。韵塞とは椎  
の花の句のみ違ひあるまでなり。あながち華雀が杜撰ともい  
ひ難し。又句選の前書の越たがへりと説叢に侍れども、句選句  
解共に續猿蓑泊船集の通りの前書なれば、兩書の誤りには非  
ず。續猿蓑は芭蕉伊賀にて沾圃が選をとりしらべて草稿有り  
し由古今抄に見え侍れば、誤りとも云ひ難し。然れども井筒屋  
出版草稿の儘なれば、改めの届かざるも知るべからず。何れに  
も説叢に云へる如く韵塞の方の句解し易きにや。

栗といふ文字は西の木と書

きて西方淨土に便り有り

行基菩薩の一生杖にも柱に

も此木をもちひ給ふとかや

世の人の見つけぬ花や軒の栗







水鶏啼と人のいへばや佐屋泊

元祿七年の有磯海に前書とも此の如く見えたり○笈日記尾張の部に、隠士山田氏の亭にとめられて、と前書有り、此句に「苗の雫を舟に投込 露川」朝風にむかふ合羽を吹き立て 素寛」と脇第三有りて、支考左次巴丈と六吟の歌仙あり○按ずるに此の半歌仙前まで芭蕉の吟有りて、其後二ノ表より考次丈川覽が吟のみなり、然れば此時は芭蕉半歌仙にや○泊船集にも此句見えたり、前書同じ○按ずるに笈日記に元祿三年の冬と有り、次に同じ冬の行脚なるべし、はじめて此叟に逢へるとして「奥底もなくて冬木の梢哉 露川、小春に首の動く蓑虫 はせを」と有り、しかれば露川は元祿三年の入門にや、自得發明辨に左次は師に對面せぬ門人なりと、しかれば此半歌仙にて芭蕉は立ちて後、又半歌仙繼ぎて歌仙となせしなるべし。

大津湖仙亭

此宿は水鶏もしらぬ扉かな

未だたしかならねども元祿三四年の句なるべし、笈日記に「夏の夜や崩れて明しひやし物是に今宵の賦を加へて後猿蓑に入集す、と有りて、其次に本馬氏主馬が亭にて「ひらく」と上る扇や雲の峯「逆の香に目を通はすや面の鼻」の句あり、其次に、同じ津なりける湖仙亭に行きて、と前書あり、句同じ。

やがて死ぬけしきは見えす蟬の聲

元祿四年の猿蓑に此通り有り○泊船集には、けしきも、と見えたり○古今抄心切「いざさらば雪見にころぶ所まで」やがて死ぬけしきは見えす蟬の聲「されば此切の知る所はいざさらば何としてけしきは見えす何として前には心を残して心詞

發句集元祿四年とす



をそへねば意味なき故に、それと是との差別をいへり。されど未練のもの、云ひ勝に今いふ切字は無けれども、そこに心を残せりと云ひ、こゝに詞を添ふればといひて、かへりて百世の争ひともならめど、これらは五七の句絶の所にて、心も言葉も明らかなる故に心切とは別名なり(下略)○桃實集に此句人上渡世天道地變にもかゝれる名句ならんと、世舉つて云ひ侍りぬ、なまじひに注しても花實を損ふたぐひなるべしと兀峯が詞書あり○評林に、今日人間天變觀想なるべし、且の紅顔は夕の白骨と消え奢る者久しからずと云へるにひとしく、一たびは榮え一度は衰ふるならひ、悔まじき事にこそ○白氏文集に坐惜時節變、蟬鳴槐花枝。

撞鐘も響くやうなり蟬の聲

何れの年にや未詳といへども、貞享五年の句なるや、笈日記岐

桃實集元祿六年備前家  
士元峯が選

天變 轉變なるべし

發句集貞享五年とす

阜の部に「またたぐひながらの川の鮎鱈」の句、其頃同時ならん  
と見えたる句に並びて、此句に、稻葉山、と前書あり、則ち落梧荷  
分など、逍遙の地なり、次に十八樓の記有りて、其終に貞享五  
年仲夏と見えたり○泊船集にも稻葉山と前書有り。

山形領に立石寺といふ山寺

有り佳景寂寞として心すみ

行くのみ

閑さや岩にしみ入る蟬の聲

元祿二年の吟にして、奥の細道に、山形領に立石寺と云ふ山寺  
あり、慈覺大師の開基にして、殊に清閑の地なり、一見す可きよ  
し人々の勸むるによつて、尾花澤より取つて返し、其間七里ば  
かりなり、いまだ暮れず、麓の坊に宿かり置きて山上にのぼる、



岩に巖を重ねて山に松柏年古り、土石老いて苔滑に、岩上の院  
 院扉を閉ぢて物の音聞えず、峯をめぐり岩を這うて佛閣を拜  
 す、佳景寂寥として心すみ行くのみ覺ゆ、と有りて此句見えた  
 り○菅菰抄に、立石寺は千五百石を領して武州東叡山に屬す、  
 慈覺大師入定の地と云ふ、山中に眞蹟有り、坊舎多く、さまざま  
 の奇石ありて、絶景の地なり、元享釋書曰、釋圓仁姓壬生氏、野之  
 下州都賀郡人、延暦十三年生焉、九歳而事同郡大慈寺僧廣智、年  
 十五師傳教、年二十三於和州東大寺受具足戒、承和五年從遣唐  
 使藤常嗣入唐、十四年歸朝、仁壽四年四月任叡山坐主、貞觀六年  
 正月十四日寂、年七十二、同八年賜諡慈覺大師○評林に寂寥た  
 る山陰、黒谷の白布の流れ、日も漏れて清みたる清水に初蟬の  
 聲の絲の如く岩にしみ入る程の閑けさ、眼前に有りて妙々不  
 思議の句なり、石の流れ、涼風すきま考ふべし、又五七五の細み  
 にかゝる手強き句の有りさま、鬼神も感應すべし○按ずるに

桃鏡所持と云ふ

評林當れるや覺束なし、たゞ前書の趣にて解すべし○或曰、此  
 句眞蹟に、さびしさや、と有り、涼さやとも聞え侍る、初案にや、

盤齋うしろむきの像に讚す

團扇もてあふがん人の背中つき

發句集貞享元年とす

何れの年の吟にや未知、笈日記に見えたり○泊船集にも有り  
 ○綾錦に加藤氏盤齋は貞徳歌道門人○按ずるに盤齋は新古  
 今増抄の撰者なり、和歌に聞え有るものなれば是を慕へるな  
 ららん○師走袋に、仰げばいよ／＼高しの心なり、是を信仰す  
 るなり、團扇は時の季に入れたり、背中つきはうしろ向きの像  
 なればなり○赤草紙に「團扇とつてあふがん人の後ろ向」と有  
 りて、此句集も團扇もてと五文字して、下の五文字後ろ向を背  
 中つきと有り、後改むるか、此句盤齋後向の像の贊なり○發句  
 集貞享五年とし、前書に盤齋のうしろむきたる像世の中をう

論語子罕篇顔淵喟然歎  
 曰、仰之彌高、鑽之彌  
 堅



しろになして山里にそむきはてゝもすみ染の袖と云ふに、と有りて團扇取てあふがん人の後ろ向頭書忘水に此句諸集に、團扇もて、と五文字して、下、後つき、と有り。

明石夜泊

蛸壺やはかなき夢を夏の月

貞享五年の吟なり、笈の小文に前書かく見えたり○類柑子には前書、明石のとまり、と有り○猿蓑に笈の小文と同じく明石夜泊とあり○泊船集又同じ○自得發明辨に、初蟬集下卷に、蛸壺を駒が林の火桶哉 泥足是眼ある人のすべき事にあらず、又選者の入集すべき句にも非ず、辱くも猿蓑に、蛸壺やはかなき夢を夏の月と名句をいひ置き給ひし事、天下に知らぬ人なし、是自ら製の詞なり、下はいかやういひかへても、蛸壺此句の眼なり、其梅が集に惟然が句、閑かなる秋とや蛸の壺の内と有

り、是猶師の句の下手なるものなり、予が撰集の時も此句書きで贈れり、大きにいやしめ、我黨は小便壺へかい捨て侍るなり、下略○師走袋に、夏の夜の果敢なく明日を蛸は壺に入りて人にとらるゝが如し、はかなしとなり、題に明石の夜泊とあれば、昔平家の一門此所に暫く舍りて滅亡せしを、蛸の壺に入りて果敢き夢を見る如くなりとの心も有るべしと。

夏の月御油より出で、赤坂や

延寶七年不卜選の向の岡集に有り、其集の序に、山なし石なし、人あり作意あり、時に到りての言の葉草は、玉銚の巻にわかれて、古へ今の中道を目あてに、廣小路を過ぎて向の岡に著きぬ、一柳軒不卜と有り、此言廣小路を過ぎてと、延寶六年に江戸廣小路と云へる集を出す、其次の集なる故斯くは書きたると見ゆる、依之此集は延寶七年なるべし、尤其集中歳旦の部に於

發句集は元禄七年とす  
誤なり



春春大なる哉春と云云 桃青と見えたり、是延寶の句調なり、其連中幽山一鐵など檀林の英雄なり、素堂も信章と有り○目聞に孟遠曰「夏の月御油より出て赤坂や」御油赤坂の間十六丁にて、馬次なる事をとりはやされたり、宇鹿曰「翁の名人なる事猶々感じ侍る、いかに」と云ふに、其頃の句作ならば斯様に有るまじ「御油を出て赤坂近し夏の月」と有るべきを、今流行の眞只中に句作り給ふと云へり、是當らず、予が云、更に其時とても、赤坂近し夏の月、とは句作し給はじ、夏の月と履に置きては手柄なし、其上理窟のやうに聞ゆ、都て題の理窟と云ふ事有り、跡へもどるなり、たとへば「雪霜の骨となりてや梅の花 支考」是等東花坊が自讃の句なり、此坊理窟の堺をとくと辨へずと見えたり、されば本朝文選にも支考は理窟に倒ると雜の説に替けり、此梅の句全く理窟なり、題を除きて聞くと、き何の事とも聞えず、漸く題の力を借りて上の五七も聞ゆるなり、是等の類

謎々云  
文化三丙寅印本、俳諧  
手爾波抄北邊大人口授  
浦井有國識  
夏の月御油より出て赤  
坂や 芭蕉  
これらは上にある可き  
を下へまはされたるに  
て「夏の月や御油より  
いで、赤坂まで」とい  
ふべきを、一句を皆や  
にてうけて、夏の月の  
程無きを歎息せられし  
なり  
畢竟上にひける轉倒の  
やの一例なり、誠に翁  
の手際なりかし、是等  
にても、翁のてにはな  
自在に用ひられし事明  
かなり、今世の人志を  
勵ますべし、下略

ひ皆理窟なりと申し侍れば、鹿感じて曰「此類ひ理窟と云ふ事始めて聞けり、誠に師説の一つ是口傳なりとて、大感に及ぬ○發句集に赤坂とありて頭書に諸集赤坂やと有り○按ずるに諸集未だ多く見ず、曾良物語に赤坂かと有り、向の岡に赤坂やと慥に印板なり、又目圓の説を考ふれば、孟遠が傳書秘蘊集目圓等の類、蕉風の修行に其益少からず、さるが中に此一説に於て迷解けず、夫をいかにとなれば、延寶の吟は比喻専らなり、其間より次酌に眼をひらき、天和の虚栗是れに次ぐ、向の岡の句集餘人は専ら比喻なるに、桃青の句ははや次酌天和の風調こもりて見ゆる、さるが中に此夏の月の句は全く赤坂やと有りて、自ら御油を立て其夜赤坂へ著きたりとも聞えず、御油より月出て赤坂へ月入りたる眼前も定め難く、たゞ五十三次に此宿のみ近きを夏の月の短きにたとへて「や」とは置きたるか、しかれば宇鹿が云へる如く、御油を出て赤坂近し夏の月とは作



られぬなるべし。宇鹿が云へる如く作る時は、自らの旅行ならん、もし又旅行にあらでたとへたらんには、孟遠が言理窟なり、さて孟遠是をたとへと聞て理窟と云へるなり。それを理窟と云ふ時は赤坂やの句理窟のがるまじくや。又支考が梅は雪霜の骨と比喻したるを理窟と云ふ、全くの理窟ながら是を理窟と思はぬは享保の流行、麥林などが趣向の立所、多く此梅を雪霜の骨と作せる類なり。さるを理窟と思はぬは流行の人情にして、例へば厠に居て其臭氣の苦しからぬが如し、孟遠が如く理窟を嫌ふに到りては、延寶の句は桃青たりとも理窟を逃る事難からん。

## 大井川波に塵なし夏の月

元祿七年の吟なり。笈日記に元祿七年十月九日難波の病床の文に云、服藥の後支考に問うて、此事は去來にも語り置けるが

此度嵯峨にして侍る大堰川の句おぼえて侍るかと申されしを、あと答へて「大井川波に塵なし夏の月」と吟じ申しければ、其句園女がしら菊の塵にまぎらはし、亡き跡の妄執と思へばなしかへ侍るとて「清瀧や波に散り込む青松葉」○去來抄に曰「清瀧や波にちり込む青松葉」先師難波の病床に予を召して曰「頃日園女が方にて「白菊や目に立て見る塵もなし」と作す、過ぎし頃の句に似たれば、清瀧の句に案じかへたり、初の草稿野明が方にやあらん取りて破るべしとなり、しかれどもはや集々に載せ侍らば捨つるに及ばすと、名人の句に心を用ひ給ふ事を知らるべし○自得發明辨に「清瀧や波に塵なき夏の月」「白菊の目に立て見る塵もなし」「右兩句塵なきと云ふ事後にむつかしとて波に散こむ青松葉とは案じかへられたりと聞ゆ、退て案じ見るに、此塵志の赴き所同じさまなり、故に案じかへられたりと見えたり、西行上人も清瀧川の水の白浪とは強く詠みたま



ふなり、波に散込む青松葉と涼しく師の云たまふ強み、西行の歌に劣れりとは見えす。○陸奥千鳥に「清瀧や波に塵なき夏の月」と有り。○按ずるに清瀧川大井川桂川など嵯峨のほとりの川の名なり。○師走袋に清瀧の水汲せばや心太と云へる句を心なきものゝ變せしなり。波に散りこむ青松葉としては季なし、水汲せてや心太殊に奇なり。○按ずるに師走袋の説當らず、再案の事は前に有り。増山の井、夏季に常盤木の落葉とあり。

月はあれど留守のやうなり須磨の夏

貞享五年の吟なり。笈の小文に須磨と前書有りて此句又「月見ても物たらはすや須磨の夏」と二句有り。其紀行此句の次の文に卯月中頃の空も朧に残りて果敢なき短夜の月もいと艶なるに、山は青葉にくろみかゝりて、時鳥啼き出べき東雲も海の方よりしらみ初め(中略)○又次の文に、斯かる所の秋なりけりとかや。此浦の實は秋をむねとするなるべし、悲しさ淋しさ言はん方なく、秋なりせば聊か心の端をもいひ出づべきものをと思ふぞ。我心匠の拙きを知らぬに似たり(下略)○按ずるに、是等の文章を以て考ふべき事に侍る。又此文章は源氏物語須磨の巻に、曰、須磨にはいと心づくしの秋風に海はすこし遠けれど、行平の中納言の關吹き越ゆるといひけん浦波よるよるげにいと近く聞えて又なく哀れなるものは、かゝる所の秋なりけり(下略)○又是も源氏須磨の巻の中に、月のいとほなやかにさし出でたるに、今宵は十五夜なりけりとおぼし出で、殿上の御あそび戀しく所々眺め給ふらんかと思ひやり給ふにつけても、月のかほのみ守らせ給ふ。是は右近のせうが源氏の上を思ひ遣りたる詞なり。○小文庫に題須磨、月を見てものたらはすや、と有り。○眞蹟集にも「夏はあれど留守のやうなり須磨の月」と有り。其前書に、卯月の中頃須磨の浦一見す後の山

續古今集 行平  
旅人の心涼しくなりに  
けり關吹き越ゆる須磨  
の浦風

らとかや。此浦の實は秋をむねとするなるべし、悲しさ淋しさ言はん方なく、秋なりせば聊か心の端をもいひ出づべきものをと思ふぞ。我心匠の拙きを知らぬに似たり(下略)○按ずるに、是等の文章を以て考ふべき事に侍る。又此文章は源氏物語須磨の巻に、曰、須磨にはいと心づくしの秋風に海はすこし遠けれど、行平の中納言の關吹き越ゆるといひけん浦波よるよるげにいと近く聞えて又なく哀れなるものは、かゝる所の秋なりけり(下略)○又是も源氏須磨の巻の中に、月のいとほなやかにさし出でたるに、今宵は十五夜なりけりとおぼし出で、殿上の御あそび戀しく所々眺め給ふらんかと思ひやり給ふにつけても、月のかほのみ守らせ給ふ。是は右近のせうが源氏の上を思ひ遣りたる詞なり。○小文庫に題須磨、月を見てものたらはすや、と有り。○眞蹟集にも「夏はあれど留守のやうなり須磨の月」と有り。其前書に、卯月の中頃須磨の浦一見す後の山



は青葉に麗はしく月は未だ臙にて春の名残もあはれながら  
只此浦のまことは秋をむねとするにや心に物の足らぬ氣色  
あればと有り○師走袋に旅の憂さ何事も心に足る事は更  
なきに、月の出でたるを見て、此月さへ滿つると缺くるは有る  
事よと観じて、まして世の中は其筈の事と會得して、足らぬを  
も心に足らはずとなり○按ずるに此説當れるや知らず、源氏  
によれるか○桃鏡選芭蕉翁文集に有り、前書の如く見えたり、

ひらひらとあぐる扇や雲の峯

元祿三四年の間なるべし、笈日記湖南の部、其次の句に並びて  
有り、其詞書に、本間民主馬が亭に招かれしに、太夫が家名を稱  
して、吟章二句「ひらひらとあぐる扇や雲の峯」逆の香に目を通  
はすや面の鼻と見えたり○扁突に扇のひらひらとするは本  
間が舞臺にての作、時に取つての妙言、惣じて雲の峯はむつか

發句集元祿四年とす

丹野は主馬が俳名なり  
大津居住、風の上集に  
大津の浦、四の宮本間  
左兵衛は丹野の事なり

しき題なり○泊船集に大津丹野亭と有り○按ずるに元祿七  
年にも京師大津遊杖有りて、それより伊賀へ立ち起え、奈良を  
經て難波に旅寢ありければ、もしや元祿七年にや○師走袋に  
雲の峯の體をひらくと扇あげたるとの見立なり、其人に寄  
ての作殊更奇妙なり、

雲の峰いくつ崩れて月の山

元祿二年の奥の細道に湯殿山月山にての句なり、其文に、此御  
山の微細、行者の法式として他言する事を禁ず、よつて筆をと  
どめて記さず、坊に歸れば阿闍梨の需に依て三山順禮の句短  
冊に書く「すいしさやほの三日月の羽黒山」雲の峯いくつ崩れ  
て月の山「語られぬ湯殿にぬらす袂かな」と見えたり○花摘集  
に月山と二字前書あり、



湖や暑を惜む雲の峰

發句集に元祿四年とす

元祿七年の句なるべし。笈日記湖南の部に、納涼二句、去年の夏此邊に遊吟して游力亭に遊ぶと有りて「さゝ波や風の薫りの相拍子」湖や暑さを惜む雲の峰」と有り○泊船集にも有り○按ずるに、笈日記に元祿八年の詞にて去年の夏とある故に七年なるべしとす。

さゝ波や風の薫りの相びやうし

發句集元祿四年とす

元祿七年の句、右前章に出す。

六月や岑に雲おくあらし山

發句集元祿七年とす

或時集は神叔嵐雪合體の集也、神叔は季吟門人也

元祿七年の或時集に、雲の峰と前書有り○笈日記嵯峨の部に嵐山と有り○むつ千鳥に、嵯峨に籠りし頃と有り○古今抄に

是は嵯峨の落柿舎にて名所三歌仙の發句なり、又六月と音に吟すべし。人もしみな月と訓にとなへば語勢に炎天のひらきなからんとぞ。これらは音訓の妙用と云ふべきなり○陶淵明四時詩、春水滿四澤、夏雲多奇峰、秋月揚明輝、冬嶺秀孤松○赤草紙に、雲置く嵐山と云ふ句骨折りたる所と云へり。

丈山の像

風薫る羽織や襟もつくろはず

發句集に元祿四年とす

何れの年の吟にや未知、小文庫に羽織はと有り○泊船集小文庫に同じ○按ずるに丈山は石川丈山なるべし。白扇倒懸東海天と作せし人なり「渡らじなせみの小川の清けれど老の波よる影もはづかし」と詠みて世を避けたると云ひ傳ふ。詩歌に英才の名有り○師走袋に、此句丈山の像の諷と有り、其身の徳を風薫るに比し、しかも威儀容貌にもかゝはらぬを、羽織の襟を



も繕はずとは云へり。

### 小倉山

#### 松杉をほめてや風の薫る音

發句集元祿七年のよし  
小倉山常寂寺と前書あり  
小倉山は定家卿別業有りし所なり

元祿七年の句なるべし。笈日記嵯峨五句と有りて「時鳥大竹原をもの月夜」落柿舎「五月雨や色紙まくれし壁の跡」野明亭「清瀧の水汲みよせて心太」小倉山の山院松杉をほめてや風の薫る音」嵐山六月や峰に雲おくあらし山清瀧難波の部に發句有り爰に略すと有り○こゝを以て考ふれば古今抄に嵐山の句には名所三歌仙の發句なりと有り、その三ツの名所此小倉山の句、清瀧の句、嵐山の句是三ツにや、さあらば是元祿七年なるべし。

#### 瓜の花雫いかなるわすれ草

發句集は貞享四年とす  
天和四年は貞享元年なり、類柑子は其角通作、角は寛永四年二月二十九日歿す、鉢たゞきの記は舉白集に出でたり

天和の末、貞享の初の吟なるや、類柑子に其角が瓜の一花の文あり、其文に曰、河野松波老人宗對馬守公の茶道一物三用の器をもてあそべり、長嘯翁のめで給へる記あり、ほとゝぎすまた聞はしする比、かの鉢たゞき所望して見んと、芭蕉翁高山何がし言水等是かれ訪ひ侍りけるに、もとよりして風月の窓の灯、雨の扉に修竹わかやかに茂りて、老を養ふあらましなるに、折から風爐の蟹目にわきたつ程なりとて、半日のあしらひいと興あり、床のうち無弦の琵琶を据ゑて、古き長瓢のわれたるに、花雫より雫ほちくと落ちて、誰となく後をおびやかしたるしめりやるかたなし、主の涼を味ふる心にくさをうかひ居たるに、瓜の花をもて此瓢にいけられたり、花よりもれ、蔓より露を結べるに、水はた溢れて扇を忘る、廬岳の雨を聞く心地したり、撥面の潤へる風情をいは、戸難瀬の瀧に尾を曳きけん龜のけしきしたり、水聲玉散るばかり、此一花に夏を流して、老人の茗話

茶道には雷中に花を生けざるとの語あり



忘れがたし。月よくさし入り、時鳥間近う飛びちがふ程の窓ならば、花をせぬを本道とするなり。今は時鳥すかりてあるに、久しう取出さぬふくべのけしからず漏りて閑席を犯すまゝに、花は活けたりとて一句づゝ望まれ侍り。是らの風興は二昔になん、瓜の花平いかなるわすれ草。翁「花瓜や絃をかしたる琵琶の上 言水」此花に誰誤て瓜持參 晋子と見えたり。此類柑子に百之が眞名叙あり。甲申暮春とあれば、是元祿十七年なり。瓜の一花文中に、今は二昔なん、と有るを以て、元祿十七年より二十年已前は貞享二年に當る、貞享二年の野ざらし紀行に、旅に年とりて其四月の末に深川へ歸庵と見えたり。しかれば此二昔は貞享元年か二年か定めがたし。○發句集に貞享四年の句とし、前書に河野松波家にて古き長瓢に瓜の花を生けて、下に無弦の琵琶を置きて、花生より落つる平を撥面にうけたり、一句を望みける時と有り。

夕にも朝にもつかず瓜のはな

發句集元祿三年とす、  
幻住庵に居住は元祿三  
年夏より四年の秋まで  
也

元祿二三年の間の吟なり。類柑子に、幻住庵にこもれる頃、と前書あり。○古今抄に二段切、水無月の曇き日にも、瓜の花のみ露けて、夕顔にも朝顔にも非ずとは、體に二段の差別なるに、つかずとは詞の双關にして、爰に句法をも稱すべし。○評林に西行「雲雀立つあら野に生ふる姫百合の何につくともなき心哉」此二句二段切なるべし。朝にもとは朝顔なるべし、夕にもとは夕顔なるべし。朝顔夕顔にもあらず、ただ瓜の花なりと、一句に二句の法を立てたる句意なり。夕顔は實も色々あり、瓜もいろいろあれど、夕顔とはいはず、只瓜の花と定めて、朝夕の働有り、尙考ふべし。○目圓に西行の歌に心性定まらずといふ事を題にて人に詠みてやり侍る「雲雀立つあら野に生ふる姫百合の何につくともなき心かな」此歌をとりて「夕にも朝にもつかず



瓜の花「原中や物にもつかず鳴く雲雀」○按するに評林是をいへるなるべし。二段切の法をいへるは古今抄なるべし。夕顔は實も色々有りと云ふより、末の評は評林作者の意なるべし、句意に當れりとも見えず。

花と實と一度に瓜のさかり哉

何れの年の吟にや未知、泊船集に見えたり○師走袋に、是人にたとへて風情も有りて其心正しき者への挨拶なり、瓜は花の頃則ち實も一度に賞翫のものなれば、花實相兼ねる人への挨拶なり○按するに是挨拶の句なるか不知、只眼前なるか。

はつ眞桑堅にや割らん輪にやせん

元祿二年奥羽行脚の吟なり、されども此句奥の細道に見えず、泊船集に有り、たてにやわらん輪にや切らん、此句は酒田にて

不玉は潮庵不玉なり、  
芭蕉門人なり

の吟なり、何れの集にや、四ツにや割らん輪にやせんと誤り記したりと見えたり○奥羽行といふ一集有り、是は以哉坊が美濃の行脚の一書なり、彼の書に酒田何某が家珍翁眞蹟を寫して出せり、其前書に近江屋志玉亭にて納涼の佳興に瓜をもてなして、發句を乞うて曰く、句なきものは食ふ事能はじと戯れければ、はつ眞桑よつにや割らん輪にやせん　はせを「初瓜やかぶり廻しを思ひ出づ　會良」三人の中に翁やはつ眞桑　不玉「興さめて心もとなし瓜の味　志玉」元祿二年晩夏末と見えたり○説叢に曰く、菊阿口傳に近江屋志玉亭にして納涼の集に瓜をもてなし、發句を乞うて、句なき者は食ふ事能はじと戯れければ、と前書有りて此句あり、志玉は出羽の國庄内町司にして此眞蹟の一軸を家珍とすと云々、句は四つにや割らん輪に切んと有り、句選には、たてにやわらん輪にやせんと有り、又、四つにやせんとも有り、傳寫の誤りか又後に直されたるや未



詳なり。最初眞蹟此の如し。是は元祿二年晩夏の吟也。曲禮曰。天子削瓜者副之。爲國君者華之。云云。又小笠原家篋書に云く。熟したる初瓜は二に割り又横に切りて參らす。さかりの時は割らずに其まゝ切り。土用過ぎては又割ると云云。和漢斯くの如き禮あり。是初眞桑瓜を賞して。堅にや割らん輪にやせんと案じ入る深志ならん。○按ずるに。漢の禮をふくめるにやいぶかし和にいふ所。世に皆知る所なり。是によるか。晩夏に初の一字不審。彼國は晩夏に到つて初眞桑出づるにや。

柳骨柳片荷は涼し初眞桑

市の庵集は元祿七年の集、酒堂選也

元祿七年の吟なり。市庵集に閏五月二十二日落柿舎亂吟。柳骨柳片荷は涼し初眞桑。はせを問引捨てたる道中の稗。酒堂「むら雀里より岡に出歩行て。去來脇第三ありて。支考。丈草。素牛。六吟の歌仙あり。○按ずるに五月に閏ありたるは。元祿七年

法師とは支考也、自らかく云ふ

なり。此年前の五月十一日東都を立ちて閏五月加茂參詣。しかれば此頃京に遊杖と見えたり。○東西夜話に「柳骨柳片荷は涼し初眞桑」と云へるは。初眞桑の大切なれば片荷と云へるか。法師が曰く然らず。なにがし實相院など云へる山伏の旦那もどりのさまなりと見て置くべし。次の夜ある人の問ふ。風雅の理窟と云ふはいかに。法師曰く。風雅に理窟なし。理窟はおのれが心の理窟なり。たとへば理窟あるものは柳骨柳の句を理窟に見なし。理窟なきものはたゞ其儘に見て置くなり。俳諧は心を學ぶべし。人の句を學ぶべからず。

我に似な二一つにわれし眞桑瓜

何れの年の吟にや未知。泊船集に。是は門人に送り遣はされしと有り。○發句集に。之道に對して。と前書有りて元祿七年の句とす。○按ずるに。門人に送るに。我に似な。といふ事。其師に似す

發句集元祿七年とす、之道は大坂住、飄竹と云ふ、芭蕉門人、似鳩覺書には延寶天和の句とあり、